カバー・本文イラスト：いのまたむつみ

小説 ドラゴンクエスト

DRAGON QUEST STORY

高屋敷英夫

小説 ドラゴンクエスト

高屋敷英夫

ENIX

DRAGON
QUEST

エニックス

ISBN4-900527-07-6 C0093 P1300E 定価1,300円(本体1,263円・税37円)

小説 ドラゴンクエスト

小説　ドラゴンクエスト

若き勇者による愛と勇気のファンタジー物語

イラスト・いのまたむつみ

序章

ラダトームの南方に、ぶきみな島が浮かんでいる。年中濃い霧と雲におおわれていて、その雲からたえず鋭い稲光を発している。島のまわりは潮の流れがはげしく、無数の大渦とあらあらしい波が、近づく者をこばんでいる。
この島は、まるで巨大な蜃気楼のように、あるときは遠くに見えたり、あるときは近くに見えたり、またあるときは突如視界から姿を消したりする。そして、この島から風が吹いてくると、いつも生臭い血の匂いがするという。
この島へは、けっして普通の人間はわたれない。悪魔に魂を売った魔物だけがわたれるのだ。アレフガルドを支配している、悪の権化・竜王の島だ。
だが、もともと竜王の島だったわけではない。かつては、アレフガルドを創造したといわれる精霊神ルビスが祀られ、アレフガルドの聖地として栄えていたのだ。そして、アレフガルドもまた、平和と栄華を謳歌していた。竜王が出現する一三四八年までは——。

アレフガルド暦一三四八年。竜の年、竜の月。
各地から選りすぐられた賢者、高僧、予言者たち約三〇〇名がラダトーム城に集まり、ラルス八世の前でおごそかに恒例の「占いの儀」がとり行われていた。毎年この日に、あくる年の吉凶を占うのである。

だが、もはや予言者や占いなどは無意味だった。だれも知らないところで、すでにおそろしいわざわいの手がのびていたのだ。

凶々しいまっ赤な三日月がラダトーム城の尖塔にかかったときだった。突如魔物の軍団がラダトーム城を強襲し、宝物殿から国の至宝である光の玉を奪い去ったのである。かつて、アレフガルドがおそるべき大魔王に支配されそうになったとき、勇者ロトが神から授かった光の玉でその大魔王を倒し、このアレフガルドに平和をもたらしたという、その光の玉を――!

城内は騒然となった。だが、その直後だった。わざわいは本性をあらわしたのだ。かつてなかった大地震がアレフガルド全土を襲ったのだ。

すさまじい地鳴りとともに大地は恐ろしい口をあけて裂け、安眠をむさぼっていた人々は瞬時のうちに瓦礫の下敷きになった。そして、いくつかの休火山が突如噴火し、山間の町や村はその熔岩にのみこまれたのだ。

特に震源地である精霊神ルビスの神殿のあるイシュタル島はひどかった。大理石で築かれた巨大な白亜の神殿は瞬時にして崩れ落ち、押し寄せた大津波は一瞬にして港や町をのみこんで海底

に連れ去った。また、島とリムルダール西端を結ぶ虹の橋とよばれた大橋も無残に崩壊し、はげしい潮の流れに消えた。

地鳴りは遠く西の地まで響きわたり、噴煙ははるか南海の国の村からも見えたという。

三日続いた地震がやっとおさまったとき、島は大きく姿を変え、神殿はあとかたもなく消滅し、かわりにそこに建っていたのはそらおそろしい異形の城だった。

突如出現した暗黒の城を、対岸の人びとはあ然として眺め、なす術を知らなかった。そして、人々の耳に、ぶきみな声が響きわたったのである。声の主は、自らを竜王と名のり、こう宣言した。

「我こそはこのアレフガルドの正当なる支配者、光の玉の真の持ち主なり。聞け！　愚かなる人間どもよ。いまこのときより、この地は我が領土となった」

城の上空には暗雲が立ちこめ、異様な魔物が飛びかっていた。

ラルス八世は、ただちに討伐軍を編成し、攻撃にでた。ラダトームの南の港には幾百幾千もの軍船が集結し、リムルダールやメルキド、さらには他国からも援軍が派遣され、幾十万もの騎士や兵士が海岸線を埋めた。

だが、戦いは二カ月ともたなかった。島へむかった幾百幾千もの軍船は、上空からのキメラ軍団の強襲と、竜王の城の尖塔からはなたれたいくえもの電光に直撃されて炎上したのだ。

断末魔の悲鳴は荒れ狂う海を越えてラダトームの城下までとどろき、燃えあがる炎はアレフガ

ルドの空を焦がした。

また、竜王の支配下にある様々な戦闘軍団や部隊、竜王の魔力によって巨大化した魔物、天変地異で凶暴化した怪獣たちが、つぎつぎに町や村を襲い、破壊と殺戮をくり返したのだ。

こうして、討伐軍は全滅し、多くの町や村が消滅した。かろうじて町を守ることができたのは、ラダトームの他にドムドーラ、リムルダール、ガライ、メルキドのわずか四都市。そして、無数に存在した村の中で、生き残ったのはマイラの村ひとつだけだった。

この戦いで、アレフガルドは総人口の三分の二を失ったという。

緑豊かな田園は一面の荒野と化し、草原は砂漠となり、豊かな水量を誇った大河は毒とヘドロに汚染され、森林は魔物たちの叫びに満ちた。

かつて、詩人たちが競ってその美しさを歌ったというアレフガルドの大地は、ほんのわずかの間にその姿を暗黒の世界へと変え、アレフガルドは長くて辛い冬を迎えたのだ。

そして、時が流れた――。

島の北端にそびえるぶきみな竜王の城、その奥にある竜王の間の玉座の前で、魔将のひとりである大魔道のザルトータンが、燃えさかる炎に青い水晶球を高くかざしながら、一心不乱に呪文を唱えていた。

一三四八年の戦いで、多くを失ったのは人間の側ばかりではなかった。竜王もまた、人間たち

の必死の抵抗に多くの手勢を失っていた。そのために、強大な力を秘めていた光の玉は往年の輝きを失い、竜王の魔力もそれにともなって弱くなっていたのだ。だが、魔界の大魔神は、
「ひとたび輝きを失った光の玉が、ふたたび力を貯え輝きを復活するまで、ちょうど二〇〇年の歳月を要するであろう」
と、竜王に告げたのだ。アレフガルドのみならずこの地上界を、そして天界をも支配しようともくろむ竜王にとって、光の玉の復活のときこそ、新たなる侵略開始の記念すべき日となるのだ。
竜王は大魔神の言葉を信じ、そのときがくるのをじっと待った。そして、その二〇〇年目まで、あと十七年を数えるだけだった。
大魔道ザルトータンがかざしていた水晶球が、ピカーッとまばゆい光をはなったかと思うと、ピシッピシッ——と、いきなりその表面にいくつものひびが走った。はっとザルトータンの顔色が変わった。
「ゼイゼイ——」
ぶきみにのどを鳴らしながら竜王は、おそろしい眼をさらにこらして、ザルトータンを見た。
ザルトータンは、おもむろに進み出ると、竜王の前にひれふして告げた。
「申しあげます。ロトの血をひく者が誕生いたしました」
「な、なにっ、ロトの!?」
さすがの竜王も驚いたようだ。いきおいよく玉座から立ちあがると、ザルトータンの前に行っ

て水晶球をのぞきこんだ。ひびの走った水晶球のその奥に、小さな赤児の像が白く浮かびあがっている。

「この地より西南にあるドムドーラの町でございます。それに陛下、その者が王女の愛を得るとき、そのとき陛下を倒すほどの力を持つと――」

「王女だと!?」

「七日前、ラルス十六世に女の世継ぎが誕生し、ラダトームはその喜びで沸きかえっていると聞いております。その幼い姫のことではないかと――」

「ならばザルトータンよ!」

竜王は、水晶球を奪い取って粉々ににぎりつぶすと、大声で命じた。

「ただちに手の者をむけい! ロトの血をひく者とドムドーラの者どもをみな殺しにして血祭りにあげるのだ! そして、ラルス十六世の姫をもな!」

ちょうどその日、ドムドーラに住む若夫婦に玉のような男の子が誕生した。

その夜、この若夫婦を三人の旅人が訪ねてきた。一人は年老いた魔道士だった。魔道士は、羊皮紙に描かれた一枚の古地図を男の子のかたわらに置くと、いずこともなく去って行った。二人目は僧侶だった。僧侶も、青く輝く神秘的な命の石を男の子の紅葉のような小さな手に握らせて、いずこともなく去って行った。そして、三人目の派手な衣装をまとった道化師も、美しい虹色の

キメラの翼を男の子に託して、いずこともなく去って行ったのだ。
若夫婦は、王の年の王の月、しかも王の日の正午に生まれた男の子の穏やかな寝顔と、三人の旅人が置いて行った古地図と命の石とキメラの翼を見て、怪訝そうに顔を見合わせるばかりだった。
かつてこのアレフガルドには、王の年の王の月、王の日に生まれた男の子は、精霊神ルビスの元より送られた勇者であるといういい伝えがあった。だが、長い歴史のなかで、いつの頃からか人々の記憶から忘れ去られてしまったのだ。

数時間後、深い眠りに落ちていたドムドーラの町を、竜王のドラゴン部隊が強襲した。
魔物の襲来に備えていた兵士や自警団は、必死に応戦したが、ドラゴン部隊はつぎつぎ火をはなち、おりからの強風にあおられて、町は一瞬のうちに火の海と化した。着の身着のまま家から飛び出してきた人たちに、ドラゴン部隊は容赦なく襲いかかった。
すさまじい轟音を立てて燃えあがる炎は、真冬の空を焦がした。
翌朝――。焦土と化したこの町を、音もなく冷たい雨が濡らしていた。
顔をちぎりとられた幼い少女の屍が、のどをひき裂かれた兵士の屍が、胴をまっ二つに斬り裂かれた老婆の屍が、少年の屍が、子をかばうようにして倒れている母の屍が、無数の屍が、足の踏み場もないほどいたるところに転がっていた。それらの屍を、アレフガルド中から集まってき

たのではないかと思われるほどの禿げ鷹の群れが、わき目もふらず無心についばんでいた。
雨はいつの間にか雪に変わった――。

第一章　勇者ロトの血をひく者

アレフガルドの中北部に、年中雪におおわれた険しい山脈が東西に連なっている。アレフガルド連峰だ。この連峰はいまでは活動を休止しているが、一三四八年の大地震のときに突如噴火した火山群のひとつで、いまでもこの地方の人びとから火魔の棲む山としておそれられている。

このアレフガルド連峰の南方に、荒涼とした広大な丘陵地帯が広がっている。ラダトーム平野だ。この平野の海寄りのところに、ラルス家の居城であるラダトーム城と、その城下であるラダトームの町がある。

かつてこの地は、アレフガルドの政治、文化、交易の中心地として栄華をきわめた。

だが、一三四八年の竜王との戦いで、様相は一変した。竜王のくり出す軍団がつぎつぎにこの地を攻め、町は戦場と化したのだ。「王都死守」をかかげ、陣頭指揮にあたったラルス八世は、他国からの援軍をこの地に集結し、はげしい戦いのすえ、かろうじて城と町を守りぬいたが、この戦いをさかいにラダトームからかつての面影は消えてしまった。栄光は過去の幻影であり、栄華は伝説となった。

そして、今——。このラダトームの町で代々つづいてきた鍛冶職人の家に、ひとりの息子がいた。明るくて元気な、親思いの正義感の強い少年だった。少年の名を、アレフといった——。

1　十五歳の誕生日

「竜王ーっ！」
アレフは大きく宙に跳ぶと、
「覚悟ーっ！」
手製の樫の木の剣を、思いっきり振りおろした。
ビュン——！
夜明け前のまっ暗な空に、小気味よい音が響いた。
真冬のラダトーム平野の寒さはきびしい。夜明け前はなおさらだ。アレフガルド連峰から吹きつける凍てつくような寒風が、地鳴りのような音をたてて、容赦なく襲ってくる。氷点下二〇度を越えることも珍しくない。吐く息はまっ白で、剣をにぎる指先の感覚もほとんどない。
だが、今朝のアレフはいちだんと張りきっていた。と、いうのは、今日で十五回目の誕生日を迎えたからだ。またひとつ大人に近づいた。そう思うと、心がはずむのだ。
「大人になったら竜王を倒すんだ！　勇者ロトのように——」というのが子供のころからのアレ

フの口癖だった。
無理もなかった。アレフガルドの子供たちは、幼いころから子守歌がわりに『勇者ロトの伝説』を聞かされて育つからだ。かつて、神より光の玉を授かった勇者ロトが、大魔王を倒してこのアレフガルドに平和をもたらした――と、いい伝えられている伝説を。
だが、友だちはだれもばかにして相手にしてくれなかった。伝説は、あくまで伝説なのだ。九歳のとき、父のガウルにもいったことがあるが、ガウルは、「ばかなことをいうんじゃない！」と、いきなり小さなアレフを壁までなぐり飛ばした。
それ以来、アレフは人前でそのことを口にすることはやめた。だが、年を重ねるたびにその思いは強くなり、三年前から、町の中央にそびえているこの大聖堂の塔の上で剣の稽古をするのが、日課になった。
塔の上は、腰の高さほどの頑丈な塀にかこわれていて安全だし、そのうえだれにも気づかれる心配がないからだ。
竜王との闘いに思いをはせながら、雨の日も、風の日も、雪の日も、一日たりとも休むことなく、稽古をつづけてきたのだ。
最初のころは、手製の樫の木の剣が重くて振りまわすのさえやっとだったが、いまでは自己流とはいえ腕もあがり、片手で軽々と剣を振りまわすことができる。
「ターッ！」

アレフは渾身の力をこめて、空を斬り裂いた。
全身汗でびっしょりだ。体中からまっ白な湯気が立ちのぼっている。額から流れ落ちる汗が心地よかった。小一時間ばかり動きまわったというのに、呼吸ひとつ乱れていなかった。東の空はうっすらと明るくなりかけてきた。
いつものように塀の隅の隠し場所に剣をしまうと、アレフは塔の階段をすばやく駆けおり、大聖堂の裏口から横の路地に飛び出した。そのとき、塔の鐘が鳴り響いた。六時を告げる朝一番の鐘だ。
家に帰ってこっそり裏口から台所に入ると、すでに父のガウルは朝食を終え、お城へ出かける支度をしていた。
鍛冶職人のガウルは、定期的にお城に出むいて、剣や槍などの武器を修理することになっている。その日は、いつも朝が早い。だが、それが今日だということを、アレフはうっかり忘れていたのだ。
「お、おはよう。散歩に行ってたんだよ。早く目がさめたから」
一瞬うろたえたアレフは、聞かれもしないのにいいわけをすると、
「早く食べて支度しろ」
と、ガウルは、食卓のかごにもられている黒パンをあごで差した。
「支度っ!?」

アレフは驚いて聞きかえした。
「ぼくを連れてってくれるの⁉」
「今日でおまえも十五でしょ」
流しからしぼりたての山羊の乳を持ってきた母のジェシカが、アレフのコップになみなみとつぎながらそういうと、
「いずれおまえもお城の世話になる。どうせ紹介するなら早いほうがいい。そう思ったんでしょ」
と、ガウルを見ていたずらっぽくほほえんだ。
「やったーっ！」
アレフは思わず叫んだ。
思いもよらないことだった。子供のころからアレフは、早く町のそとに出てみたいと思っていた。というのも、いままでアレフは、いやラダトームの子供はだれでもそうなのだが、高い城壁にかこまれたこの町から、一歩もそとに出たことがなかったのだ。そとには魔物がひそんでいるから、十八歳になるまでは親の許可なしに勝手に町のそとに出てはならないと法で決められているのだ。
それがやっと出られるのだ。城までは、子供の足でも一〇分とはかからない距離だ。それでもそとはそとだ。アレフは、十五歳の誕生日に感謝した。
だが、さらに思いもかけないことが、アレフの行く手に待ち受けていようとは、このときだれ

も知る由もなかった。
十五歳の誕生日――それは、アレフの運命を大きく変えた日でもあった。

2　謎の光

城から派遣されている兵士たちが、厚くて重い城壁の門を開くと、とたんに寒風が吹きこんできて、
「うわっ」
アレフの縁の広いフェルトの帽子があわや飛ばされそうになった。アレフはあわてて帽子を押さえると、深々とかぶりなおしてキッと前方を見た。
門のそとには、リボンのような一本の細い道がのびていて、小高い丘の上のラダトーム城につづいている。
アレフはゆっくりと感触をたしかめるように、城門のそとの大地を踏んだ。そして、深呼吸すると、力強くガウルのあとを歩き出した。
深い堀と二重の城壁にかこまれたラダトーム城は、大聖堂の塔から見て想像していたよりもはるかに巨大だった。
城壁の東西南北には四つの円塔がそびえ、中央のやや左側には、さらにそれより数倍もある巨

大な円塔がラダトーム平野を見おろすようにそびえている。その先端で三角旗が寒風になびいていた。兵士たちはその塔から日夜竜王の襲撃に備えて四方に眼を光らせているのだ。そして、その右にある赤い屋根の荘厳な建物がラルス十六世の宮殿だ。

要塞のような城門の前に到着すると、おもむろに跳ね橋がさがり、ガウルと顔なじみの兵士たちがなかに迎え入れてくれた。この城門をぬけ、石畳の坂道をのぼると、階段の上にもうひとつの中門がそびえていた。

そのなかで、ひげづらの伍長が待っていた。見あげるような大男だった。ガウルがアレフを紹介すると伍長は、

「これでガウルも安心だな。きっと立派な跡取りになる」

と、黄色い頑丈そうな歯を見せて笑った。

「作業の前にガウルと段取りの打ち合わせをしなければならん。それまで城のなかを見物してきてもよいぞ」

「ほんとですかっ!?」

アレフは思わず目を輝かせた。

「二〇分もあれば終わる。この先の兵器倉の奥に鍛冶場がある。そこで待っている」

と、伍長が右手の建物を指差したとき、すでにアレフは元気に駆け出していた。

「くれぐれも失礼のないようにな」

あわててガウルが叫んだが、そのときすでにアレフの姿は、兵舎の角に消えようとしていた。
「しょうがないやつだ。元気だけがとりえでしてね」
ガウルは、伍長を見て苦笑した。
兵舎の間をぬけると、アレフは広い中庭に出た。中央に水の涸れた噴水があり、汚れた雨水がたまっている水槽には、大量の枯葉が沈んでいる。庭をとりかこむように植えられた糸杉とオレンジの木が枯れかけて、葉を落としたまま風に震えていた。そして、正面の階段の上には宮殿の門があり、その奥に赤い屋根の宮殿が見えた。
アレフは、宮殿に見とれながら、噴水のそばまで行った。そのときだった。ひときわ強い風が吹いて、アレフの帽子が吹き飛ばされてしまった。
帽子は風にのって糸杉を越えて、城壁のすぐそばにある崩れかけた古井戸のふたの上に落ちた。古井戸にはつるべやつるべをあげさげするための滑車もなく、古い板のふたがしてあるだけだった。いきおいよく古井戸の縁に飛びのったアレフは、ふたに片ひざをつき帽子を拾おうとした。
と、
「あわわわっ!?」
ひざをついた部分がいきなり、めりめり――と音を立てて割れたのだ。長年風雨にさらされたまま放置されていたので、腐れかかっていたのだ。
「あ～～っ！」

アレフは、悲鳴をあげながら割れたふたとともにまっさかさまに落下した。
古井戸の底には、積もった腐葉土の上に苔が密生していた。その苔の上にアレフは背中から落ちた。全身に衝撃が走り、一瞬息ができないほどだった。
だが、幸いなことにかすりきずひとつなかった。腐葉土と苔が衝撃をやわらげてくれたのだ。
「あいた――」
顔をしかめながら拾った帽子をかぶると、アレフは古井戸の内壁に飛びついてのぼりはじめた。
古井戸の内壁は、人間の頭ほどの大きさの石を幾重にも積んで作られていた。アレフはその積み重ねた石の継目に指をかけ、爪先をかけ、全身に力をこめながら、一歩一歩のぼった。
アレフの頭上に円形の穴がぽっかりあいていて、そのはるか上空をどんよりとした冬の雲がゆっくりと流れている。古井戸の深さは、ゆうに普通の民家の高さの二倍か三倍はありそうだ。
と、ズルッ――。爪先が滑って、
「うわっ！」
やっと三分の一ほどのぼったところで、また背中から苔の上に落ちてしまった。
「ちっきしょーっ！」
悔しそうに内壁を見あげたときだった。キラッ――と、アレフの目の端をひとすじの光がかすめた。
「ん？」

見ると、足元の崩れかけた壁のわずかな隙間から白い光がもれていた。
アレフは、いぶかりながら、壁に手をかけて、おそるおそるその隙間をのぞいた。が、つぎの瞬間、
「うわっ!?」
驚いて飛びのいた。
なんと、ひとりでに壁が奥に崩れ落ちて、人ひとりがやっと潜れるくらいの穴がぽっかりと口をあけたのだ。その奥の暗闇で、小さな玉のような光が、まるでアレフを誘うかのように、きらきら輝いていた。
「な、なんだ、ありゃ――?」
茫然としてアレフはそのふしぎな光に見とれていた。そして、はっと我にかえったときは、すでにその穴のなかに顔を入れていた。と、それを待っていたかのように、光はゆっくりと奥へむかってまるで生き物のように動き出した。
蜘蛛の巣を払いながら狭い穴のなかをはって、アレフは魅入られたようにあとをついて行った。
いつの時代のものか判断できないが、どうやらこの穴は、緊急時に備えて作られた逃亡用の秘密のぬけ穴のようだ。きっと宮殿の下につづいているに違いない――そう思いながらしばらく行くと、穴は二つに別れて、そこでアレフは一瞬光を見失った。だが、右の穴の奥で光はアレフを待っていた。アレフが進むと、光もまた奥へと進んだ。

行けば行くほど、穴は複雑に入り組んでいた。ほかの穴と十字に交わっているところもあれば、Tの字のところもある。水たまりのところもあれば、崩れ落ちているところもある。

やがて崩れかけた階段にぶつかった。身をかがめながら、足を踏みはずさないように慎重にこの狭い階段をのぼりきると、そこは行きどまりだった。

と、壁の前で光がすーっと消えた。だが、アレフが光が消えた壁を両手で押すと、壁はおもむろにむこう側に開いて、なんなくぬけ穴のそとに出た。

光はアレフの出てくるのを待っていた。そこはある一室の大きな柱の陰だった。壁は、秘密の隠し扉になっていたのだ。蜘蛛の巣や泥や土で汚れた顔を手で拭きながらアレフは柱の陰を出て、

「あっ!?」

と、思わず目を見張った。

「すげえっ!」

豪華な装飾品や銀の燭台、高価な宝石類、宝石をふんだんに散りばめた首輪や腕輪や耳飾り、名画や彫刻、美しい陶器などの美術品、幾重もの絹の織物、それに純金や銀でできたヨロイやカブト、盾、剣、槍などの武器類まで、ところ狭しと陳列されていた。宮殿の地下にある宝物殿だったのだ。

だが、それらのものよりもっとアレフが目を見張ったものがあった。目のくらむような美しい光をはなつ赤い石だった。両手にすっぽりと入るほどの大きさだが、この宝物殿のなかでも、ひ

ときわ美しく輝いていた。
と、アレフをここまで導いてきたあのふしぎな光が、その美しい赤い石のなかに溶けて消えたのだ。
「こ、これは――!?」
アレフは、魅入られたままこの赤い石の前から動けなかった。
と、光が一段と輝きを増した。と、その光に吸い寄せられるようにアレフはその石に近づくと、そっと両手をのばした。自分の意志や意識とは関係なく、なにかにとりつかれたように勝手に体が動いたのだ。
一〇本の指が、美しい赤い石の表面にそっと触れた。と、その瞬間、なんと美しい光が石のなかに吸収されて消えてしまったのだ。
「うわーっ!?」
驚ろいてアレフは思わず手をひいた。
その拍子に、アレフの手が横にあった金のカブトにあたった。カブトは金属音を立てて床に落ち、隣に陳列してある槍や盾などの武器をつぎつぎに倒した。騒々しい金属音が宝物殿に響きわたった。
「なに者だーっ!?」
すかさず見張りの近衛兵たちが入口の方から駆けつけると、

「曲者だーっ！」

「であえっ、であえーっ！」

口々に叫びながら、アレフの首に鋭い槍の先を突きつけた。

アレフは、まっ青になって、ただうろたえていた。近衛兵に見つかったことより、赤い石の光が消えたほうが衝撃だったのだ。大変なことをしてしまった、という自責の念にかられていたのだ。

近衛兵たちはすぐ赤い石の変化に気づいてか、驚きのあまり一瞬声がでなかった。と、そこへ、

「なにごとだっ⁉」

と、別の近衛兵を従えた近衛隊長が駆けこんできた。

「こ、こやつめが！」

槍をつきつけていた近衛兵のひとりが光の消えた赤い石を差すと、

「うっ⁉」

隊長の顔色がさっとかわった。

「なにもしてない！　ぼくはただ触っただけだっ！」

アレフは、隊長をにらみつけた。

「触っただと⁉」

隊長は、鋭い目でにらみかえした。
「ああ！　ちょっと触ったら光が消えたんだ！」
「うぬぬぬっ、捕らえろーっ!!」
すかさず隊長が大声で命じた。

3　太陽の石

「なにっ、あの光がっ!?」
近衛隊長から事件の報告を受けたラルス十六世は、思わず玉座から立ちあがって叫んだ。
だが、あまりの驚きの大きさにすぐつぎの言葉がでなかった。ラルス十六世は、全身を震わせながら、何度も何度も深呼吸すると、やっと、
「その者をここへっ！」
と、命じたのだ。
ふたりの近衛兵に連行されてアレフが宮殿の謁見の間に入ると玉座についていたラルス十六世は思わずたちあがってアレフを目で追った。謁見の間には、ラルス十六世のほかに、近衛隊長以下三名の小隊長が下座に控えていた。
アレフが玉座の前に立ち、ふたりの近衛兵が隅にさがると、待ちかねたように、

「名は!?　名はなんと申す!?」
ラルス十六世は興奮を押さえ、アレフから目をはなさずにたずねた。
「城に出入りしている鍛冶屋の息子で、アレフと申します」
アレフは顔をあげ、まっすぐラルス十六世を見ながら、はっきりした声で答えた。どんな罰でも受ける覚悟ができていたから、悪びれた様子もなく、堂々としていた。
「アレフとな？」
「はい」
ラルス十六世は、じっとアレフの顔を見つめた。
まだ幼さが残るが、きりりとした顔だち、聡明そうな目、真一文字に結んだ意志の強そうな口もと――それに、受け答えといい態度といい、ラルス十六世が長年待ちわびていた男の像にふさわしいものだった。見る見るうちにラルス十六世の顔は上気し、大きな喜びでいっぱいになった。
「よくぞ現れてくれた！」
ラルス十六世は、目を輝かせながらいい、そして万感をこめて叫んだ。
「勇者ロトの血をひく者よ！」
ラルス十六世がいままでになんども夢にまで見た言葉だった。
「ロ、ロトの!?」
アレフは、思わず自分の耳を疑った。

勇者ロトの——!? ぼ、ぼくがっ——!?
「な、なにをいうんですか!?」
アレフは、うろたえて助けを求めるように隊長を見た。当然、異議を申し立ててくれると思ったのだ。
だが、隊長は背筋をピッとのばしたままじっとアレフに熱い眼差しをむけ、おもむろにうなずいた。すでにラルス十六世から聞いていたのだ。驚いたのはアレフだけだった。
「驚くのも無理はない。だが——」
ラルス十六世は、横の台座に置いてある白の絹でつつんだものを手のひらにのせ、アレフの前に行くと、
「この太陽の石の光を消したのが、なによりの証拠じゃ!」
ぱっと白い絹をはいだ。中から、あの赤い石が現れた。
「太陽の石?」
「そうじゃ、太陽の石じゃ。もともとこの太陽の石は、勇者ロトのものなのじゃ。勇者ロトが、この地に平和をもたらしたあとのことじゃ。勇者ロトに仕えたひとりの賢者がこの城を訪れたんじゃよ。そして、この太陽の石を献上して、ロトの言葉を伝えたのじゃ。アレフガルドがふたたび危機に陥ったとき、この光を消すものが現れる。この光を消した者が、アレフガルドを救うだろう。その者こそ勇者ロトの血をひく者だ——となっ」

アレフは、ラルス十六世の持っている太陽の石を見ながら、古井戸から宝物殿にあったこの太陽の石まで導いてくれたあのふしぎな光はいったいなんだったのだろうか、と思った。太陽の石にこめられた、勇者ロトの魂の化身なのだろうか——？　それとも神の——？

ラルス十六世は、さらに言葉をつづけた。

「それから長いときが流れて、勇者ロトが危惧した通りになってしまった。あの忌まわしい一三四八年の竜王との戦いに敗れたあと、この話を伝え聞いた者たちが、アレフガルド中から集まってきて、光を消そうと試みたのじゃ。だが、だれひとりとして消せる者はいなかったそうじゃ。そして、いつの間にか人々からそのことが忘れ去られてしまい、今日に至ったのじゃよ」

アレフは、ラルス十六世の手から太陽の石をとって手のひらにのせた。

油のようななめらかな表面がひんやりと冷たい。だが、ぴたりと肌に吸いつくようなふしぎな感触がする。吸いこまれるようにして消えたあの美しく輝いていた光が、この太陽の石のなかに凝縮されていて、そのエネルギーがひき寄せているのかも知れない。

「だが、アレフよ」

ラルス十六世は語気を強めた。

「わしは諦めていなかった。いつの日かかならずやこの石の光を消す者が、勇者ロトの血をひく者が、現れると信じておったのじゃよ！　そしていま、やっとそのときがきたのじゃよ！」

いつの間にかラルス十六世の目から大粒の涙が流れていた。

アレフガルドの過去二〇〇年の歴史は、屈辱と忍従と絶望の歴史だ。だが、いま、目の前にいる少年によって、少なくとも絶望からは解放されたのだ。そう思うと、ラルス十六世の胸の奥から熱いものがこみあげてきたのだ。
「アレフよ！」
ラルス十六世はアレフの手をしっかりとにぎりしめた。
「おまえこそ、真の勇者ロトの血をひく者じゃ！　その石は勇者ロトの血をひく者にこそふさわしい！　勇者ロトの血をひく者のみが竜王の島にわたる方法を見つけることができるのじゃ！　行って、竜王を倒してくれ！　そして、光の玉を奪いかえしてくれ！　このアレフガルドにふたたび平和を取りもどしてくれ！　おまえのその手でな！　アレフ！」
指がつぶれてしまうのではないかと思うほど、強く力をこめてにぎりしめた。
「はい！」
アレフは、力強くにぎりかえしてうなずいた。
勇者ロトの血が流れているかどうか、アレフには分からない。だが、すでにアレフの心は決まっていた。この太陽の石が、長い間自分が現れるのを待っていたのだ。勇者ロトにかわって待っていたのだ。勇者ロトはこの自分を選んだのだ。自分の運命とか宿命とか使命とか、そういうものがすべてこの太陽の石に凝縮されているのだ——そう思ったのだ。
そのアレフを、異様な目で見つめている者がいた。隅に控えている近衛兵のひとりだ。と、そ

の黒い眼球がピカッと光ったかと思うと、まっ赤な色に変わった。もちろん、気づく者はだれもいなかった。

「ところでアレフよ、いくつになるのじゃ！」

ラルス十六世は、頼(たの)もしそうにアレフを見ていった。

「十五です」

「十五――」

ラルス十六世は、はっとはじかれたように顔を雲らせた。

「今日でちょうど十五になりました」

「十五か――」

「それがどうかしたんですか？」

「いや、なんでもない。なんでもないんじゃよ」

ラルス十六世は、さびしそうに笑った。

そのときだった。さっきの近衛兵が、突然アレフに槍(やり)をむけていきおいよく宙(ちゅう)を飛んだのだ。

「うわぁっ!?」

アレフは、もんどり打ちながらかろうじて身をかわし、隊長(たいちょう)たちはあわててラルス十六世をかばった。だが、近衛兵はすばやく身をひるがえして、まだ倒れているアレフにふたたび襲(おそ)いかかった。

と、一番年の若い小隊長が投げた短剣が、近衛兵の右足に突き刺さった。近衛兵は小さなうめき声をあげたかと思うとアレフの上におおいかぶさるように落ち、アレフはあわててはね飛ばした。

「なにをする！　気でも狂ったか！」

すかさず隊長以下三人の小隊長が近衛兵の首もとに剣を突きつけた。そのときだった。

「ふふふふふっ」

近衛兵がぶきみに笑うと、見る見るうちに目がくぼみ、顔中がしわだらけになった。

「あっ⁉」

居合わせた者たちの顔色からさっと血の気が失せた。あきらかに動揺していた。竜王の手下が近衛兵にまぎれこんでいたとは夢にも思わなかったのだ。

と、制服ごと全身の皮膚がちぎれとんで、がいこつの死霊の騎士に変身すると、すかさず隊長たちに斬りかかり、隊長たちもあわてて応戦した。

と、攻撃をかわした死霊の騎士が宙に跳んで隊長たちのうしろに着地した。だが死霊の騎士の動きをすばやく読んだアレフが、それより一瞬はやくラルス十六世の剣をとって宙に跳んでいた。

「たーっ！」

アレフは、死霊の騎士の肩口から胴を目がけて思いっきり剣を降りおろした。ガキーン――！

骨を斬るすさまじい音が謁見の間に響いた。
「うっ！」
死霊の騎士は最後の力を振りしぼって、アレフ目がけて剣をかざした。が、そこまでだった。剣を振りかざしたまま、全身が小刻に震えたかと思うと、ガラガラガラッ――と、乾いた音を立てながらばらばらばらになって崩れ落ち、無数の骨のかけらが床に転げ散った。
竜王の魔力によって命を与えられ墓のなかから蘇った魔物は、いままた墓のなかにいたときと同じ姿にもどったのだ――。

4　出生の秘密

「そ、そんなばかなっ!?」
お城でのいきさつを聞くなり、母のジェシカは思わず絶句した。そして、涙まじりにガウルに訴えた。
「アレフが、勇者ロトの血をひく者だなんて！　どうしてそんなことがありうるの!?　どうして!?」
だが、ガウルは怖い顔をして、なにもいわず黙りこくっているばかりだった。
ガウルが、アレフが太陽の石の光を消したことを知らされたのは、アレフが逮捕された直後だ

った。顔見知りの近衛兵が、血相変えて鍛冶場に飛んできたのだ。
「どうして、あたしたちの子が恐ろしい竜王と闘わなきゃならないの!? アレフを死なせにやるようなものじゃないですか!?」
「大丈夫だよ、かあさん。死ぬもんか。きっと竜王を倒してみせるよ」
「アレフ!」
ジェシカは怖い目でにらみつけた。
「いやよ! わたしは行かせない! 竜王にかないっこなんかないわ! それに、一歩そとに出れば、恐ろしい魔物たちが待ち受けてるのよ! どうして、そんな危険なところにやれるの!? どうして、死ぬとわかっているところに大事な子どもをやれるの!? そんな親なんてどこにもいないわっ!」
「だけど、ぼくがやらなきゃ、いつまでたっても竜王に支配されたままなんだ。それでいいの、かあさん?」
「しかたないでしょ!」
「いやだよ、ぼくは! しかたがないなんて、そんなのはいやだ!」
「死ぬよりはましよ。死ぬよりは――」
ジェシカは、こみあげてくる涙をエプロンのすそでぬぐった。
誕生日のお祝いにジェシカが時間をかけて料理したアレフの大好物の子羊のシチューが、食卓

の上ですっかり冷めきっている。その横で、燭台のロウソクの炎が、ちりちりと音を立ててゆらめいている。その炎を見ながら、

「運命にはさからえないのかもしれないな――」

やっとガウルが重い口をひらいた。

「あ、あなた!?」

ジェシカは驚いてガウルを見た。

「なあ、アレフ。おれは、いや、かあさんもだが、おまえにはいずれこの鍛冶屋を継いでほしいと思っていた。いや、当然そうなるものと思っていた。それが、おまえにとってもおれたちにとっても一番幸せなことなんだってな――。たしかあれは、おまえが九つの時だった。おまえは大人になったら竜王を倒しに行くんだといって、おれはおまえを殴ったことがあった。ついカッとなってな」

「ああ、覚えてるよ」

「いずれ大きくなればわかると思っていた。だが、それから三年ほどして、おまえは毎朝大聖堂の塔にのぼるようになった」

「えっ!?」

アレフは驚いた。

「知ってたの!?」

「おまえのことなら、なんでも知ってるさ。メルセルのとこに通っていることもな。父親なんだからな」
メルセルは八〇歳になる老祈禱師で、アレフはひまをみては両親に内緒で呪法を教わっていたのだ。簡単な呪法なら、なんとかこなせるようになっていた。
「おまえが大聖堂に出かけて行く音を聞くたびに、なんどあの樫の木の剣を取りあげようと思ったことか。正直いってつらかった。やりきれなかった。やはり運命にはさからえないのか、そう思うとな。実はな、アレフ……」
意を決してアルフを見つめた。
「今までは秘密にしてきたが、おまえに話しておかなければならない大事なことがある」
「あなた!」
思わずジェシカはガウルの腕を強くつかんだ。そして怖い顔で首を横に振った。それ以上話すな――と。
「いや、いつかは本当のことを打ち明けなければならないんだ。アレフのためにもな」
ガウルは、腕をつかんでいるジェシカの手をやさしくにぎりかえした。
「実はな、アレフ――。おまえはおれたちの本当の子どもではないのだ――」
「えっ!?」
アレフは、一瞬自分の耳を疑った。

「うそだっ！」

はじかれたように立ちあがって叫んだ。

「そんなの、うそだっ！」

「いや、本当なんだよ」

「かあさん――！」

アレフは助けを求めるようにジェシカを見た。ジェシカは、涙をいっぱいにしながらアレフを見つめていた。そして、黙ってうつむいた。

ガタガタガタッ――風に窓が鳴った。通りを吹きぬける風の唸りが聞こえる。

茫然と立ちつくしたまま、アレフはゆらゆらゆれるロウソクの炎を見ていた。が、やがて力なく椅子に腰をおろすと、いまにも泣きそうな声でたずねた。

「じゃあ、おれの本当の両親は？　どこにいるの？」

「――」

ガウルは首を横に振った。

「ちょうど、十五年前の今日のことだ――」

南部の町メルキドでの仕事を終えたガウルはキャラバン隊と一緒に旅をつづけながらラダトームにむかっていた。

キャラバン隊は魔物の襲撃に備えて武装している。だから、多くの旅人はキャラバン隊と一緒に旅をするのだ。一人旅よりはるかに安全で心強いからだ。

そして、ラダトームまであと一日の道のりのところまできたときだった。その夜、キャラバン隊は岩山の窪地にキャンプを張った。空には星もなく、真冬の冷たい風が吹き荒れていた。見張りの数人を残して、隊員や旅人たちは深い眠りに落ちていた。

だが、ガウルはなかなか眠れなかった。明日はラダトームだ、そう思うと興奮して目がさえてくるのだ。半年ぶりに帰るのだから無理もなかった。

と、ふと、小さな動物の泣き声を聞いたような気がして、ガウルは耳をすました。風が唸りながら吹きぬけて行った。と、またかすかに聞こえてきた。たしかに泣き声だ。助けを求めるような泣き声だ。ガウルは思わず立ちあがった。

泣き声は、ほんの一〇〇歩ほど行った岩場の、小さな洞穴のなかからだった。そっと忍び寄ったガウルは、なかをのぞいて、

「うっ!?」

驚きのあまり、一瞬言葉をのんだ。

なにかをかばうように背中をまるめた女が倒れていた。だが、それが死体であることがすぐわかった。服装は焼けただれ、背中と下半身にひどい火傷のあとがあった。二〇歳過ぎのまだ若い女のようだが、死後一週間から一〇日はたっていそうだ。そして、その胸のなかで、抱きかかえ

られるようにして、産着をまとった赤ん坊が泣いていたのだ。生まれて間もない赤ん坊が——。

ガウルはじっとアレフを見つめた。さもそれがおまえだ、といわんばかりに。

「じゃあその女の人が……？　その人がおれの本当の……？」

「たぶん……そうかもしれない。だが、断言はできない……その女性にはなにも手がかりになるようなものはなかったからな。ところが——」

ガウルは奥の寝室に行き、貴重品が入れてある引きだしの奥から布製の平らな袋を取り出して、台所にもどると、

「赤ん坊の小さな手はこの石をぎっちりとにぎりしめていたんだ。そして、産着にはこれがはさんであった」

と、袋から小さな青い石と四つ折りにした一枚の羊皮紙の古地図を取りだして、おもむろにアレフの前に置いた。

「奇跡としか思われなかった。一週間、いや一〇日かもしれない。真冬のあの寒い岩山の、乳も水もないところで、たったひとりで生きのびていたんだからな。おれは、その生命力に驚いた。ひょっとしたら神が与えたものかもしれない。この赤ん坊はただの赤ん坊じゃない。なにか、重大な使命をもって生まれてきたのかも知れない。なにか大変な運命のもとに生まれてきた赤ん坊なのかもしれない。そう思えてきたんだよ。旅の仲間に偶然僧侶がいたんで、翌朝彼に頼んで女

性を手厚く葬(ほうむ)ると、おれはその赤ん坊をおかあさんの待つこのラダトームの町に連れて帰った。そして、その赤ん坊に〝アレフ〟と名づけたんだよ。アレフガルド語でアレフという言葉は風とか大地を意味する。いつの日かこのアレフガルドに、清らかな風と豊かな大地が蘇(よみがえ)ってほしい──そう願ってな」

「──」

アレフは、小さな青い石に目を落とし、おもむろに手のひらにのせた。美しい神秘的(しんぴてき)な石だった。

「おかあさんは、大喜びだった。結婚して五年たっていたが、子どもに恵(めぐ)まれていなかったからな。そして、今日まで実の子以上におまえを大事に育ててきたんだ」

ジェシカはしきりにこぼれ落ちる涙をエプロンのすそでふいていた。アレフを育てた十五年の長い歳月を思いかえしていたのかもしれない。

「今日お城で、おまえが勇者ロトの血をひく者だとわかった時、たしかに驚いた。だが、やはりそういう運命のもとに生まれてきた子だったのかって、なんとなく納得(なっとく)したんだよ──」

「でも、でもアレフは、あたしたちの子よ。だれがなんといったって！」

ジェシカはぎゅっとエプロンのすそを握(にぎ)りしめた。その手が小刻(こきざみ)に震(ふる)えていた。

「わかってるよ。おれたちの子だ」

ガウルはジェシカの震える手にやさしく手をそえた。

「おれたちの自慢(じまん)の息子さ」
「ええ──ええ──」
ジェシカはしきりにうなずいた。
アレフも、胸の奥から熱いものがこみあげてきた。そして、その目から大きな涙がこぼれて頰(ほお)を伝った。
「なあ、アレフ」
ガウルはアレフを見つめた。そして、初めて白い歯を見せてほほえんだ。
「行って、竜王を倒してこい」
「えっ!?」
「竜王を倒して、アレフガルドに再び平和を取りもどすんだ。かつて勇者ロトが闘(たたか)ったようにな。それがおまえの運命なんだ。おまえは、そのために生まれてきた子なんだ。選ばれたおまえの使命なんだ」
アレフはジェシカを見た。ジェシカはじっと涙をため、アレフを見つめていた。
だが、最後にやっとうなずいた。アレフは、心から感謝した。

5　旅立ちの朝

二日後――。

うっすらと夜が明けたころ、すでにアレフの旅支度は終わっていた。

足には旅行用の頑丈な革の長靴をはき、胴にはちょうどぴったりの革のヨロイをつけていた。マントも用意した。革のカブトもある。肩にかける大きな革袋には、ジェシカにもらった薬草やお守りや、アレフが拾われたときに持っていたあの青い石、羊皮紙の古地図、そのほか旅に必要なさまざまな道具が入っていた。

神に長い祈りを捧げたあと、アレフとガウルとジェシカは、三人だけの別れの朝食をとった。

アレフは、まずアレフガルドの北西にある予言者であり吟遊詩人だったガライが造ったと伝えられているガライの町に行くことに決めていた。

朝食が終わると、まるでそれが終わるのを計っていたかのように、ラルス十六世の使いの近衛隊の小隊長が、ラルス十六世からの約束の賜り物を持って現れた。ラルス十六世の前で死霊の騎士に襲われたとき、短剣を投げ刺したあの一番若い小隊長だ。

小隊長は、ラルス十六世秘宝の長剣とアレフガルド貨幣の入った革袋ひとつを丁重に差し出した。

剣の柄にはラルス家の紋章である天翔の獅子が彫ってあり、その獅子の目には赤い宝石が埋めこまれていた。鏡のような青々とした両刃は、いまにも油がしたたりそうな光沢をはなっていた。

「くれぐれも気をつけるように——とのことだ」

小隊長がラルス十六世の言葉を告げると、

「実は、ひとつお願いがある。これは、王のお願いではなく、わたし個人のお願いだ」

と、思いつめたような顔をして、意外なことをいった。

「できたらローラ姫のことも調べて欲しい」

「ローラ姫？」

アレフは驚いて、一瞬なんと答えていいかわからなかった。

「でも、ローラ姫は——⁉」

ラルス十六世の世継ぎであるローラ姫が、誕生して間もなく、突如襲った竜王の手下たちによって殺されたことは、アレフガルドの人ならだれでも知っていることなのだ。

「ま、まさか⁉　生きているんですか、ローラ姫が⁉」

「いや——」

暗い顔で首を横に振ると、

「だが、わたしには生きておられるような気がしてならないんだ。あの夜、城ではお七夜の宴が催されて、近衛隊に入隊したばかりのわたしは、宮殿の警備についていた。そして、周知のよう

に突如竜王配下の影の騎士の黒影軍団が強襲し、ローラ姫をかばったお后さまは無残にも殺されてしまった」

「か、影の騎士⁉」

「だが、乳母であったわたしの姉がローラ姫を連れて城のそとに逃げ、竜王の手下はすかさず追跡した。むろん、わたしたちも必死にそのあとを追ってローラ姫の行方をさがした。だが、一〇日目の朝だった——」

小隊長は、悔しそうに唇を噛んだ。

「断崖絶壁の海で姉の遺体を発見した。だが、どこをさがしてもローラ姫のお姿は——」

「でもそれだけじゃ！」

「たしかにそうだ。波にさらわれたのかもしれない。あるいは、別の魔物に——」

そういって、小隊長は一瞬いいよどんだ。食われたかもしれない——といおうとしてやめたのだ。

「だが、竜王の手下がローラ姫を殺さずに連れ去った可能性だってある。もし生きておられれば、おまえと同じでちょうど十五歳になられる」

「十五？」

とっさにアレフは、ラルス十六世の顔を思い浮かべた。ラルス十六世がアレフの年を聞いて十五だと答えたときの、あの哀しそうな顔を——。あのとき、ラルス十六世はローラ姫のことを思

いだしたのだ。
「でも、王さまはぼくにはなにもそんなことをいわなかった」
「王はそういうお方だ。我がことより、国の平和と国民の幸せを優先してお考えになる。いつでも自分のことは二のつぎなんだ」
「じゃあ、ラルス十六世も、ローラ姫が生きていると？」
「わからん。だが、ときどきひとりになると涙を流しておられる。あのお優しくてお美しかったお后さまとあのあどけないローラ姫の笑顔を思い出してな。いまでもラルス十六世の心のなかには、お后さまとローラ姫が生きておられるんだ」
そのときだった。
カーン、カーン、カーン――！
どんよりとした朝の空に、七時を告げる大聖堂の鐘が鳴り響いた。出発のときがきたのだ――。

6　魔将たち

そのころ竜王の居城のある一室で、他の六魔将たちを前に、大魔道ザルトータンがまっ赤な水晶球にむかって呪文を唱えていた。ラダトーム城に潜伏している配下の死霊の騎士を呼び出そうとしていたのだ。だが、なんど呼び出そうとしても、水晶球はなんの反応も示さなかった。

「殺られたか――」

ザルトータンが呪文を諦めると、影の騎士が吐き捨てるようにいい、悪魔の騎士が肩で大きく溜息をつき、死神の騎士とスターキメラは苦々しげに顔を見合わせた。

光の玉の二〇〇年ぶりの復活まで、あと二年たらずというときになって、急に降ってわいた問題に魔将たちはいらだちを覚えていた。

「さて――、陛下にはいかがなさる？」

ザルトータンは影の騎士と悪魔の騎士の顔を見て、竜王にこの問題を報告するかどうかをたずねた。だが、ザルトータンには、この二人が報告するのをためらうのはわかっていた。

いまさらロトの血をひく者が生きていたなどということを、竜王に報告できるはずがないのだ。

影の騎士と悪魔の騎士は、まるで申し合わせたように、同時に溜息をついた。

二日前、ラダトーム城から、勇者ロトの血をひく者が出現したと報告を受けたときは、さすがの魔将たちも驚愕した。晴天の霹靂だった。しかも、その者は十五歳になるという。だが、影の騎士と悪魔の騎士は、いまだに半信半疑だった。いや、信じたくないのだ。十五歳――その年齢が気にいらないのだ。

報告を受けたザルトータンは、ただちにロトの血をひく者が生存しているかどうかを占ってみたが、「否」と出たのである。だが、それにしても疑問や不安が残る。

「それにしても――。あの焼け焦げの赤児はいったいなんだったのか――」

だ。

ザルトータンにそういわれて、悪魔の騎士は唇を噛んでうつむいた。いいかえす言葉がないの

十五年前、竜王の命を受けた悪魔の騎士はドラゴン部隊を率いてドムドーラの町を強襲し、ロトの血をひく者とドムドーラの人間をみな殺しにした。そして、ロトの血をひく者だといって、黒焦げの赤児を竜王の前に差し出したのだ。だが、もし本当にロトの血をひく者が生きていたとしたら、竜王の前に差し出したあの赤児の死体は——!?

だが、悪魔の騎士は、報告を受けるたった二日前まで、あの赤児の死体がロトの血をひく者であると固く信じていたのだ。

「それに——」

ザルトータンは、影の騎士を見た。ザルトータンには別の心配ごとがあった。いや、ロトの血をひく者が生きていたと報告を受けたとき、急にもたげてきた不安だ。

報告を受けたそのとき、「その者が王女の愛を得るとき、竜王をも倒す力を持つ——」というお告げを思い出して、もしや——と不安になったのだ。

あのとき竜王は、ドムドーラ襲撃とともに影の騎士率いる強襲軍団にラダトーム城を襲わせ、ローラ姫の命を奪わせた。だが、数日後、影の騎士は竜王の王女を殺害したと報告したが、その証拠となる死体はなかったのだ。そのときは、ロトの血をひく者を殺害したあとだったから、竜王のおとがめはなかったが——。

「だが――もし、殺したはずのラルス十六世の姫が、どこかで生きていたとしたら――。もしそうだとしたら――」
「大魔道！」
それ以上いうな――！とばかりに影の騎士は大声をあげた。
「とにかく――陛下（へいか）に報告するのはしばらく見合わせてほしい」
悪魔の騎士がそういってザルトータンと死神の騎士とスターキメラの顔を交互に見つめた。言葉こそ対等だが、あきらかにその目は哀願（あいがん）していた。
「よかろう。陛下への報告は、すべてを確認してからでも遅くはない。その少年が、真にロトの血をひいた者なのか、まずそれを確認することが先決――」
と、ザルトータンが同意を求めるようにスターキメラを見た。
「しょうがないわね」
スターキメラは溜息をつき、死神の騎士もうなずいた。
「かたじけない」
悪魔の騎士は頭をさげた。
「ま、ここはわしに任せなさい」
「ふっ。またあやつを使うのか」
影の騎士はいまいましそうにザルトータンにむかって吐（は）き捨（す）てると、悪魔の騎士とともに立ち

去った。

「さてと――」

死神の騎士とスターキメラも立ち去ると、ザルトータンはふたたび水晶球にむかい、印を結んで呪文を唱えはじめた。

ザルトータンは、もともと竜王の配下であった四人の魔将たちと違い、かつてルビスの宮殿に仕える最高位の神官であった。だが、一三四八年の天変地異で死んだあと、竜王の魔力によってふたたび命を与えられ、六魔将のひとりとして、竜王に忠誠を尽くしてきたのだ。

そして、神殿に仕えていた者のなかで、竜王の魔力によって死の世界から蘇った者が、ザルトータンのほかにもう一人いた。ザルトータンの息子であり弟子でもあった男だ。ザルトータンはその男を呼ぶことにしたのだ。

と、まっ赤な水晶球が、印を結んだザルトータンの指先から発した光を受けとめて、突然光をはなった。反応したのだ。ザルトータンは、腹の底からしぼり出すような声でその男の名を呼んだ。

「魔界童子よーっ!」

第二章　生きていたガライ

かつて、アレフガルドにはたくさんの街道があり、人々はこの街道を通って物資や情報を運んだ。だが、一三四八年の天変地異と竜王との戦いに敗れてから、アレフガルドから街道という街道が消え、多くのキャラバン隊や旅人で賑わった街道筋の宿場も同時に消滅してしまった。

ラダトーム街道とガライ街道、メルキド街道の合流点として栄えた宿場も、同じ運命をたどった。この宿場から、東へむかえばラダトーム、南へむかえばドムドーラをへてメルキド、北へむかえば北海をへてガライへ、途中を東へむかえばアレフガルド街道となってアレフガルドの東方、さらには東南のリムルダールへとつづいていたのだ。

旧ラダトーム街道を西へ西へとむかったアレフは、かつてその宿場のあったあたりまでくると、北に進路を変えた。そして、緑豊かな大地から砂漠へと姿を変えた旧ガライ街道の道なき道を、北へむかって何日も何日も歩きつづけていた。

空には飛かう鳥もない。ただ、荒涼とした烈風の吹きすさぶ冬の砂漠が、えんえんとつづいているだけだ。ラダトームを出発してから一〇日が過ぎていた――。

1　冬の砂漠

ゴォオオオッ――と、地鳴りのような唸りをあげ、砂塵を巻きあげながら、すさまじい烈風が容赦なく襲ってくる。
前かがみになり、しっかりと地面を踏んでいなければ、紙きれのように吹き飛ばされてしまう。目をあけているのもやっとだ。
そのうえ、日中だというのに骨のしんまで痛くなるような底冷えがする。ばらばらと音を立てて顔や手に容赦なく砂や小石があたる。だが、皮膚の感覚はまったく麻痺していた。
五日もこんな天候がつづいている。最初の予定からすれば、もう北海に出ていてもいいところである。だが、予定はすっかり狂っていた。
アレフは我慢できずに立ちどまり、後ろむきになって背中で烈風を受けた。そして、肩で大きく息をした。
ここにくるまでアレフは、さまざまな魔物に襲われた。最初に襲いかかってきたのは、ブヨブヨの、足のない、頭の先が鋭くとがった、まん丸い魔物だった。昔からアレフガルドに棲息しているスライムだった。アレフの腰ほどまでしかないが、見かけによらず獰猛だ。
「このタマネギ野郎ーっ！」

アレフは何度も斬りかかった。
「このクリの化物めっ！」「巨大ニンニクめっ！」
だが、スライムはすばしこかった。「キッキッキッ」、と奇声をあげながら身軽にかわし、鋭い頭の先をむけて跳んできた。
「しつこいラッキョー野郎だっ！」
やっと、アレフの剣がスライムの胴を斬り裂いた。と、倒れたスライムが見る見るうちに、どす黒い血の塊になったかと思うといきなり爆発した。あたり一面に飛び散った血の塊はどろどろに溶けて地面に広がって消えた。
吸血コウモリの魔物にもいきなり頭上から強襲された。スライム同様、昔からアレフガルドに棲息しているドラキーで、自在に空中を飛びまわり、強力な牙で襲ってきた。
また、スライムベス等のほかのスライム属も、何度もしつこく襲ってきた。何匹倒したか、数えるのも面倒になってきた。
が、そんな魔物なんかより、一番の大敵は砂漠そのものだった。烈風と寒さ——自然の猛威のおそろしさだった。だが、雪でないのがせめてもの慰めだった。吹雪だったら、これどころではないのだ。
だが、あえてこんな真冬の砂漠を越えてガライの町まで行くのには理由があった。
「アレフガルドには古くから伝わる伝承がある。いつの日かアレフガルドに危機が訪れたとき、

勇者ロトの血をひく者によってガライの墓の封印が解けるであろう——という伝承がな」と、お城で死霊の騎士に襲われたあと、ラルス十六世にいわれたからだ。

アレフガルドをこよなく愛したガライは、いまからおよそ三二〇年ほど前、アレフガルドの危機を予言しながらだれにも聞き入れられずに旅の途中で死んだという伝説の人物だ。そのガライの墓が長い間封印されたままなのだ。

「その封印を解けば、竜王の島にわたる手がかりがつかめるかもしれん」

と——。

「くそっ！」

気を取りなおすと、アレフは足を引きずりながら、また烈風にむかって歩き出した。両足の裏にできたまめは、とっくにつぶれている。

薬草を塗り、布のきれはしで結わえていたが、歩きつづけるかぎり、効果はなかった。いや、さらに悪化するだけだった。ゆっくり休めばいいのだが、そんな余裕などなかった。

水筒の水は、お情ていどに底にほんの少ししか残っていない。干肉の塊も、もう一口分しかないのだ。

「最悪だぜ！」

アレフは、後悔していた。最初あんまり張りきりすぎて、調子にのってどんどん速度をあげすぎたのだ。気がついたら、両足に大きなまめがいくつもできていた。もっと足と相談して、無理

しないで歩けばよかった。それに、こんなことになるなら、水や食料をもっと大事にすりゃよかった――。

三時間後、疲れきってがっくりと地面にひざをついたときだった。アレフは、前方に大きく横たわっている岩山を見つけた。

気を取りなおして必死に岩山にむかい、砂漠の端にある険しい岩山の麓にやっとたどり着いたときには、すでにあたりが暗くなりかけていた。

アレフは、烈風をさけて、岩陰にぐったりと身を投げ出した。

よし、今夜はここで野宿だ――そう考えて、足のまめに塗る薬草を取ろうと、革袋に手を入れた。そのときだった。何者かの気配を感じたのは。アレフは、はっと顔をあげて、

「うわっ!?」

はじかれたようにおもわずあとずさって、反射的に剣をぬいた。

アレフの倍はありそうな巨大な大さそりが岩かげからいきなり襲いかかってきたのだ。アレフは、すばやくうしろの岩に飛び逃げたが、大さそりの鋭いはさみにマントのすそを切られてしまった。大さそりは、もともと通常の大きさの生物だったが、竜王の魔力によって巨大化し凶暴化した魔物だ。

「そりゃっ!」

アレフは勢いよく宙に跳んで剣を振りおろした。が、強固な殻に、あっけなくはじきかえされ

てしまった。なおも大さそりは襲ってきた。アレフは必死に応戦した。
アレフの呼吸が乱れて息づかいが荒くなった。アレフは、大きく肩で息をのみこむと、
「くそっ！」
渾身の力をこめて斬りかかった。
と、ガチッ！　なんと、剣をはさみにはさまれてしまった。と、次の瞬間、アレフの体が大きく宙に舞った。
「うわわわわーっ！」
大さそりが剣をはさんだまま、アレフを振りまわしたのだ。そして、力まかせに投げた。
アレフは背中から岩に叩きつけられて、地面に転がり落ちた。全身がしびれて、動けない。そのときだった。
「ターッ！」
と、声がしたかと思うと、アレフの頭上から剣をかざした若者が、目にもとまらぬ速さで急降下してきたのだ。
と、グサッ！　とどめを刺そうとしていた大さそりの頭をひと突きにした。いきおいよく鮮血が飛び散った。と、若者はすかさず返す剣で大さそりの腹をまっ二つに斬り裂いたのだ。岩肌にまた鮮血が飛び散った。一瞬の早業だった。大さそりは、地響きを立てて崩れ落ちた。
いつの間にか、若者は岩の上に立っていた。

「あ、ありがとう」
アレフは、肩で大きく息をしながら、若者を見あげた。
若者は、ゆっくりと剣を背中のさやにおさめた。背中まである長い髪の毛を、後ろで束ねていた。背が高くてがっしりしている。歳のころは二十歳前後か。肩から、柄にひき金の装置がついたひし弓をさげていた。
と、風が駆けぬけた。髪がなびいて、前髪に隠れていた日焼けした黒い顔がはっきり見えた。鋭い目が、じっとアレフを見ていた。

2　旅の若者

「旅は初めてか？」
「えっ⁉︎」
「旅馴れねえやつが、冬の砂漠をわたるなんて正気じゃねえ」
若者は岩から飛びおりると、マントをなびかせながらすたすたと歩き出した。アレフはあ然としてそのうしろ姿を見ていた。と、
「魔物に襲われて死にたいのか？」
と、怖い顔で振りむいた。

「えっ——？」
一瞬アレフは意味をはかりかねた。だが、ついてこい——といったのだと解釈して、あわてて散らばっている荷物をかき集めた。
若者は、なにもいわず自分の歩調ですたすたと歩いて行く。アレフは、必死に若者を追った。
一時間ほど歩き、人ひとりがやっとぬけられるほどの曲がりくねった岩場をぬけて、アレフは一瞬自分の目を疑った。
さっきまでの烈風の砂漠からは想像できない風景が広がっていた。風はなく、雲のきれ間には星が出ていた。そして、眼下の谷底には、岩山に囲まれた森があったのだ。その森をせせらぎが流れていた。
「み、水だっ！」
足の痛さも忘れ、アレフは転がるように岩山を駆けおりて、せせらぎの水をすくって飲もうとした。
と、バシッ！　いきなり若者はアレフの手を払った。水が飛び散った。
「なにすんだよ⁉」
だが、若者は黙ってその場にしゃがみこむと、せせらぎに咲いている小さな白い花を指差した。美しい可憐な花が水中に群生していた。
「水白花だ」

「――?」
「水をのむときは、まずこの花が咲いているかどうかたしかめろ。この花は、竜王の毒に汚された水には生息しない」
「そうか――」
アレフは水白花をじっと見た。もし竜王の毒に汚された水だったら――そう思うとぞっとした。
「勉強になったよ」
アレフは礼をいうと、むしゃぶるように水をすくってのんだ。何度も何度ものんだ。そして、空を見あげて大きく深呼吸した。やっと生きかえった気持ちになった。と、空を見あげた顔がぎょっとして、
「あーっ⁉」
恐怖に凍てついた。
すさまじいいきおいで大きな翼を広げた大鷲が二人を目がけて急降下してきたのだ。
「あわわわわわっ! ひえーっ!」
あわててアレフはすぐそばの岩陰に飛びこんだ。
と、大鷲が翼を羽ばたかせて急上昇し、岩山のむこうに優雅に飛び去った。
アレフの何倍もあるような、巨大な大鷲だった。アレフは、あ然として見送った。そして、若者を見てまた驚いた。若者の手には、いつの間にか死んだ野ウサギがぶらさがっていた。大鷲が

獲物を置いて行ったのだ。
「なんだ、あんたの仲間だったのかあ」
だが、若者はアレフには見むきもせずにさっさと小刀で野ウサギをさばくと、せせらぎのそばの小さな洞窟に火を焚き、肉を焼きはじめた。手慣れたものだった。
あぶり出された脂肪と肉汁が炎にしたたり落ちて、ちりちり燃えた。肉の焼けるおいしそうな匂いが鼻をついた。アレフの腹が何度も鳴った。
若者はアレフのことをまったく無視していた。声ひとつかけなかった。アレフを見ようともしなかった。なんて無愛想なんだ——アレフは、つぶれた足のまめに薬草を塗りながら、若者の顔を見た。
「ねえ、どこへ行く途中なの？」
「——」
若者は無視して黙って炎を見ている。
「ねえ、どこへ行くの？」
アレフはもう一度たずねた。
「いいじゃない、教えたって」
若者はやっとアレフを見た。と、一瞬間をおいて答えた。
「あてはねえ——」

「あ、あてはないって⁉　どういうこと⁉」
「――」
若者は面倒臭そうに溜息をついた。
「ねえ、どういうことよ⁉」
「足の向くままってことだ」
「えっ？　だって、どっかの町に住んでるんじゃないの？」
「――」
若者はまた無視して、黙って肉の焼け具合をみている。
「じゃあ、ずっと旅をつづけているの？」
「――」
「あっそ。死ぬまでつづけるんだ」
むっとしてアレフはわざと皮肉っぽくいった。
「ぼくはガライへ行く途中だ」
「――？」
若者は怪訝な顔でアレフを見た。やっと反応を示した。
「ぼくは竜王を倒すために旅に出たんだ。ガライへ行けば、きっと竜王の島にわたれる手がかりがつかめると思ってね」

「ふっふふふ。はっはははは！」
若者は腹をかかえて笑った。
「なにがおかしいんだよ？」
アレフはまたむっとなった。
「本気だよ！　竜王を倒してアレフガルドに平和を取りもどすんだ。勇者ロトのようにね」
「たわごとをいう前に、ちゃんとガライに行けるかどうかを心配するんだな」
「どういうことだよ!?」
「ガライなら方向が違う」
「えっ!?　で、でも!?」
アレフは、あわててあの羊皮紙(ようひし)の古地図を取りだした。
竜王が支配してからというもの、アレフガルドの正確な地図がいまだに作製されていないのだ。
だが、古地図とはいえ、この地図にはアレフガルド全土が描かれている。地図の右下の端には、見慣れない楔形文字(せっけいもじ)が書いてあった。
「いまこの辺だろ!?」
アレフは、ラダトーム砂漠の北の、海に近いところを指差した。だが、若者は足もとの小枝を拾うと、アレフの指差したところからだいぶ離れた東を差した。
「えっ、こんなとこなの!?」

る。
アレフは愕然(がくぜん)とした。まっすぐ北上したつもりだったが、北東にむかって歩いてきたことにな
「あれを越えて北に行けば海だ」
若者は、谷底のむこうにそびえる岩山をあごで差すと、
「そんな昔の地図なんかあてにしていたら、どこへも行けねえぜ」
と、ばかにしたようにいった。
「そんなこといったって！」
たしかに大地震で海に沈(しず)んだ半島もある。消えてしまった湖もある。突然、噴火(ふんか)してできた山もある。姿を変えた山もある。緑豊かな平原が砂漠(さばく)になったところもある。流れが大きくかわった河もある。いまだって地形が少しずつ変わってるところもあるという。だが、古い地図でもないよりはましだ。いや、いまのアレフには頼(たよ)るのはこの古地図しかないのだ。
「しょうがないだろっ！」
アレフは思わず怒鳴(どな)った。
と、若者はいきなり「食え」とばかりに小刀でわけた肉を乱暴(らんぼう)にアレフに放り、さっさと自分の肉を食べはじめた。
ムッとしたままアレフは若者をにらみつけていた。だが、肉の匂いが鼻をつくと、生つばをごくりとのみこんで、いきおいよくむしゃぶりついた。肉汁と脂肪の甘味が、ぱっと口のなかに広が

った。
肉を食べ終えると、若者はアレフの腰の剣をちらっと見た。さっきから気になっている様子だ。空腹が満たされると、アレフの気持ちもなごんだ。さっき腹を立てたこともすっかり忘れていた。
「これは、王さまの秘宝の剣さ」
「――？」
「ラルス十六世のね」
と、アレフは自慢気に腰から剣をはずして若者に見せながら、お城での出来事を話しはじめた。そして、勇者ロトの血をひく者だと名のった。
「――」
さすがに若者も驚いたようだ。若者は、ジッとアレフを見つめていた。だが、
「ふっ」
鼻先で笑うと、アレフに剣を投げかえして洞窟を出た。そして、せせらぎの岩に腰をおろすと、おもむろに懐から銀の横笛を出して唇にあてた。澄んだ美しい音色が一帯に流れた。
いつの間にか上空に、三日月が出ていた。
焚火の炎を見ながら、アレフはじっとその美しい笛の音色を聞いていた。心にしみるような音色だ。だが、どこかもの哀しい旋律だった。

ふと、アレフはやさしい父と母の顔を思い出した。今ごろ、どうしているんだろ？　夕飯、終わったのかな？　かあさんのことだから、ぼくのことを心配して、神にお祈りしているのかもしれない——そう思うと、急に両親に会いたくなった。

いつの間にか、アレフは眠っていた。いままでの旅の疲れがどっと出たのだ。今夜は、いつ出るかもしれない魔物の心配をする必要もなさそうだ。その安心からか、アレフは、朝まで目をさまさなかった。やすらかな寝顔から、涙がひとすじ流れていた。両親の夢を見ていたのかもしれない。

翌朝、アレフは目を覚ますと、すでに若者の姿がなかった。焚火のあとの燃えかすの横に、昨夜の残り物の焼いた肉が置いてあった。アレフのために、置いて行ってくれたのだ。

アレフは、さっそくせせらぎの水を水筒に入れると、谷底のむこうにそびえる岩山に向かって元気に歩き出した。

若者と別れて五日目、アレフが粉雪の舞う峠を越えると、目の前に荒涼とした北の海が広がっていた。

海は荒れていた。灰色の高波がすさまじい音を立てて寄せてはかえす。空には海鳥の鳴く声さえなかった。生まれて初めて間近に見る海だった。

つぶれた足のまめのあとは、いくらかましになっていた。無理をすることをやめたからだ。や

っと、自分の歩く速度や距離の感じがつかめてきたのだ。
　そして、海ぞいに歩き始めて八日目、大きな砂丘をのぼりきると、前方の海に突きでた断崖絶壁の岬の上に、雪をかぶった家並が見えた。
「ガライだーっ！」
　アレフは思わず叫んだ。急に胸の奥から熱いものがこみあげてきた。ラダトームの町を出て、ちょうど二十三日がたっていた。
「ガライだっ！　ガライの町だーっ！」
　アレフは、足のことも忘れて、ガライの町にむかって駆け出した。無人の砂丘に積もったまっ白な雪に、力強い足あとをくっきりと残しながら。
　と、ぴゅーっと風が鳴り、砂丘の頂上に雪が舞った。と、まるで風に乗ってきたかのように、ぶきみなひとりの小男が姿を現した。
　背丈が小さな子供ぐらいしかない三等身の年齢不詳の男だ。つるんとしたまん丸い顔。異様なほど透きとおったまっ白な肌。とがった三角の耳。頭には毛が一本もない。眉もない。鋭い目は、血のようなまっ赤な色をしていた。そして、首から下は黒いマントでおおっている。魔界童子だ。
　魔界童子は、赤い目をきらりと光らせて、にやりとぶきみに笑った。

3　セシール

ガライの町は、ぶきみなほどひっそりと静まりかえっていた。通りには、人影すらない。海からは雪まじりの冷たい風が吹きつけていた。

アレフは、町に入ったとたん、安心したのか突然はげしい空腹を覚えた。昨日からなにも口にしていなかったからだ。だが、表通りの角の食堂の扉は固く閉ざされていて、「休業中」と書かれた古い木札がカタカタ音を立てて風にゆれていた。

アレフは溜息をつきながらほかに食堂がないかと見まわして、はすむかいの民家の窓の奥の暗がりから身をひそめるようにしてアレフの様子をうかがっていた老人とばったり目が合った。あわてて老人は身を隠した。

「またか――」

アレフはそうつぶやいて食堂の角を曲がると、その老人はまたそっと顔を出して暗い目でアレフのうしろ姿をじっと追った。

これで三人目だった。町に入って二軒目の扉のすきまから四〇半ばの男がアレフの様子をうかがっていたし、つぶれた酒場の二階の窓の奥からは老婆がアレフをじっと見ていたのだ。

と、前方の家の扉のすきまから姉弟らしい二人の幼い子供が珍しそうにアレフを見ていた。と、

奥から母親が現れて二人を叱りながら奥へと追いやり、扉を閉めようとしてばったりアレフと目が合った。
「あ、あの、ちょっと」
食堂がないかどうかたずねようとしてアレフは声をかけた。だが、母親は脅えたような顔であわててばたんと扉を閉めた。
「どうなってんだ、この町は――？」
アレフはまた歩き出し、T字路の突きあたりに宿屋の看板をみつけると、駆け寄って扉をたたいた。だが、なんの反応もなかった。アレフは溜息をついて諦めかけたときだった。扉ののぞき窓が開いて、男の鋭い目がじろりとアレフを見た。
「どこからきた？」
「ラダトームからだ」
男はのぞき窓を閉め、扉をほんの少しあけてまたそのすきまからアレフを探るように見た。五〇半ばの頭のうすくなったやや小太りのこの男は、宿の主人だった。
アレフは、一泊したいがいますぐ食事ができるかどうかたずねると、主人はなかに招き入れ、食堂をかねたロビーの食卓を指差してカウンターの奥に消えた。
マントを脱ぎ肩から革袋をはずすと、さすがにほっとした。一〇分ほどロビーで待つと、宿の娘が、

「どうぞ」
と、運んできた小麦粉を練ってうすくのばした焼きたてのパンとあぶりたての魚の燻製を、食卓に丁寧に置いた。
はっと目を見張るような色白の美しい娘だった。細い小さな肩までのびた亜麻色のしなやかな艶のある美しい髪と、涼しげな澄んだ瞳が印象的だ。アレフと同じ年ごろで、整った顔には気品すらあった。もちろん、こんなに美しい清楚な女性を見たのはアレフは生まれて初めてだった。
アレフは思わず見とれていた。
「ど、どうぞ。あたたかいうちに――」
じっと見つめられた娘は恥じらいながら顔をふせた。
「えっ？」
アレフは、はっと我にかえって、顔をまっ赤にすると、
「あっ。い、いただきます！」
あつあつの魚をナイフで切り、あつあつのパンにはさんでむしゃぶりついた。
と、主人がカウンターの奥から出てきて、
「セシール。いまのうちに客室を掃除しておくんだ」
と、いった。
セシールっていうのか――アレフは食べる手をとめて、ロビーの階段をあがっていくセシール

の姿をまぶしそうに見ていた。だが、そんなアレフを主人は不快そうににらみつけていた。そのことに気づいてアレフは一瞬うろたえたが、

「あ、あのなにかあったんですか、町に？　妙に静かだしさ。それに——」

アレフは宿にくるまでに町のひとから変な目で見られたことを話した。

「珍しいからだ。ほとんどこの町にやってくる者がないからな」

「そうか。それで角の食堂も店を閉めていたのか」

「だが、町の連中はみないいやつばかりだ。よそ者には警戒心が強いがな」

「どうしてですか？」

だが、主人は答えようとはしなかった。

「なんで同じ人間なのにそんなに警戒しなきゃならないんです!?」

主人は面倒臭そうに溜息をつくと、

「苦い経験があるからだ」

と、ぶっきらぼうに答えた。

「どんな!?　なにがあったんです!?」

アレフは主人を見つめたまま目をはなさなかった。

主人はまた溜息をつくと、根負けしたように、ぽつりぽつりとガライの町のこと話しはじめたのだった。

かつてガライの町はアレフガルドの避暑地として賑わったという。雄麗な断崖絶壁の岬、岬の上の斜面に広がる赤い屋根と白壁の美しい町、そしておだやかで神秘的なエメラルドの海、それらは訪れた人びとの心をとらえてはなさなかったという。

だが、一三四八年の天変地異で美しい町は崩壊し、エメラルドの海は灰色に変わったのだ。

さらに、町の男たちはつぎつぎに竜王討伐に駆り出され、そのほとんどが二度とガライの土を踏むことがなかったという。そして、町は老人と女子供と、わずかに残った男たちだけになってしまったのだ。

その後、町は何度も竜王の魔物に襲われたが、特殊な地形が幸いしてか、わずかに残った男たちはなんとか町を守ったのだ。ところがある日、ひとりの旅人がやってきて、町の人たちはよろこんで迎え入れたという。すると、その旅人は突如正体を現して襲いかかり、町は騒然となった。魔物が変装していたのだ。そのすきに、ほかの魔物たちがいっせいに町を襲撃し、一瞬にして町のほとんどの人が殺されてしまったのだ。

それ以来、ガライの町は生き残った人たちの子孫によって、かろうじて今日まで守られてきたのだ。かつて一万をゆうに越したという町の人口が、いまでは二〇分の一に減ってしまったのだ。

「そんなことがあったのか――」

アレフはあ然として聞いていた。
「ガライの者は子供のころからそのことを年寄りや親から聞かされて育つんだ」
「ところで、ちょっと聞きたいんだけど、ガライの墓はどこにあるの？」
「――？」
主人の顔色がさっと変わった。そして、
「若いもん、墓のことを聞いてどうする⁉」
と、ぎろりと鋭い目でにらみつけた。
「なにしにきた⁉」
「ぼくは――！」
バン――！　わけをいおうとすると、いきなり主人が食卓をたたいて、
「いいかっ、くれぐれもいっておく。ガライの墓には近づいてはならん。絶対になっ！」
と、怒鳴った。
「どうしたんです？」
主人の声に驚いて四〇半ばの品のいい女性がカウンターの奥から顔を出した。主人の妻だった。
「――！」
主人はアレフをにらみつけたまま黙ってカウンターの奥に消えた。
いつの間にか、掃除を終えたセシールが階段の下に立ちどまってアレフを見ていた。

セシールは掃除したばかりの二階の部屋へアレフを案内した。窓際に木製のベッドとその横に荷物棚があるだけの、狭い質素な部屋だった。アレフはもどろうとするセシールを呼びとめた。

「ねえ、ガライの墓はどこにあるの？」

「――」

セシールは一瞬躊躇した。さっきの主人の態度を気にしているようだ。だが、

「岬の――突端にあります」

と、答えた。

「おじさん、あんなに怒ってたけど、どうしてガライのお墓に近づいちゃいけないの？」

「――」

セシールはちょっと間を置くと、

「普通の人がお墓に近づくとこの町に不吉なことが起こる――という昔からのいい伝えがあるからなんです」

「だけどさ、どうしてガライの墓が封印されたの？　墓のなかになにがあるの？」

「――」

セシールは、澄んだ瞳でじっとアレフを見つめた。アレフは思わずどぎまぎした。セシールはなぜアレフがガライの墓にこだわるのか計りかねているのだ。だが、セシールは首を横に振った。

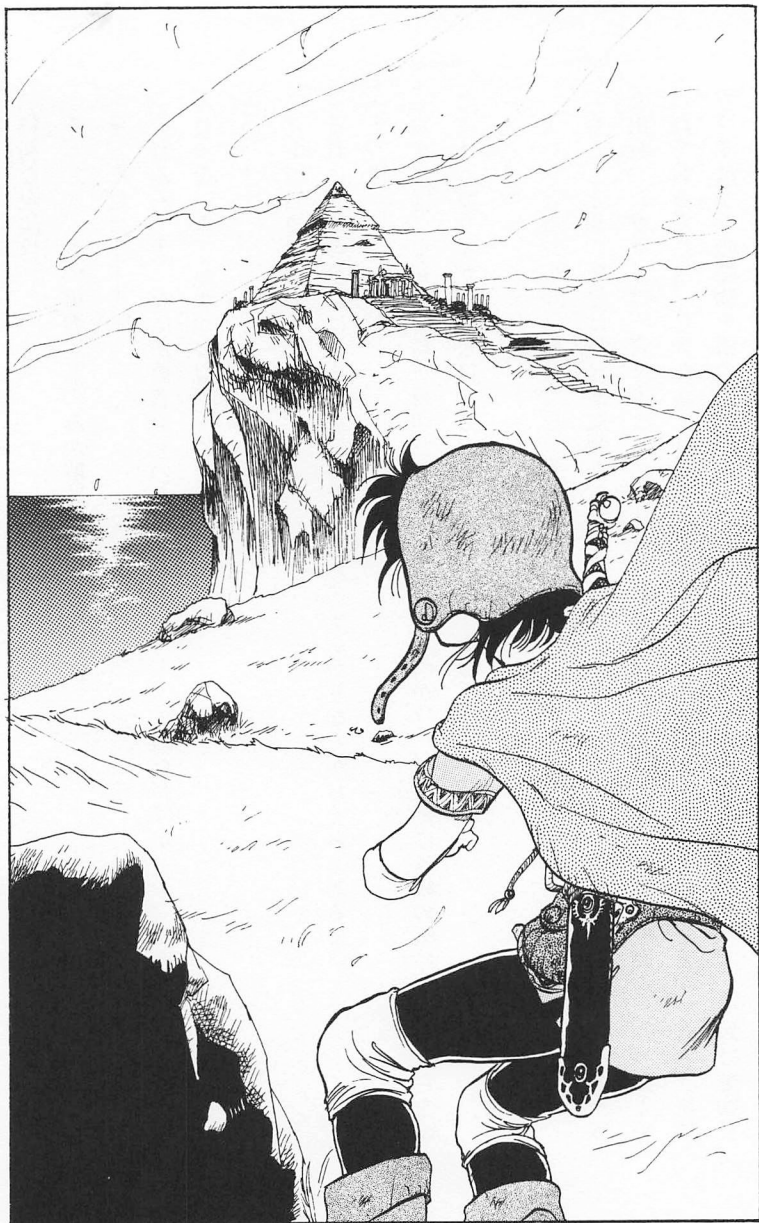
「ガライの神話なら少し知っていますけど」

「ガライの神話？」
「はい。昔——勇者ロトが大魔王を倒すために旅をつづけていたころ、ガライもまた銀の竪琴を持って旅をつづけていたそうです」
「銀の竪琴？」
「ええ。ガライはその銀の竪琴を奏でることによって魔物とお話をすることができたんだそうです」
「魔物と!?」
「魔物にはもともと人間と一緒に暮らしていたものが沢山いたんだそうです。その魔物たちと話し、悪い心を解くために旅をつづけたんだそうです」
「ふーん。そうだったのかあ」
そういいながらアレフはマントを着た。
「どこかへ行かれるんですか？」
「ガライの墓さ」
「えっ!?」
さっとセシールの顔色が変わった。
「じつは、ぼくがガライにきたのは墓の封印を解くためなんだ」
「えっ!? ふ、封印を!?」

そう聞き返したとき、すでにアレフは部屋を飛び出していた。
「待って！」
セシールは叫んではっとなった。そして、あわてて部屋を飛び出して行った。

4 ガライの墓

海を一望に見わたせる岬の突端に、巨大なピラミッドのガライの墓が立っていた。
正面のエントランスの階段をのぼったところに石の扉があった。扉にはガライの唐草文様の紋章が彫ってある。アレフは、扉を押してみた。だが、ぴくりともしなかった。さらに体当たりしてみた。が、軽くはじきかえされるだけだった。溜息をついてアレフは紋章を見た。そのときだった。いきなり、
「墓に近づいてはならん！」
と、しわがれの大声がして、アレフが振りむくと、いつの間にかフードつきの黒マントをまとった老婆がおそろしい形相で立っていた。皺だらけで、頬がげっそりそげ落ちている。痩せ細った手や指はまるでがらがらの骨だらけだ。だが、目だけは異様に鋭かった。
そして、老婆のうしろにセシールが心配そうに立っていた。美しい亜麻色の髪と洋服が雪まじりの海からの冷たい風にはげしくなびいている。マントも持たず家を飛び出したセシールは、そ

の足で老婆のところに行ったのだ。
「わしはこの町の占い師で、この墓の守りを司っておる者じゃ！　封印を解くなんてばかげたことを考えるんじゃない！　この墓の封印を解くことのできる者は、勇者ロトの血をひく者だけなんじゃ！」
「ぼくは、勇者ロトの血をひく者だ！」
「な、なにっ⁉」
　占い師はあ然となった。セシールもまたあ然としてアレフを見つめていた。
「勇者ロトの血をひく者じゃと⁉　はっははは！　なにをたわごとをいうんじゃ！　おまえごときが勇者ロトの血をひく者であってたまるか！」
「いや、ぼくは勇者ロトの血をひく者だ！　竜王の島にわたるための手がかりをさがしてガライにきたんだ！　ガライの墓の封印を解けば、手がかりがつかめると思ってな！」
「ふん。だれがそんなことを信じるかっ！」
「本当だってば！」
　アレフは、ラダトーム城で起きた出来事を話した。話を聞いた占い師はさすがに驚いた。そして、セシールもまた驚いていた。
「も、もし、おまえが勇者ロトの血をひく者ならば、当然封印を解く特別な呪法を知っておるんじゃろうな⁉」

「特別な呪法!?」
「そうじゃ、真の勇者ロトのみが解ける呪法をな!」
「そ、それは――!」
「それみろっ! なにが勇者ロトの血をひく者じゃ! このたわけがっ! 二度と墓には近づくんじゃない! わかったなっ!」
「うっ!」
アレフはきっと唇を噛んでにらみつけた。
「それに、この墓には竜王の島にわたるための手がかりなんかおそらくあるまい」
「えっ!?」
「おまえは、なぜこの墓が封印されたか知っておるのか!? この墓には銀の竪琴があるからなんじゃ! ガライが一生手ばなさなかった銀の竪琴がな!」
「えっ?」
アレフとセシールは驚いて思わず顔を見合わせた。
「もともと銀の竪琴は妖精が魔物から身を守るために作られたものなんじゃ。深山で妖精の一族と出会ったガライは、音楽家としての才能を認められ、妖精の女王から銀の竪琴を授かったといわれておるんじゃ。じゃから、妖精やガライが奏でると、魔物を封じこめることができる。現にガライは多くの魔物を銀の竪琴で封じこめたのじゃ。じゃが普通の人間が奏でると反対に魔物を

呼び寄せてしまうのじゃ。じゃから、ガライの死んだあと、竪琴も一緒に埋葬し、墓ごと封印してしまったのじゃ。それ以来、ここに普通の人間が近づくと銀の竪琴が怒って町に不吉なことが起こるといわれとるんじゃ。じゃから、この墓に近づいてはならんのじゃ！」

「じゃあ、竜王を倒すための手がかりはどうしたらつかめるんだ!?　どこへ行けば!?」

「――」

占い師はじっとアレフを見つめると、

「どうしても――勇者ロトの血をひく者じゃといい張るのじゃなっ!?」

「もちろんだ！」

「よかろう。それならわしが占ってやってもいい。これでも評判がいいんじゃ」

占い師は、歯のぬけた口をあけてにっと笑ったかと思うと、がらりと形相を変えて、

「とにかく帰るんじゃ！　そして、二度とここに近づくんじゃない！」

と、怒鳴りつけて強引にアレフの腕をひっ張って扉の前の階段からおろすと、くるりときびすをかえして町にむかった。

アレフは溜息をついて墓を見た。と、一段と強い雪まじりの冷たい風が吹きぬけていった。

「すみません――」

セシールは寒さに身を縮めながら、申しわけなさそうにじっとアレフを見つめた。

「余計なことをして――。そんな理由があるとは知らなかったものですから」

寒さに唇が震えていた。セシールの亜麻色の髪や細い肩にうっすら雪が積もっていた。
「気にしなくていいよ。おかげで封印を解くには特別な呪法が必要だってことがわかったんだから」
アレフはそういって微笑むと、マントを脱いでセシールにかけてやった。
その夜、アレフはセシールに案内されて占い師のところへ行った。占い師の家は、宿屋からほんの少しはなれた路地の、薄汚れた地下にあった。
湿ったカビの臭いと香の焚く匂いが入りまじった一番奥の部屋で、燭台のロウソクが燃えていた。その炎の前に座って、占い師の老婆はじろっとアレフを見あげると、
「三〇〇ゴールドじゃ」
と、いきなり料金をいった。
「三〇〇⁉」
それは、宿賃の一〇日分にもあたる。
「高いよっ！　まけてよ！」
「相場じゃ。わしを値切ったやつはろくな目に会わんぞ。それでもいいのか？」
アレフは、しょうがなく革袋から三〇〇ゴールドを出して払った。
「素直が一番じゃ」
占い師は、にっと笑うと、水晶の数珠を持って、一心不乱に呪文を唱えはじめた。そして、目

の前で両手を合わせると、目をつむったままおもむろに告げた。
「星じゃ。星が見える」
「星？」
「南東の方角にひときわ光る星が見える」
「南東？」
「五〇じゃ」
占い師は片目を開けると、アレフの顔の前に右手を出して追加料金を請求した。
「そ、そんなのずるいよ！」
「嫌ならこれで終わりじゃ」
占い師はさっさと立ちあがろうとする。
「わ、わかったよ。出しゃいいんだろっ」
アレフは、しぶしぶ五〇だすと、占い師はふたたび両目をつむって呪文を唱えた。
「砂漠(さばく)じゃ。砂漠が見える」
「砂漠？」
占い師は、片目を開けて、また右手を差し出した。
「えーっ⁉　またかよーっ⁉」
「嫌ならいいんじゃよ」

アレフは、またしぶしぶ五〇出した。占い師は、にっと笑うと、また目をつぶって呪文を唱えた。

「闇じゃ。闇が見える」

「闇？」

「そうじゃ。闇じゃ。これで終わりじゃ」

「悪いけどもうひとつ占ってほしいことがあるんだ」

アレフは、ローラ姫が生きているかどうかを占ってもらおうと思ったのだ。

「ローラ姫？」

占い師はまた三〇〇請求した。

だが、占いを終えると、暗い顔で首を横に振った。

「やっぱり死んで――？」

「いや。わからん。残念ながらなにも見えんのじゃよ。なにもな」

と、占い師はさっさと立ちあがった。

「南東の方角にひときわ輝く星」と「砂漠」と「闇」――「星」はおそらく、南天の南極星からちょうど四五度東に位置する女神八光星を指すのだろう。八方にきらきらと光を放っているところから、別名女神の瞳とも女神の宝石ともいわれている星だ。そして「砂漠」は、ガライの南東にあるどこかの砂漠を差すのだろう。だが、「闇」――とはいったいなにを差すのだろう？　なに

を意味するのだろう？
宿にもどったアレフは、古地図を開きながら、あれこれ推理してみた。だが、それ以上なにも考えつかなかった。
「どうせ、こんな地図見てもだめか。古すぎてあてになんないからな――」
古地図をばかにしたあの旅の若者の顔を思い浮かべて大きく溜息（ためいき）をつくと、アレフは古地図を革袋のうえに放り投げてベッドに横になった。
このとき、この古地図に秘密が隠されていようとは、アレフには想像できるはずもなかった。
古地図の秘密――偶然それがわかったのは数日後のことであった――。

5　魔界童子

「くそっ！」
アレフは、うっそうと生いしげる大きなシダの葉やぶきみな蔓（つる）や木の枝を、ばっさばっさと剣で切り落としながら、巨大な樹木の密林（みつりん）を南東へむかって進んでいた。
占い師のお告げを信じたわけではないが、なんの手がかりもつかめない以上、占い師のお告げ通りに旅をつづけるしか手はなかったのだ。
「もう少し旅の疲れをいやしてから出発したほうがよろしいのでは――」

と、セシールが心配してくれたが、無駄に時間を過ごすわけにはいかないのだ。翌朝、薬草や食料を買いこむと、セシールに見送られて出発した。

「占いのばあさんには信じてもらえなかったけど、ぼくが勇者ロトの血をひく者だってこと信じてくれるよね？」

アレフはセシールを見つめた。

「――」

セシールは涼しげな澄んだ瞳で見つめ返した。海から吹きつける冷たい風にセシールの美しい亜麻色の髪が大きくなびいた。セシールは微笑んでうなずくと、

「あの――」

ちょっと恥じらった。

「名前、まだ聞いてませんでした」

「アレフっていうんだ」

「アレフ――」

セシールはアレフの名前をもう一度口のなかでつぶやいてみた。

「いい名前ですね。気をつけてくださいね、アレフ」

「ありがとう。君のことは忘れないよ。さよなら、セシール」

アレフはくるりときびすをかえすと、はるか前方にある森にむかって歩きはじめた。セシール

は、アレフの姿が見えなくなるまで、じっと祈るように見送っていた。
あれからすでに四日がたっている。森や広葉樹の原生林をいくつも越え、険しい山もいくつも越えた。
だが、この密林に入ってから、思うように前へ進めない。寒風を直接受けることもなければ魔物に襲われることもなかったが、大きな草の葉や蔓が邪魔するからだ。切っても切っても、際限なく待ち受けている。
「くそっ、これならまだ砂漠のほうがましだぜ！」
さらに進むと、黒々としたぶきみな沼に出た。ところどころ薄氷が張っている。アレフは、うんざりしながらしたたる汗をぬぐった。そのとき、頭上で声がした。
「いいこと教えよう」
ぎょっとしてアレフが見あげると、大樹の枝に腰かけた魔界童子がアレフを見おろしていた。
「な、なにものだ!?」
アレフは、剣を身構えた。
「このままっすぐ進んでも、密林の奥に迷いこむだけだ」
「なに？」
「こっちへ行け」
魔界童子は右を指差した。

「日暮れまでには、砂漠にでる」
「砂漠に？」
「そうだ、砂漠だ」
魔界童子はにやりと笑うと、すーっと音もなく姿を消した。
「な、なんだあいつは？　薄気味の悪い野郎だ——」
アレフは、魔界童子が指差した方角を見た。同じような密林がつづいている。
「よし、だまされたと思って行ってみるか」
アレフは、ぶきみな草の葉や木を切り落として、その方角に進んだ。
だが、いっこうに砂漠にでる気配はなかった。行けども行けども、密林だ。そのうえ、いつの間にか日が暮れようとしていた。ここまで暗くなると、あとはつるべ落としだ。急に夜の闇がやってくる。
「チキショーッ！　あの化物め、だましたなっ！」
方角がまったくわからなくなっていた。空さえ晴れていれば、木にのぼって女神八光星を見ればすぐわかるが、うっそうとした木々の梢の先にかすかに見える空は、相変わらずどんよりと曇っている。地形のいいところをさがして野宿することに決め、アレフは目の前の大きな草の葉を切り落とした。そして、
「あっ⁉」

愕然となった。黒々としたぶきみな沼にぶつかったのだ。見覚えのある沼だった。
「同じ沼だ!? くそーっ、一周してもどってきたんだ！ あの化物めっ！ 今度会ったらただじゃおかねえ！」
と、そのときだった。何者かの気配に気づき、はっと木の上を振りむいて、
「うわっ!?」
思わず恐怖に顔が強張った。えらの張った巨大な毒蛇が、まっ赤な眼を光らせて襲いかかろうとしていた。竜王の魔力によって巨大化したバシリスクだ。噛まれたらひとたまりもない。アレフはあわてて逃げようとして、
「あっ!?」
思わず立ちすくんだ。右手の木に二匹、左手の木にも二匹いたのだ。計五匹だ。
「くそっ！」
アレフは、あとずさりながら剣の柄をにぎりなおした。
五匹のバシリスクは、獲物に飢えた野獣のように鋭い牙をむき出しにして、いっせいにアレフに襲いかかった。アレフは、逃げるとみせかけてすばやく横に跳ぶと、バシリスクの牙が腕のつけ根の革のヨロイをかすめた。と、つぎの瞬間アレフは身をひるがえして、そのバシリスクの首に剣を振りおろした。たしかな手応えがあった。バシリスクの首から青黒い血がいきおいよく噴き出て、バシリスクは地響きを立ててその場に崩れ落ちた。

と、二匹のバシリスクが両側から襲いかかっていた。アレフはあわてて宙に跳んでかろうじてかわすと、バシリスク同志が鉢合わせになり、片方のバシリスクがもう一匹のバシリスクの首に鋭く噛みついた。と、アレフは急降下しながら、すかさず噛みついたバシリスクの頭に剣を振りおろした。二匹のバシリスクは青黒い血を噴き出しながら折り重なるようにして地響きを立てて倒れた。

残るは二匹だ。アレフは池の水際を懸命に逃げた。だが、バシリスクたちは速かった。すぐ追いついて襲いかかった。アレフはかろうじてかわしてうしろにまわりこむと、いきなり尻尾がすさまじいいきおいで顔面を襲った。

「うあーっ！」

アレフははげしく回転しながらぶっ飛んで、いきおいよく水しぶきをあげて頭から沼に落ちた。薄氷の張った沼の水は、冷たさを通りこしてしびれるように痛かった。深さは胸の高さほどだった。

と、一匹のバシリスクはすかさずアレフ目がけて飛んできて、アレフはあわてて水中に潜った。バシリスクは勢いよく池に飛びこんだ。が——水しぶきがおさまると、青黒い血が水面に油のように浮きあがった。水中に潜ったアレフは、飛びこんできたバシリスクののどもとを剣でひと突きにしたのだ。

アレフが水中から顔を出して、ほっと一息つこうとしたときだった。ザバーン——と、いきな

り目の前の水中から最後のバシリスクが顔を出したのだ。
「うわあっ！」
アレフは、かろうじて攻撃をかわすと、必死になって沼から這いあがった。バシリスクもすかさず追い、あっという間にアレフは大樹の幹に追いつめられてしまった。バシリスクは舌なめずりして襲いかかった。
アレフはすばやく反対側に身をかわした。と、バシリスクは幹を一周して、反対側からぬっと顔を出したのだ。そして、
「あっ!?」
アレフが声をあげたとき、なんとバシリスクの太くて長い胴がアレフに巻きついていたのだ。
バシリスクは体をうねらせながらはげしく絞めつけた。
「うっうっうっ！」
アレフの顔が大きく歪んだ。体中がしびれて力がでない。見る見るうちに顔から血の気が失せ紫色になった。と、バシリスクはいきおいよく頭をもたげると、アレフの頭をひとのみにしようとして、頭上から襲いかかった。
「くそ〜っ！」
アレフは、必死に両手で剣の柄を握りしめ、渾身の力をこめて剣を上に突きあげた。剣は、大きくあけたバシリスクの口の奥にいきおいよく突き刺さった。

ぎゃおぉぉぉっ！――ぶきみな奇声が密林にとどろき、バシリスクが大きくのけぞった。と、アレフを絞めつけていたバシリスクの太くて長い胴がするりととけた。

「今だっ！」

アレフは、いきおいよく宙に跳び、

「たーっ！」

思いっきり剣を振りおろした。

ザッグンッ！――大きな手応えがあった。バシリスクの頭はまっ二つに裂け、青黒い血がいきおいよく飛び散った。そして、アレフが長い胴を斬り裂きながら着地すると、バシリスクは地響きを立てて倒れた。

と、それに呼応するかのように、突然、ごおおおおっ――と、すさまじい地鳴りとともに地面がはげしく揺れ動き、まわりの樹々が左右にはげしく揺れたのだ。

「うっ!?」

転倒しそうになりながらアレフは思わず目をこすった。目がどうにかなったと思ったのだ。まわりをおおっていたうっそうとした密林が消えはじめたのだ。

「あっ――!?」

恐怖に顔を強張らせながら、アレフはあ然として立ちつくしていた。一瞬のできごとだった。

いつの間にか地鳴りも揺れもなくなり、密林が消えたあとには、荒涼とした見わたすかぎりの

砂漠が広がっていた。
「あわわわわっ！」
アレフは、そらおそろしくなって、一目散に駆けだした。と、やがてそのあとに、すーっと魔界童子が姿を現した。
「ちっ」
魔界童子は、走り去るアレフを見ながら、舌打ちした。右手の五本の指の一本一本に小さな切り傷があり、そこから青黒い血がたらりと流れ落ちた。
アレフは必死に逃げた。そして、砂漠のはずれにある岩山の小さな洞窟に倒れこんで、四つん這いになって苦しそうにはげしく肩で息をしていた。一時間、いや二時間は走ったのかもしれない。心臓がいまにもやぶけそうだ。足が棒になって動かなかった。が、やがて呼吸が落ち着くと、
「は～っくしょん！」
アレフはとたんに大きなくしゃみをして震えた。
濡れた服がぴったりと肌に吸いついて冷たかった。沼に落ちたうえに、バシリスクと戦ったり走ったりしたから、水と汗でびっしょりだった。だが、汗がひけると、急に寒さを覚えたのだ。そうでなくても、真冬の砂漠の夜は冷えこむというのに――。
あわててアレフは革袋から油紙の袋を出すと、なかの火打ち石とたいまつを調べ、ほっと胸をなでおろした。大丈夫だった。命のつぎに大切なのは水と火だ。だから、旅人たちは火打ち石や

たいまつを油紙の袋に密封して大事に持ち歩くのだ。
アレフは、さっそく洞窟のそとから枯木を集めてきて火を焚くと、暖をとりながら水びたしになったお守りや薬草、食料やこまごましたものを革袋から出して、絞った布で丁寧に水気をふいた。そして最後に、四つ折りの古地図を広げて火で乾かそうとしたときだ。
「あっ!?」
地図の一点に思わずアレフの目がとまった。
ガライの南東にある砂漠のほぼ中央に、小さな模様が浮かびあがっていた。印だった。地図に隠されていた印が水に濡れて浮かびあがったのだ——。

6 ロトの洞窟

東南の空に、ひときわ輝く星が見える。女神八光星だ。その星にむかって、アレフは烈風の砂漠を黙々と歩きつづけていた。
岩山の小さな洞窟で野宿してから二日が過ぎている。
だが、昨日から空はよく晴れていたが、また今夜になって雲が出てきた。さっきまで見えていた赤い満月は、いつの間にか雲に隠れてしまっている。女神八光星が雲におおわれるのも時間の問題だ。風はいっこうに衰える気配がない。アレフは足を速めた。

アレフは、古地図に浮かびあがった印の地点を目指していた。占い師が告げた「南東」と「砂漠」は、この印の地点とほぼ一致するからだ。「闇」はおそらく「夜」か「洞窟」を指すのではないかと思ったのだ。

女神八光星がまさに雲におおわれようとしていたときだった。女神八光星のちょうど真下の地平線に、大海に浮かぶ孤島のような岩山が見えてきたのだ。

「あれは⁉」

思わずアレフは岩山にむかって烈風のなかを駆け出した。

だが、岩山までは想像していた以上に距離があった。およそ一時間ばかりかかって、やっとアレフはたどり着いた。アレフは、肩で大きく息をしながら、岩山を見まわした。ちょうどラダトーム城の宮殿ほどの大きさだった。そのときだった。すーっと上空が明るくなったのだ。

驚いて見あげると、岩山のちょうど真上の雲の切れ間から、まるで岩山を照らすかのように、赤い満月が顔を出していた。

アレフには、とても偶然のできごととは思えなかった。なにかを啓示するような突然の赤い満月の出現に、この岩山が古地図に浮かびあがった印の地点だとアレフは確信した。そして、「闇」とはこのなかの「洞窟」を指すのだということも。

アレフは、さっそく岩山にのぼり、月のあかりをたよりに、洞窟の入口をさがした。そして、中腹の切り立った岩の奥に、岩の割れ目を見つけた。奥が深そうな闇が口をあけていた。アレフ

はたいまつをつけてなかに潜りこんだ。
しばらく奥へ進むと、たいまつの炎の先に下におりる石段が浮かびあがった。どうみても自然にできたものではない。人間の手で作られた階段だ。
アレフは、誘われるように石段をおりた。床に積もっている塵埃は何百年来のものだろう、歩くたびに粉のように舞いあがる。石段の下は、闇の迷路になっていた。
アレフは、息を殺し緊張しながらさらに奥に進んだ。すると、また下におりる石段にぶつかった。石段をおりると、たいまつの炎の先に開いたままの扉が浮かびあがった。
アレフは、扉のなかへ入り、たいまつをかかげて周囲を見まわした。荒削りの石壁でできた四角い部屋だった。そして、正面の壁のところどころに、なにやら文字のようなものが見えた。
近づいて壁についた埃を手で払うと、壁に刻まれた楔形文字がくっきりと浮かびあがった。かなりの範囲で文字が刻まれているようだ。アレフは、さらにまわりの埃も払うと、つぎつぎに文字が現れた。
だが、なにが書いてあるのかアレフにはさっぱり見当がつかなかった。楔形文字を知らないアレフには解読できるはずもなかったのだ。そのとき、低い重い声がした。
「よくきたな、勇者ロトの血をひく者よ」
「うっ!?　だ、だれだっ!?」
驚いたアレフが振りむきざま剣の柄に手をかけて目をこらした。

青白い炎につつまれた白髪の老人の像がうっすらと宙に浮いていた。藍色の古い法衣をまとい、手にはつえを持っている。痩せこけた骨だらけの眼窩の奥で、神秘的な澄んだ目がじっとアレフを見ていた。

「だれだっ!?」

アレフはもう一度叫んで柄をにぎる手に力をこめた。

「ガライじゃ」

「ガ、ガライ!?」

アレフは、一瞬自分の耳を疑った。

「冗談じゃない! ガライはとっくの大昔に死んでるはずだ!」

「黙って聞くのじゃ!」

ガライは、神秘的な澄んだ目で鋭くにらんだ。

「うっ!」

有無をいわせないふしぎな力と迫力があった。

「アレフガルドが平和にならぬかぎり、安心して永久の眠りにつけぬのじゃ。たとえ肉体がほろびてもな。だから、おまえがここに現れるのを、ずーっとこのロトの洞窟で待っておった。気が遠くなるほど長い時間な」

「ロトの洞窟?」

「勇者ロトの血をひく者よ」
　ガライは一段と声をあげ、
「見よ。勇者ロトの言葉を。勇者ロトがロトの血をひく者にあてた言葉じゃ」
　と、壁の文字を杖の先で指し、
「精霊ルビス曰ク、光アルカギリ、闇モマタアル。ワタシニハ見エル。再ビ、何者カガ闇カラ現レヨウ――ト。精霊ルビスノ御言葉ニ誓イ、勇者ロトノ血ヲヒク者ニ捧ゲル。勇者ロトノ血ヲヒク者ヨ。再ビコノ地ガ闇ニオオワレタ時、三人ノ賢者ニ託シタモノヲ、捜シ出スガイイ。ソノ時コノ地ハ、再ビ光ヲトリモドスデアロウ。ロト――」
　と、つえの先で文字を追いながらアレフに読んで聞かせた。
「かつて、精霊ルビスの予言を聞いた勇者ロトが、アレフガルドが危機に陥ることを危惧し、魔王を倒したときの三種の道具を信頼する三人の賢者に託したのじゃ。だから、このロトの教えにしたがって、三人の賢者に託したものをさがし出すのじゃ」
「いったい、三人の賢者に託したものって⁉」
　といって、はっとなった。太陽の石のことを思い出して、アレフはあわてて革袋から太陽の石を取り出した。
「た、たしか、王さまはロトに仕えた賢者がラダトーム城に献上したものだっていったけど、この太陽の石はそのなかの――⁉」

ガライはじっと太陽の石を見て、やがておもむろにうなずいた。
「じゃあ、あとの二つはなんなんだ⁉　知ってるんだろ⁉　教えてくれよ！」
だが、ガライは首を横に振った。
「長い時間をへたいま、それはどこにあるのかだれにもわからぬ。だがそのひとつがこの国の北東のはずれにあるという噂を聞いたことがある」
「北東？」
「勇者ロトの血をひく者よ。おまえにこれを授けよう」
ガライは、手のひらを差しだした。と、手のひらにちょうど硬貨のような形をした赤い美しい宝石の首飾りが現れた。そのきらきら輝く宝石のまわりに、八本の小さな銀の剣の装飾がほどこしてあった。
「呪法の首飾りじゃ」
「呪法？」
「これをにぎりしめて、念じるがいい。呪法をかけることも解くこともできる。さらばじゃ、勇者ロトの血をひく者よ。わしはもう二度とこの洞窟にもどることはなかろう」
と、いい残して、青白い炎とともにすーっと姿が消えた。
首飾りだけが、きらきら輝いて宙に浮いていた――。

第三章　一〇〇〇年魔女

アレフガルド北東部にある荒涼とした山岳地帯は、かつて緑豊かな平原地帯で、山間にはたくさんの村や集落があったという。
だが、例の天変地異で突如隆起し、山肌を崩れ落ちた土砂の波がつぎつぎに村や集落をのみこみ、一瞬にして緑の平原は赤茶けた岩肌の切りたった山岳地帯へと姿を変えたのだ。
ロトの洞屈を出たアレフは、ガライが示唆した北東部を目指して、砂漠を横切り、旧アレフガルド街道を東にむかい、いくつもの森や谷を越え、この荒涼とした山岳地帯へと入った。
途中なんども魔物に襲われたが、さすがにこの地形のけわしい山岳地帯にはそれらの姿はなかった。
いつの間にか王の月から不死鳥の月にかわり、季節もまたきびしい冬から木の芽どきの春へと変わっていた——。

1 強襲

日が暮れると急に冷えこむ。北の海から吹きつけてくる寒風は、まだ真冬のそれだ。だが、季節のうつろいを示すかのように、東の空にはおぼろ月が出ていた。

と、岩山の峰を、闇を切るようにぶきみな影が走った。すさまじい速度で岩を跳び疾風のように走る。と、その影が宙に高く跳び、小高い岩に着地してとまった。影の騎士だった。

大魔道ザルトータンからなんの報告もないのに業を煮やした影の騎士は、ついに悪魔の騎士と手を組んで動き出したのだ。

影の騎士は鋭い目で前方を見ると、にやりとぶきみな笑いを浮かべた。はるか前方の頂きに人影が見えた。

山頂にたどりついたアレフは、いまのぼってきた北の方角を振りむきながら額の汗をぬぐうと、南へむかって岩山をおりはじめた。まるで何年も歩きなれた道のように——。

旅はアレフを成長させた。まず、旅になれた。日に焼けた顔は精悍さを増した。歩く速度も距離も増した。腕や肩に筋肉らしいものがつき、革のヨロイはいまにもはち切れんばかりだ。

剣の腕もかなり上達した。自己流とはいえ、何年も前から剣の稽古に励んできたせいか、実戦を重ねるたびに腕に磨きがかかったのだ。

自信もついた。心細さもなくなった。だが、ときどき人恋しさにさびしくなる。無理もなかった。ガライと会ってから、人間と会っていないのだ。そんなときは、ガライの町のあるはるか西のかなたを眺めて、あの美しいセシールの笑顔を思い浮かべた。

ごぉぉぉぉ――と、ぶきみな音が谷底から響いてくる。アレフは平担な岩場に跳びおりて足もとを見た。

急な崖が深い谷底につづいていて、その谷底を東から西へ蛇行しながら河が流れている。雪溶け水を集めた水量豊かな河が、両岸の岩肌を削りながら怒濤のように流れているのが、月あかりにはっきり見えた。一歩足を踏みはずせば、それこそ一巻の終わりだ。

と、急に河が黒い一本の帯になった。月が雲に隠れたのだ。そのときだった。

ゴロゴロゴロ――！　ぶきみな音が頭上からして、巨大な石が転がり落ちてきた。

「うわあっ！」アレフがすばやく跳びのくと、巨大な石は地面に大きくはずみ、すさまじいいきおいで崖を転がり落ちて、谷底の河に水音とともに消えた。

だが、ほっとしたのも束の間だった。ピクッ――と、アレフの背中が緊張した。背後に魔物の気配を感じたのだ。アレフはすばやく剣の柄をつかむと、じっとあたりの様子をうかがった。谷底を背にアレフは全神経をとがらせ、敵が正体を現すのを待った。

と、上空がすーっとあかるくなった。雲から月が出たのだ。

「うっ!?」

アレフは驚いて剣をぬいた。
その月あかりとともに、岩の上にぶきみな黒い影が姿を現したのだ。影の騎士が――。
「なにものだ!?」
「ふっふふふふ。はっははは!」
影の騎士がぶきみな声で笑うと、その足もとから影が出て、岩をはうように広がった。と、その影がいくつにも別れたかと思うと、いきおいよく立ちあがって黒影の騎士団になったのだ。その数はおよそ一〇体あまり。
「あっ!?」
アレフはあ然とした。だが、竜王の配下の魔物であることを、はっきりと感じとっていた。
と、黒影の騎士団が襲いかかった。と、同時にアレフも斬りかかった。だが、黒影の騎士たちはアレフの剣をかわしてつぎつぎに襲いかかる。敏速で、身軽で、そのうえよく鍛えられていた。
やっとアレフの剣が一体の心臓をひと突きにした。アレフはすかさず宙に跳ぶと、
「ターッ!」
その騎士をまっ二つに斬り裂いて着地した。
と、黒い血をいきおいよく噴き出しながら騎士の体がばらばらに砕け散ったのだ。そして、うすっぺらい無数の破片となって、まるで紙切れのように風に流れて消えた。
と、騎士たちが疾風のようにアレフのまわりをまわりはじめた。攪乱戦法に変えたのだ。騎士

たちの数が二〇にも三〇にも見える。その動きがさらに加速を増した。
アレフは肩で息をしながら体勢を変えた。額(ひたい)には玉のような汗が浮いていた。まともに闘(たたか)っては勝ち目はない。だが、逃げても逃げ切れそうにない。
「くそーっ！」
アレフは剣の柄をにぎりなおした。
と、影の騎士たちがいっせいに襲いかかった。その数は三〇にも四〇にも見え、見定めがつかない。アレフは、剣を振りまわしながら、
「たーっ！」
大きく宙(ちゅう)に跳(と)んで騎士たちの後方に着地した。と、着地した岩がグラッと傾(かたむ)いて、
「うわっ!?」
アレフは思わず声をあげた。と、つぎの瞬間、なんとアレフの足もとの岩がガラガラッと音を立てて崩(くず)れ落ちたのだ。
「あ〜〜っ！」
アレフの悲鳴が谷底に響きわたった。
急な崖を石のようにごろごろ転がり落ちたアレフは、河岸の岩に大きくはねかえると、怒濤(どとう)のような激流(げきりゅう)にあっという間にのみこまれて姿を消した。
「追えーっ！」

影の騎士が叫びながら先頭に立って崖をおりると激流にそって疾風のように消えた。
騎士たちは、いく手にも別れてはるか下流までくまなく捜査(そうさ)した。
東の空がうっすらと明るくなりかけたころ、騎士たちが下流の大きな滝のそばの岩場に集まってきた。だが、影の騎士を満足させた者はいなかった。手がかりすらつかめなかったのだ。
「ええいっ！　もう一度さがせいっ！」
怒(いか)りに全身を震わせながら、影の騎士はさらに命じた。
騎士たちは下流と上流に別れて疾風のように消えた。
影の騎士は必死だった。あの急峻(きゅうしゅん)な崖を転げ落ちて激流に消えたのだ。おそらく生きてはおるまい——と思った。だが、自らの目で屍(しかばね)を確認しなければ安堵(あんど)できないのだ。十五年前の轍(てつ)を踏まないためにも——。

2　マイラの道化師

「うっ——」
アレフは、うっすらと目を開けた。黒ずんだ梁(はり)がぼんやり見えた。やがて、はっきり見えてくると、それが天井であることがわかった。

「やっと、気がついたかあ」
と、ロウソクの炎をかざして、四〇半ばの男がうれしそうにのぞきこんだ。
「だめかと思ったぜ。三日も眠りつづけてたんだからな」
こ、ここは――？　アレフが身を起こそうとしたとたん、
「うっ！」
と、思わず呻き声をあげた。全身にはげしい痛みが走ったのだ。
「マイラの村さ」
男はそういって人なつっこく笑った。
つんと湿ったカビ臭い匂いと酒の匂いが鼻につく。どうやらここは地下室のようだ。アレフは、自分が置かれている状況を必死に考えようとした。だが、少しでも体を動かそうとするとはげしい痛みが全身に走る。なにかいおうとしても、痛くて口が動かない。
無理もなかった。頭には包帯がまかれていた。額や頰や顎が赤く腫れあがってあざになっている。手や腕、胸や肩にも包帯がまかれ、右足が添え木で固定されていて包帯がまかれていた。骨折したのだ。
「旅の若い男がさ、河岸に倒れていたあんたを見つけて運んで来たんだよ。真夜中にさ」
旅の――？　たしかあのとき――崖を転げ落ちながら全身に大きな衝撃を受けた。岩にもろに背中を打って、激流に放り投げられたような気がする。だが、そのあとのことはアレフには記憶

がなかった。
「背の高い若者でね。背中まである長い髪をうしろで束ねてた。背中には長い剣をしょっててね」
えっ――アレフは驚いた。そして、とっさに砂漠の岩山で大さそりから救ってくれたあの旅の若者の顔を思い浮かべた。
「大事にしてくれって、名前もいわずにさっさと行っちまった」
そうか、また助けてもらったのか――。
「竜王の手下に襲われたんだろう？　あの影の騎士の一味に。その若者が立ち去ってすぐだった。やつらがこの村を襲ってしらみつぶしにあんたのことをさがして行きやがった。もっとも、この秘密の地下室にあんたを隠したから、いまこうして無事にここにおるんだがな。もともとこの地下室は酒を密造するために作ったものらしいんだが――あっ、いまは単なる物置だがね」
そうか、やつらが影の騎士の強襲軍団か。ラダトーム城を襲い、ローラ姫を殺したという――
――。アレフの胸にあらためて怒りがこみあげてきた。
「おれはこの村で酒場をやっているマヌエルってんだ。昔はしがねえ道化師をやっててね、アレフガルド中旅したもんさ。もっとも、一〇年ほど前、これを魔物にやられちまってね」
と、無念そうに右足をさすった。
「それっきり旅はやめちまった」
ぼ、ぼくは――アレフも名乗ろうとしたが、口が痛くて思わず顔をゆがめた。

「無理しなさんな。この村は昔からの温泉場だ。まあゆっくり温泉にでもつかりながら養生するんだね。二、三か月もすりゃ元通り元気になるさ」
マヌエルは右足をぎこちなくひきずりながら、梯子をのぼって上の階に消えた。
そのマヌエルに、思いもしないことを知らされたのは、それから一週間ばかりあとだった。やっと上半身を起こせるようになり、なんとか口をきけるまでにアレフは回復していた。
マヌエルは、一日に三回、きちんと決まった時間に食事を運び、夕食のあとは決まって薬草を塗りなおしてくれた。決して自分の妻には手伝わせようとはしなかった。それがさも自分の使命かのように。
いつものように薬草を塗ってもらったあと、アレフは自分の旅の目的を告げ、勇者ロトが三人の賢者に託したものの手がかりになるような情報がないかたずねた。
「勇者ロトの――」
さすがにマヌエルは驚いて、じっとアレフを見ていた。いつものひょうきんでお人好しの顔が消えていた。
「竜王の手下があれだけ血相変えてさがしてたから、なにか大変なわけがあるだろうとは思ってたんだが――。そうか、勇者ロトの血をひく者か――」
「ねえ、なんでもいいんだよ。昔アレフガルド中旅したんだろ？」
「そういわれてもなあ――」

マヌエルは顎をなでながら首をかしげた。
「そうだ、おれが子供のときうちのじいさん――おれと同じように旅まわりの道化師をしてたんだがね、この村の北西にある海のそばに雨のほこらがあるって聞いたことがある」
「雨のほこら？」
「そこに、一〇〇〇年も生きつづけているおそろしい魔女が棲んでるってね」
「一〇〇〇年？」
「何百年も生きているからそう呼ばれているんだそうだ。その魔女がいろんな宝石なんかをいっぱい集めてるっていってた。ひょっとしたら、ロトが賢者に託したものは持ってなくても、なにか知ってるかも知れねえな」
「ここから北西かあ――」
アレフはすでに革袋から古地図を取り出して、雨のほこらの方向を確認していた。マヌエルはその古地図をじっと見ると、
「じつは――おれもひとつ聞きたいことがあるんだ。悪いけどさ、その革袋のなか見せてもらったよ。担ぎこまれたときびしょ濡れだったから、荷物乾かしてやろうと思ってさ。その――古地図と命の石のことなんだが」
「命の石？」
「青いきれいな石を持ってるだろ？」

「これのこと？」
アレフは革袋の底から布につつんだ命の石を出して見た。
「どこで手に入れたんだい？」
「生まれたときからさ。二つとも」
「生まれたときから？　でも、ラダトーム出身だっていったよな？　たしか」
「うん。でも、本当は拾われたんだ」
「拾われた？」
「生まれてすぐにね。ラダトームに近い岩山で」
アレフは、父ガウルが話してくれたことをマヌエルに話すと、マヌエルの目が見る見るうちに熱い視線に変わった。
「そうか。そうだったのか――じゃあそのときはすでにキメラの翼を持ってなかったんだね？」
「キメラの翼？」
アレフは怪訝な顔で首を横に振った。
「そうか。ないところをみると、キメラの翼でドムドーラからその岩山まで飛んだんだな」
「ドムドーラから飛んだ⁉」
「いやあ、古地図と命の石を見たときからひょっとしたらとは思っていたんだが、これではっきりしたよ。おれはねえ、一度あんたに会ったことがあるんだよ。あんたが生まれた日にね」

「えーっ!?」
アレフは驚いて思わず大声をあげた。が、とたんに、
「あだだだ――」
大きく顔をゆがめた。全身に痛みが走ったのだ。
「あ、会った――って!?」
「ドムドーラでさ」
「ドムドーラ!?」
「十五年前の王の月の王の日のことさ――」

当時、マヌエルはキャラバン隊とともに町から町をわたり歩き、行く先々で芸を披露して生計を立てていた。
マヌエルたちのキャラバン隊がリムルダールの町からマヌエルの故郷のマイラの村にむかって進んでいたときのことだ。あと数日でマイラだというところで、突然十数匹のリカントに襲われ、キャラバン隊はすかさず武器を取って応戦した。
だが、運悪く武器を取りそこねたマヌエルはリカントに追われて、深い森に逃げるはめになってしまった。そしてなんとかリカントから逃れてほっとしたとき、いきなりの頭上から大蛇のような胴体に禿げ鷹の頭と翼を持つ怪物が襲いかかってきた。悪の魔力によって動物が合体変身し

たキメラだった。マヌエルはまっ青になり震えながら必死に精霊ルビスに祈った。
と、そのとき、突然白い塊が飛来して、キメラに体当たりした。白いフクロウだった。フクロウは、一気に上昇し、上空で一回転すると、急降下しながら双眼からまばゆい黄金色の光をはなったのだ。その光がキメラを直撃し、まるで雷に撃たれたようにキメラの体がいきおいよく燃えあがった。そして、マヌエルの足もとに落下し、二、三度痙攣すると絶命した。
と、マヌエルのかたわらにふわりと着地したフクロウは、鋭い嘴でキメラの羽をむしり、左右の翼から二枚の風切羽をぬくとマヌエルの前においてじっとマヌエルを見た。
雷に撃たれて死んだキメラの翼、それも一羽から二枚しか取れない風切羽にはふしぎな力がある。思いっきり高く放ると、投げた人間をはるか遠く離れた場所へと一瞬にして移動させてしまうのだ。
「これで村にもどれっていうのかい？」
マヌエルはキメラの翼を手にしてたずねた。すると、
『わたしは精霊ルビスの使いとしてやってきました』
なんと、フクロウは人間の言葉を話したのだ。そして、こういった。
『この翼をひとつ使い、おまえはドムドーラの町へ行くのです。そして、着いた場所から一〇歩のところにある家に行き、もう片方の翼をわたしなさい』

「そして、おれはキメラの翼を持ってドムドーラに行き、その家の生まれたばかりの男の子の手ににぎらせて、立ち去ったのさ」
「じゃあその男の子が――」
マヌエルはアレフを見つめて、「そうだ」といわんばかりにうなずくと、
「しかし、その晩ドムドーラが竜王の手下に襲われるとはなあ――」
と、顔を曇らせて大きく溜息をついた。
かつてドムドーラの町がみな殺しにされ燃やされたということは、アレフも子供のころからだれからとなく聞かされて知っていた。
「だが、その男の子が母親とキメラの翼で逃げて奇跡的に助かったってわけさ――」
「ねえ、ぼくの両親のこと覚えてるだろ!?　名前はなんていったの!?」
「いやあ」
マヌエルは申しわけなさそうな顔をした。
「あのときは、男の子のことばかり頭にあってねえ――」
「じゃあ家は!?　ぼくの生まれた家はドムドーラのどのへんにあったの!?」
「たぶん広場に近いところだと思ったがなあ。悪いなあ。よく覚えてないんだよ」
といって、アレフの手にある古地図と命の石を見て、
「ところが、その日その家を訪れたのはおれだけじゃなかったんだ。おれの前に先客があったの

さ。ガライの方からやってきたという老魔道士と、メルキドの北部からやってきたという僧侶がね。老魔道士は古地図を、僧侶は命の石を置いていずこともなく去って行ったんだそうだ」
「そうか——そうだったのか——」
アレフは古地図と命の石を見つめた。
「しかし、あのときの男の子が生きのびていたとはなあ。なにか特別な使命を持って生まれてきた子だとは思っていたが——」
と、マヌエルは、感概深げにアレフをまじまじと見た。そして、
「そうだ」
ぽんと膝を叩くと、マヌエルは上の階に行って漆塗りの古い宝石箱を持ってきた。漆はところどころ剝がれているが、蓋には木彫りの模様がほどこしてあった。マヌエルはその蓋をあけると、
「これをあげるよ。持っていればいつかきっと命を守ってくれるはずだ」
と、鳩形の笛をアレフに差し出した。陶器でできた浅黄色の美しい笛だった。
「妖精の笛だ」
「妖精の笛？」
アレフは手にした笛を物珍しそうに見た。胴の中央には美しい花模様が刻まれていた。
「昔、この村を魔物たちから守ってくれた笛なんだよ」
「えっ!?」

「二〇〇年前にね。もともとこの笛は妖精たちが身を守るために作ったといわれている楽器のひとつなんだそうだ」

ガライの残した銀の竪琴と同じだ——アレフはふとガライの町を思い出した。そして、あの美しいセシールのことも。

「ま、うちの祖先がどこでどうやって手に入れたか知らないが、うちは代々旅まわりの道化師だからね、きっと旅の途中で手に入れたんだろうなあ。二〇〇年前にはすでにうちにあったんだ」

二〇〇年前の天変地異のあと、町や村は竜王の戦闘軍団や魔力によって巨大化した魔物や怪獣たちにつぎつぎに襲われた。マイラもまた例外ではなかった。

だが、魔物や怪獣たちが村の入口まで押しかけたとき、マヌエルの先祖が精霊ルビスに祈りながら必死に妖精の笛を吹いたという。すると、その音色を聞いた魔物や怪獣たちはとたんに脅え、あるものはあわてて逃げ、人間の形をした巨大な石の化物はその場に眠ってしまったのだ。

それ以来、魔物や怪獣たちはマイラにめったに近づくことがなくなり、マイラは生き残ることができたのだ。

「そうか。それで沢山あった村のなかでこのマイラだけが残ったのか。でも、なんでそんな大事な笛をぼくに？」

「勇者ロトの血をひく者だからさ。一日でも早く竜王を倒してアルフガルドに平和を取りもどしてほしいからさ。おれの息子が将来道化師として自由に旅ができるようにね」
そういってマヌエルは笑った。
「ありがとう」
アレフは妖精の笛をしっかりとにぎりしめた。

アレフがやっとつえを頼りに歩けるようになったのは、不死鳥の月から女神の月に変わり、一年で一番すごしやすい新緑の季節を迎えてからだった。
マイラは四方を森にかこまれた戸数二〇〇あまりの小さな村だった。集落の入口に近いマヌエルの家を出て北にむかうと、すぐ道具屋と共同井戸があり、その先に村の広場があった。その広場には、雑貨屋や武器屋などの店があり、さらに北にむかうと温泉が湧き出ている露天風呂があった。
七歳になるマヌエルのひとり息子と連れだって、アレフは毎日この露天風呂に通って傷をいやした。村人はみな親切でやさしかった。
やっと右足の添え木がとれると、アレフはさっそく村の老魔道士相手に呪法の練習をはじめた。老魔道士が、ラダトームでアレフの呪法の師だった老祈禱師メルセルと、昔ともに修業を積んだ間柄だと知ったからだ。ガライに授かった首飾りを使うと、呪法はさらに能力を増した。アレフ

の呪法は見る見るうちに上達し、なんとか思い通りにこなせるまでになった。
だが、ケガが全治し、ヨロイやカブトを新調してマイラを旅立ったのは、暑い夏を迎（むか）えてからだった。女神（イシュタル）の月から王妃（クイーン）の月に変わり、さらに牛頭神（ケンタウルス）の月に変わろうとしていた。

3　雨雲のつえ

滝のような、はげしい雨だった。容赦（ようしゃ）なくアレフをたたきつけ、目をあけているのさえやっとだった。数歩先すら見えないのだ。濁流（だくりゅう）がすさまじいいきおいで足もとを流れて行く。アレフは足場を確かめながら一歩一歩慎重（しんちょう）に進んだ。
だが、最後の峠（とうげ）を越えたとたん、その雨がまるでうそのようにあがり、突然横なぐりの冷たい風が吹く濃霧（のうむ）のなかに出た。
いや、雨があがったのではなく、雨をぬけたのだった。年中はげしい雨が降っているといわれているこの岩山の「雨の領域（りょういき）」を三日かかってやっとぬけたのだ。
峠を境に、いま越えた峠（とうげ）のむこうでは、相変わらずはげしい雨が降りつづいていた。マイラの村を出発してから十二日近くたっていた。
マイラを旅立ったアレフは、まず南下して旧アレフガルド街道（かいどう）を西にむかい、森や谷をいくつも越えて、やがて北の海にむかって北上したのだ。そして、あの「雨の領域」に突入したのだっ

た――。
横なぐりの風に身を屈め、濃霧の岩場をしばらく行くと、かすかな潮の香りが鼻をつき、アレフは海が近いことを知った。
アレフはさらに進み、斬り立った岩影を曲がったときだった。断崖絶壁の岬の先端にそそり立つぶきみな奇岩が、突如目の前に姿を現したのだ。見るからにいわくありげなおどろおどろした巨大な奇岩だった。
「あれだ！」
アレフは思わず緊張した。
身を屈めながら隠れるようにその奇岩に近づくと、ほどなく岩の割れ目を見つけた。
なかに入ると、奥に深い闇がつづいていた。その闇は奇岩のなかへつづいていそうだ。ピタッ、ピタッ――奥から天井にたまったしずくが床に落ちる音がする。入口からのかすかなあかりを頼りに、アレフは息を殺して奥へむかった。
五〇歩ほど進んだときだった。突然闇のなかで、ぴかーっと赤い眼が光った。アレフはびくっとして、思わず剣をぬいて目をこらした。
アレフの数倍もある巨大な毒蜘蛛が、洞窟に張りめぐらされた蜘蛛の糸のまんなかで待ちかまえていたのだ。と、毒蜘蛛はいきなり大量の白い糸を吐いて襲いかかった。
アレフは横に跳んで、かろうじてかわした。だが、毒蜘蛛は息もつかさずまた大量の糸を吐い

た。アレフはすばやくまたかわした。だが、一本の糸がアレフの剣を持つ右手にへばりついた。

「あーっ！」

ねばねばした粘着性の液状の糸だった。取ろうとしても糸をひいて取れない。と、右手に気をとられている一瞬の隙をついて、毒蜘蛛がまた大量に吐いた。

「うわっ！」

よけきれずにもろに体に浴びてしまった。

「く、くそっ！」

アレフは糸をむしり取ろうとして必死にもがいた。だが、毒蜘蛛はじりっじりっと糸でアレフをたぐり寄せると、奇声を発しながら異様に長い十三本の足を広げて襲いかかった。

「うわあっ！」

アレフの悲鳴が洞窟に響きわたった。そのときだった。

「おやめっ！」

どこからともなく女の声が谺した。

アレフの首もとにちょうど突き刺さろうとしていた毒蜘蛛の長い足がぴくっととまった。

「あたしの客のようだからね」

毒蜘蛛が声に従い、おとなしく攻撃の足をおろすと、アレフをおおっていたねばねばした液状の糸が見る見るうちに地面に流れ落ちて、やがて溶けて消えた。

「さぁ、おいで」

と、正面奥の扉があいた。

なかに入ると、つんと香料のきつい匂いが鼻をついた。大きな洞窟が、そのまま大広間になっていて、銀の食器や燭台などの年代ものの高価な装飾品が、木彫の美しい立派な棚やテーブルに大事に飾られていた。正面の洒落た飾り窓の前にはさりげなく籐の椅子が置いてある。そして、その窓のそとを濃霧が流れていて、はげしく打ち寄せる波の音が聞こえる。そとは断崖絶壁で、その下に荒れ狂う北の海が広がっているのだ。

「なんの用かえ?」

大樹の幹のような岩柱の陰から、おもむろに魔女が姿を現した。

真っ白な顔。まっ赤な染料で目張りをいれた大きな鋭い目。耳まで裂けた大きな赤い唇。宝石をちりばめた大きな首飾り。大きな宝石の指輪。まっ赤な染料を塗った大きな鋭い爪。ドレスの裾を床に引きずり、手には色鮮かな絹編みの大きな扇を持っていた

「なんじゃや。まだ子供じゃないかえ」

魔女は拍子ぬけしたように、アレフをのぞきこんだ。

アレフはキッと魔女をにらみつけていった。

「勇者ロトが三人の賢者に託したものをさがしているんだ」

「ほっほほほほ」

魔女は、扇で口を隠しながら笑った。と、いきなり鋭い目でアレフを見つめた。
「雨雲のつえのことかえ?」
「雨雲のつえ?」
「それならたしかにあたしが持っている。だが、わたすわけにはいかないよ」
「ぼくはロトの血をひく者なんだ」
「ロトの?」
一瞬、魔女の顔が強張った。
「おまえがロトの血をひく者だというのかえ? ほっほほほほ。ばかをいいでないよ」
「本当だ!」
アレフは、太陽の石のことやロトの洞窟でガライと会ったことなどをあらいざらい話した。
「だから、竜王を倒すために、なんとしても三人の賢者に託したものがほしいんだ!」
「いやだね」
「頼むよ!」
「やーよ」
と、魔女は、扇の影からまるで手品師のような鮮やかな手つきで、先端に美しい銀の冠のついたつえを取り出した。柄には美しい宝石がちりばめられている。雨雲のつえだ。アレフは思わず見とれていた。

「この雨雲のつえは、あたしだってやっと手に入れたものなんだからね。あたしに残されたたったひとつの形見(かたみ)なのよ。あたしが愛したたったひとりの男、勇者ロトのね」
「あ、愛したあ——!?」
アレフはあ然とした。
「勇者ロトが魔王を倒しに行く途中、病気で倒れたロトを助けたことがあるのさ」
「本当に本物のロトだったの!?」
「疑うのかえ?」
魔女は、じろりとにらみつけた。と、
「あのころは、あたしも若くて美しかった」
ふとなつかしそうな顔で遠くを見た。
「あの人を見て、あたしは一目で恋をしてしまった。一生に一度のね」
ま、まさか勇者ロトがこんな魔女と!? アレフにはとても信じられなかった。
「ロ、ロトもあなたを愛してたの!?」
アレフは、思わず聞いた。
「さあね」
魔女はほほえみながら小首(こくび)をかしげた。
「ロトは病気がなおると旅立って行った」

「なんだ片思いかあ！」

ほっとして、アレフは思わず大声を立ててしまった。と、魔女はいきなり、

「おだまりーっ！」

頭のてっぺんから金切り声を出し、つばを飛ばしながら怒鳴った。

「おだまり！　おだまり！　おだまり！」

アレフは、思わず耳をふさいだ。

「でも――」

魔女は怒りがおさまると、両手をにぎりしめて、うっとりとした。

「あたしはロトのことを忘れることができなかった。純情だったのよねえ。でも、魔女の世界では、魔女が人間に心を奪われてしまうことは御法度。ロトを愛したために、あたしは魔女の世界から追放されてしまった。それ以来ずーっとここで暮らしてるのさ。ロトの思い出とともにね」

魔女は、深い溜息をついた。

「わかっただろ？　あたしが雨雲のつえを譲れないわけが」

「で、でも！」

「でもじゃない！」

「あなたにとって雨雲のつえは大事なのかもしれない。でも、ぼくにとっても大事なんだ！　それにさ、勇者のロトはアレフガルドのためにわざわざ三人の賢者に託したんだ！　勇者ロトはア

レフガルドに平和を取りもどすことを願ってるんだ！」
魔女は、じっとアレフを見つめた。
「愛する男が望んでいることを、あたしが邪魔してるっていうのかえ？」
「もし、どうしてもわたせないというならあなたを倒して、雨雲のつえを手に入れるしかない！」
と、剣の柄をつかんだ。
「ふっふふふふ。ほっほほほほ」
魔女は、また扇で顔を隠して笑った。そして、おもむろに扇をさげて目だけを出した。鋭い目だった。
「おまえじゃ無理さ。今のおまえの力じゃあたしを倒せはしない。ほっほほほほ」
魔女は、そばの籐の椅子に腰かけた。
「だが、あたしもおまえとは闘いたくない。おまえが本当にロトの血をひく者ならな。愛した男の血をひく者を、あたしの手では殺せない。よかろう。雨雲のつえをおまえに授けよう」
と、アレフの前に雨雲のつえを差し出した。
「え!? ほ、ほんと!?」
アレフは、思わず取ろうとすると、
「ただし！」
ひょいと雨雲のつえを体のうしろに隠した。

「本当におまえがロトの血をひく者であるのならな。ガライが残したという銀の竪琴をガライの墓から持ち出してくるがいい」
「えっ⁉　銀の竪琴を⁉」
「そうだ。銀の竪琴さ。あのガライが、死ぬまで離さなかったというな。無事その銀の竪琴を持ち帰ったら、おまえを真の勇者ロトの血をひく者と認め、雨雲のつえと交換してやろう。どうだえ？」
アレフは、ガライの町はずれにあるあのガライの墓のピラミッドを思い出し、はっとなって胸元の首飾りをにぎりしめた。
ガライは、「呪法の首飾りだ。呪法をかけることも解くこともできる」といってアレフにこの首飾りを授けた。また、ガライの町の占い師は、「封印を解く呪法を知っておるのか」とアレフにたずねた——この首飾りさえあれば！
「よし、約束したぜ！」
アレフは、自信たっぷりに答えた。
「だが、本当に持ってこれるかな？」
魔女は怪しげな笑みを浮かべた。が、このときすでにアレフは魔女の部屋を元気よく飛び出していた。

4　銀の竪琴

二〇数日後——。
北の海の砂丘をはずむような足どりで西にむかっていたアレフは、我慢できずに走り出した。そして、一気に砂丘の頂上に駆けのぼった。
岬の上にガライの町並みが見えた。その岬のむこうに美しい大きな夕日が沈もうとしている。半年ぶりに見るガライの町だった。半年ぶりにあの美しいセシールにも会えるのだ。アレフはガライの町にむかって転がるように砂丘を駆けおりた。
町に入ると、アレフは躊躇せずセシールの家にむかった。ガライの墓に行くには、セシールの家の前を通らなければならない。まず先にセシールに挨拶しようと思ったのだ。だが、食堂の角をいきおいよく曲がって、
「あっ!?」
愕然となった。一瞬、自分の目を疑った。
セシールの家の玄関や窓に無残に板が打ちつけられていたのだ。その板は決して新しいものではない。釘も海風にさらされて錆びている。玄関の扉の下には吹きさらしの土埃がたまっていた。

「セシール！　セシール！」
扉をたたきながらアレフは必死に叫んだ。
だが、返事はなかった。路地を風が吹きぬけていった。アレフはなおも扉をたたいてセシールの名を呼んだ。と、背後から、
「おや、もどってきたのかい？」
と、聞き覚えのあるしわがれた声がした。占い師の老婆だった。ちょうど通りかかったのだ。
「ねえ、セシールはどうしたの!?　おじさんやおばさんは!?」
「主人夫婦は殺されたんじゃ」
「こ、殺されたぁーっ!?」
「竜王の手下の影の騎士にな」
「影の騎士だって!?　じゃあ、セ、セシールは!?」
アレフは思わず占い師の胸倉をつかんだ。
「連れ去られてしまったんじゃよ」
「えーっ!?」
「女神の月じゃった」
占い師はそういって苦しそうにアレフの手を払った。
「やっとこ水もぬるみ、木の芽も吹きだして、みんなが喜こんでおったころじゃ。ところが、妙

に生あたたかい風が吹く晩じゃった。突然、悲鳴がとどろいてな。隣近所の人たちが駆けつけてみたら、おやじさんとおかみさんは、奥の居間で血まみれになって殺されてたんだよ。影の騎士たちにな。そして、セシールはさらわれてしまったんじゃ——」

アレフは、あ然として聞いていた。たしかぼくが影の騎士に襲われたのは不死鳥の月だった。そのあと、セシールも同じ影の騎士にさらわれたなんて、どういうことなんだっ——⁉　なぜ主人夫婦を殺して、セシールを——⁉　アレフの胸の奥からいいようのないはげしい怒りがこみあげてきた。にぎりしめた拳が震えた。と、

「くそーっ！」

いきなり扉に打ちつけてある板を殴り、やり場のない怒りをぶつけた。だが、板は鈍い音を立てただけだった。また、風が吹きぬけて行った。

アレフは肩で大きく溜息をつき唇を噛んでその場に立ち尽くした。と、重い足をひきずるように歩き出した。

「どこへ行くんじゃ⁉」

「ガライの墓だ」

占い師にあたっても仕様がないのはわかっていたが、アレフは怒ったように占い師をにらみつけた。

「ば、ばかっ！　まだそんなことをいっておるのかっ⁉　あれほど近づいちゃいかんというたは

ずじゃ！」
「ガライの銀の竪琴がほしいんだ」
「た、た、竪琴を!?」
占い師の顔から血の気がさっと消えた。
「ばかなことをいうんじゃない！」
「前にばあさん、いったよな。墓の封印を解くには特別な呪法がある。真のロトの血をひく勇者のみが解ける呪法が——ってな。その呪法を授かったんだよ」
「だ、だれに？」
「ガライだ」
「ガ、ガライに!? そ、そんなバカな!? どうして召されたものが!?」
「これだよ」
と、首飾りを見せた。
「これが、封印を解く魔法の首飾りだ」
占い師はあ然としてその首飾りを見ていたが、はっと我にかえると、
「ちょちょちょっとこいっ。いいからくるんじゃ！」
アレフの腕をつかんで、むりやり路地の奥にある地下室の自室に連れて行った。
「どういうことなんじゃ、それは？ ガライの亡霊でも出おったのか!?」

「ばあさんの占いがぴったり的中したんだよ」
「いっ!?」
アレフは、ガライの町を出たあと、ロトの洞窟でガライに会ったことを話した。そのあと勇者ロトが賢者に託したものをさがして旅をつづけていることも。
「しかし、おまえが――!?」
占い師は顔を横に振った。目の前の少年が真の勇者ロトの血をひく者であることが、まだ信じられないのだ。
「占いが、この古地図に隠されていた場所と一致したんだよ」
と、古い地図を出して見せた。
占い師は、その地図のロトの洞窟を示す印を怪訝そうに見ていたが、古地図の右下の隅に書いてある楔形文字に気づくとはっと顔色を変えた。
「こ、この文字はミトラ教徒の――!?」
楔形文字で、〈ミトラ教徒の愛と勇気に感謝をこめて。ロト〉と書いてあるのだが、ミトラ教徒の文字であることはわかっていても占い師には解読できないのだ。
「こ、この地図をどこで手に入れたんじゃ?」
「ぼくが生まれた日に、ガライの近くに住む魔道士が現れて、置いて行ったんだそうだ」
「そ、それじゃ!?」

占い師は目を大きくして驚いた。
「ドムドーラで生まれたんじゃな!?」
「どうしてそんなこと知ってるの?」
「ど、どうしてって——ここよりさらに南の山にわしの遠縁にあたる老魔道士がおったんじゃよ。ゼフィンといってな、一〇年前に死んでしまったが、死ぬ前に一度聞いたことがあるんじゃよ。この地図の話をな」
そういって、占い師は老魔道士ゼフィンに聞いた話をはじめた。

一五年前の冬——ゼフィンの夢のなかにミトラ神が現れて、こう告げたという。
『冬の時代は終わりに近づいている。おまえの役目は春を呼ぶ勇者を助けることにある。この地図は勇者ロトとともに戦ったミトラ教徒の先祖が残したもの。ドムドーラに行き、この地図を町で最も幼い者に託せ』
と——。朝、ゼフィンが目覚めると、ふしぎなことに枕元にその古地図がちゃんと四つ折りにして置いてあったのだそうだ。さっそくゼフィンは、その地図を持ってドムドーラに行き、生まれたばかりの男の子に託して、ガライに帰ったのだという。

「しかし、その子がおまえとはのぉ」

占い師はまぶしそうにアレフを見た。その目には、期待と尊敬がこめられていた。やっとアレフを真の勇者ロトの血をひく者と認めたのだ。
「とにかく、賢者に託したという雨雲のつえを手にいれるには、どうしてもガライの銀の竪琴が必要なんだ。それがなきゃ竜王の島にもわたれないし、竜王も倒せない」
「わかったよ。真の勇者ロトの血をひく者よ、いまのおまえなら封印を解けるかもしれない。また、銀の竪琴を奏でても、魔物を呼び寄せることはなかろう」
占い師の目にはいつの間にか涙が浮んでいた。目の黒いうちにアレフガルドが平和な国にもどることが出来るかもしれない。そう思うと占い師の胸の奥が熱くなってきたのだ。生きていてよかった——と。
「ああ、精霊ルビスよ」
思わず占い師は天を仰いで精霊ルビスに感謝の手を合わせた。
そして一〇数分後——占い師の知らせを聞いた町の長老や有力者たち二〇人あまりの人たちが、血相変えてガライの墓のピラミッドの前に駆けつけてきた。すでに日が落ち、空には星がまばたいていた。
アレフは、ピラミッドの石の扉の前に座り、扉に彫ってあるガライの紋章を見つめると、首飾りを両手でにぎり印を結んだ。
「ガライの墓の封印を解かれんことを——!」

指先に全神経を集中し、精根こめて必死に念じた。占い師や町の人たちは固唾をのんで見守っている。

と、アレフの全身が小刻みに震えたかと思うと、見る見るうちにはげしく震え出した。と、印を結んだ指先から黄金色の光がほとばしり、その光が扉の紋章を直撃し、扉ははげしく光に反応したのだ。そして、その反応が消えると、ギィーと音を立てておもむろに厚い扉があいたのだ。まさに三二〇年振りに。占い師や町の人たちの間から大きなどよめきが起きた。

「やった――!」

アレフは立ちあがろうとした。だが、

「うっ――」

そのままずるっずるっと座りこんでしまった。呪法は瞬時にして体力や精力を消耗させる。精根尽き果てて体に力が入らないのだ。

町の人たちは一様にアレフに熱い視線をむけていた。涙ぐむ者もいた。無理もなかった。やっと待望の真の勇者ロトの血をひく者が目の前に出現したのだから。

「だ、大丈夫か?」

占い師が心配そうにアレフに駆け寄った。

だが、アレフは気力をふりしぼってやっと立ちあがると、たいまつに火をつけて扉のなかに入った。

なかはひんやりと冷たかった。入ったところに広い空間があり、正面に下におりる階段がつづいていた。柱や壁、いたるところに太陽や月や動植物のさまざまな文様が描かれていた。たいまつで足もとを照らしながら階段をおりると、踊り場があり、さらにその先に下へおりる階段があった。そして、その階段をおりたところに、墓室の扉があった。扉を押すと、おもむろに扉があいた。

なかに入ったアレフはたいまつのあかりで墓室を見まわして驚いた。

立派な彫物をほどこした卓台には豪華な銀の燭台があった。棚には書物や各地で集めた美しい壺や皿、鏡の盾、水鏡、珍しい楽器などが並べてある。壁にはアレフガルドの地図が貼ってあり、珍しい弓矢や槍などの武器が飾ってある。使い古された揺り椅子もある。正面には机があり、書きかけのノートと羽ペンがある。この町にあったガライの部屋がそっくりそのまま残されていたのだ。

そして、机の後ろの棚には美しい銀の竪琴がかけてあった。竪琴の胴の先には、妖精の像の彫物や神秘的な緑の宝石がほどこされている。その横に演奏用の爪が置いてある。黄金の爪だ。

「こ、これか――これが銀の竪琴か――」

しばらく見とれていたアレフは、そっと銀の竪琴を手にして、おもむろに弦を爪びいた。

ポローン――。

高く澄んだ哀しい音が暗闇に響いた。

アレフは、その音色を聞きながら、あの美しいセシールのことを思い出した。そして、初めてセシールと会ったとき話してくれた、魔物たちの心を解くために詩を謳いながら旅をつづけたというガライの神話も――。

ポローン――。

アレフはもう一度爪びいた。と、今度は胸の奥から怒りが湧いてきた。セシールをさらった影の騎士への怒りが――。と、そのときだった。ギギィ――と、ぶきみなきしむ音がした。

「うわっ!?」

アレフは驚いて飛びのくと壁を背にして身がまえた。一瞬、魔物を呼び寄せたのかと思ったのだ。だが、揺り椅子を見て、

「あ、あなたは!?」

青白い炎につつまれた半透明のガライの像が揺り椅子に腰かけていた。だが、腰かけているといっても軽く宙に浮いている。椅子のきしむ音は幻聴だったのか、それともガライが送った霊気だったのかもしれない。

「どうするのじゃ、その竪琴を?」

神秘的な澄んだ目でアレフを見つめた。

「はい――」

雨のほこらの魔女のことを話すと、

「なに、あの魔女が？」
さすがにガライも驚き、魔女の真意を計りかねたような顔をした。
「はい。勇者ロトの血をひく者なら、墓の封印を解いてこの竪琴を持ってこれるだろう。真の勇者の血をひく者なら——と」
「そんなことをいったのか。あの魔女が——。あの魔女が、銀の竪琴とな——」
ガライは溜息まじりにつぶやいた。その目に哀れみが浮かんでいた。
「勇者ロトの血をひく者よ」
「はい」
「いずれにせよ、これからはいまにもましてきびしい試練が待ち受けておろう。おまえと関わることによって運命を変える者も、不幸にも命を落とす者も現れよう」
「そ、それは——？」
アレフの脳裏にセシールやセシールの両親のことが浮かんだ。
「だが、おまえは竜王を倒す使命を持って生まれてきたのじゃ。竜王の支配により、アレフガルドの人々はもっと数奇な運命をもてあそばされた。その人々の流した血や涙の重みをしっかりと心にとめておくのじゃ。真の勇者となるためにな」
と、いい残すと、ガライはすーっと姿を消した——。

5　赤い雨

アレフが銀の竪琴（たてごと）を雨のほこらに持ち帰ったのは牛頭神（ケンタウロス）の月の終わる一日前だった。牛頭神の月が終わると、一角獣（ユニコーン）の月に変わりアレフガルド暦（れき）では秋を迎えたことになる。だが、この雨のほこらの一帯を除けば、まだ暑い日がつづいていた。

アレフの差し出した銀の竪琴を見て、さすがの魔女も驚いて一瞬うろたえた。

「ほう、これが銀の竪琴かえ――」

魔女の声は心なしか震（ふる）えていた。顔は青ざめ、額（ひたい）にはうっすら汗がにじんでいる。

まさか持ってくるとは夢にも思わなかったのだ。約束したときは万が一持ってきたら、そのときはいさぎよくわたしてもよい、真の勇者ロトの血をひく者である証明なのだから――そう思っていたのだが、現にこうしてそのときがくると、さすがの魔女もうろたえた。

「みごとなものだねえ――」

そう強がりをいうのが精一杯（せいいっぱい）だった。

「さあ、雨雲のつえをくれよ」

アレフはキッと見つめていった。

「約束だろっ！」

「――」
魔女は肩で溜息をつくと、窓ぎわに行ってじっと流れる霧を見つめた。窓ぎわの崖下からは、はげしく打ち寄せる波の音がたえず聞こえてくる。魔女は、やがて大きく深呼吸すると、くるりと振りむいて、にっこり笑った。やっと決心したのだ。
「真の勇者ロトの血をひく者よ」
と、扇の影からひょいと指先で雨雲のつえを出すと、
「いいかえ、この雨雲のつえは、前にもいったように、あたしに残されたたったひとつの形見。あたしが愛したたったひとりの男、勇者ロトのね。決して無駄にするんじゃないよ。わかってるね」
と、念を押してアレフに手わたした。見た目よりもずっしりと重いつえだった。
「さあ。用がすんだら、とっとと帰っておくれ」
「ありがとう。必ず竜王を倒してみせるよ。必ずね」
「ふっ。血は争えないねえ。まるでそっくり。ロトもそういってあたしのところを去って行ったわ。そして二度ともどってこなかった」
魔女はそういってさびしそうに笑った。
別れをいうとアレフは元気に洞窟をぬけて岩場に出た。
これで太陽の石と雨雲のつえを手に入れた。あと残るは――と、思ったとき竪琴の高い澄んだ

音が聞こえてきて、アレフは思わず立ちどまった。
美しい音色が魔女の部屋から流れてくる。どこかもの哀しい旋律だった。アレフはその旋律を背に歩き出した。
と、突然、音色が切れたかと思うと、魔女の悲鳴が霧のなかに響きわたった。
「⁉」
不吉な予感がした。アレフはあわてて駆けもどって洞窟に飛びこみ、魔女の部屋にむかった。
そして、いきおいよく扉をあけて、
「うわっ⁉」
一瞬立ちすくんでしまった。
魔物たちが鋭い牙や爪を立てて魔女に群がっていた。人喰い熊やラリホーアント、大さそりなど、魔力で巨大凶暴化した怪獣や、腐った死体、殺人鬼など呪いによって人間から変身した魔物たちだった。魔女が竪琴を奏でて、かつてガライが封じた魔物を呼び寄せたのだ。
「くそーっ！」
アレフはすかさず剣をぬいてその群れに突進し、魔物たちに斬りかかった。そして、倒れている魔女の手からすばやく銀の竪琴を奪って掻き鳴らした。と、いきなり魔物たちが脅え出し、つぎつぎに宙に姿を消し、あっという間に退散した。
「大丈夫⁉」

アレフは血まみれの魔女を抱き起こした。魔女は苦しそうにあえぎながら、
「し、心配ない――。こうなることは承知のうえだ。さあ行っておくれ――」
「じゃあ!?」
アレフは驚いた。
「ま、魔物たちを呼び寄せることを知ってて、そ、それでこの竪琴を!?」
魔女はかすかに笑みを浮かべた。
「あ、あたしは――愛したロトのために、な、なにかをしてあげたかったのさ――。ロトも竜王のことで――悔しい思いをしているんじゃないかと――思ってねえ――。だ、だから――ロトの血をひくおまえに――命の精である雨雲のつえをあげた――。ただそれだけ――。そ、それだけのことさ――」
「命の精?」
「そのつえのおかげで――い、いままで生きてこれたのさ――。そ、そのつえがあるから――いつでも雨を――降らすことができる――。あ、雨はあたしの――い、命の源なのさ。――あ、雨さえあれば、な、何千年でも――何万年でも――い、生きることが――できる――。だ、だが、もういい――。こ、これであたしは――あ、安心して――ロ、ロトのところに行ける――。あ、愛する――人のところへ――な。さあ、行っておくれ――」
「で、でも!」

「あ、あたしはもう――し、死ぬ――。年相応の――醜い姿にかえってな――あ、あたしは――気の遠くなるほど生きてきた――。そう――じ、自分でも年が――わ、わからないくらい――な。で、でも、み、醜い姿は――み、見せたくないのさ――だ、だれにも――。お、女――だからね――。さあ、行っておくれ――。あ、あたしは――さ、最後まで――女で――い、いたい――から――」

「わ、わかった――」

アレフは、静かに魔女を床に寝かした。

「さよなら――」

だが、魔女はもう答えなかった。穏やかな顔でほほえんだだけだった。

アレフはあとづさりながら部屋を出て、ちょっとためらった。だが、意を決したように扉をしめた。さよなら――と、心のなかで叫びながら。

と、魔女の全身から怪しげな湯気がゆらゆらと立ちのぼり、見る見るうちに皺とごつごつとした骨だけのミイラになった。と、そのまま風化し、崩れ落ちてさらさらに乾燥した塵埃になってしまった。

アレフは洞窟を出ると、糸のような細い、まっ赤な雨が静かに音もなく降っていた。その雨を見て、アレフは魔女の死んだことを知った。まっ赤な雨は、この世に別れをつげる魔女の涙なのかも知れない――ふとアレフは思った。

アレフは命とひきかえにくれた雨雲のつえをじっと見ると、気をとりなおして力強く歩きはじめ、雨のほこらをあとにした。

このまっ赤な雨は、それから三〇日近くも降りつづけたという。そして、雨があがると、雲の切れ間からまぶしい太陽の光が差し、数百年ぶりにこの地を照らしたという——。

第四章　故郷ドムドーラ

「メルキドの北部からやってきたという僧侶が、生まれたばかりのアレフの手に命の石をにぎらせて立ち去った」――といったマイラの道化師マヌエルの言葉を頼りに、いくつものけわしい岩山を越え、襲いかかる魔物や怪獣を倒し、アレフはただひたすら旧メルキド街道を南下した。

途中故郷ドムドーラに寄ったあと、さらに南下し、南の海に出ると海にそって東へ向かった。

一角獣の月から犬頭神の月に変わり、季節は、晩秋を迎えようとしていた。一雨ごとに寒さを増し、朝晩めっきり冷えこむようになっていた。

そして、入江の崩れかけた石橋をわたり、メルキドの丘陵地帯に入った。雨のほこらを発ってからすでに六〇日になろうとしていた――。

1　風の町

空はどんよりと曇り、どこまで行っても岩肌がむき出しの荒涼とした丘陵地帯がつづいてい

る。この丘陵地帯の行き着いた先にメルキドの町があるのだ。そして、そこで北アレフガルドからつづいた長い旧メルキド街道もやっと終わる。はるかかなたにはこの丘陵地帯をぐるりと取りかこむようにけわしい岩山のメルキド高原が連なっていた。
だが、アレフの脳裏から風の音と町の惨状が焼きついてはなれなかった。アレフが生まれたあのドムドーラの町のことが――。

二〇日ほど前のことだ。砂漠のなかにドムドーラの城壁を見つけたアレフは、疲れた足のことも忘れて思わず駆け出した。
だが、息せききって崩れ落ちた城門をくぐりぬけて、愕然となった。はじめて見る故郷ドムドーラの、想像以上の荒れ果てた姿に声も出なかった。
埃と瓦礫で埋まった石畳を砂塵を巻きあげながら風が吹きぬけて行く。壊れたまま吹きさらしになっている店の看板や扉や窓。無残に崩れ落ちた屋根。黒ずんだ家の石壁は焼け焦げたあとなのだろう。聞こえてくるのは、風の音ばかりだった。
もともとこのドムドーラはメルキド城の西の要塞の町であったという。その後、北の山脈の河川から砂金が発見されると、一獲千金を夢見る者や仕事を求める人夫たちがぞくぞくとこの山脈に集まってきたのだ。採取された砂金がドムドーラの町に集められて貴金属に姿を変え、商人たちの手によってアレフガルド中に運ばれていったのだ。こうして、ドムドーラは、かつてない繁

栄を迎えた。
このドムドーラを守っていたのが、豊富な資金をもとに組織された勇敢な戦士集団であった。高額の報酬を条件にアレフガルド中から集められた腕に自信のある者たちが、きびしい訓練で戦士として鍛えられたあと、町に二〇〇とも三〇〇ともあったといわれる採取場に配置され、ならず者や盗賊団、さらには南の山脈にすむ魔物や蛮族の襲撃に備えていたのだ。
ところが、一三四八年の天変地異で、山肌を崩れ落ちたすさまじい土砂が、採取場で働いていた多数の人夫や警備中の戦士たちを一瞬にしてのみこんでしまったのだ。さらに、緑豊かだったドムドーラ平野も、荒涼とした砂漠に姿を変えてしまった。
そのあと、ドムドーラも例外なく竜王の手下の魔物や怪獣に襲われた。だが、生き残った勇敢な戦士集団の働きで、やっと町だけは守ることができたのだ。それ以来ドムドーラの町からはかつての活気が消え、町は衰退し、三万を数えた人口は一〇分の一までに減少したという。
そして十五年前――悪魔の騎士率いるドラゴン軍団の強襲により、一夜にして長い歴史に終止符を打たれてしまったのだ。
いまにも泣き出しそうな顔でアレフは吹きぬける風のなかに茫然と立ちつくしていた。
これがぼくの生まれた町か――！　ここがぼくの故郷か――！
そう思うと、アレフの頬をすーっと涙が流れ落ちた。
竜王の手下にさえ襲われなければ、いまごろ本当の両親とこのドムドーラで暮らしていたのか

もしれない――！　この通りにも、目の前の家にも、角の店にも、路地にも、窓のひとつひとつに人々の生活があったのだ。くそっ、竜王めっ――！　きっと唇を嚙みしめると、アレフは町の中央にある広場にむかって歩き出した。

と、突然、うしろからメタルスライムが襲いかかってきた。だが、アレフはすばやく身をかわすと、一刀のもとに斬り捨てた。

と、今度は廃屋の扉の陰と屋根の上から同時に二匹襲いかかってきた。アレフはすかさず一匹を斬り捨て、かえす剣でもう一匹も斬り捨てた。

倒れたメタルスライムたちは銀白色の液体を噴き出しながら、どろどろに溶けて石畳に消えた。

メタルスライムはスライムよりやや高度な魔物で、防衛本能にすぐれていてすばやく身を殻にして守ることができるが、いまのアレフにはもはや敵ではないのだ。だがそれでも思わず手に力が入った。我がもの顔で棲んでいる魔物たちに怒りがこみあげてきたからだ。

と、路地からまた一匹飛び出してきたが、アレフがにらみつけると、あわてて出てきた路地に逃げこんだ。

町の広場には、広場に面した崩れかけた教会の尖塔よりも高い、巨大な樫の木がそびえていた。地面に張り出した巨大な根や太い幹の半分近くは黒ずんで枯れている。町が燃やされたとき、おそらく焼け焦げたのだろう。だが、焼け残った幹は立派な枝をはり、その枝には葉が繁ってい

た。
アレフは、この巨大な樫の木に見とれながら、この木の偉大な生命力に感動していた。町の様相があまりにもひどいだけに、なにか救われたような気持ちだった。
「そうだ、ぼくの生まれた家は——!?」
アレフは、はっと我れにかえって町を見まわした。広場のそばだとマヌエルがいっていたからだ。だが、広場からは、路地とも通りともつかない道がいくつも枝別れしていた。
と、ひときわ強い風が吹きぬけていった。そのときだった。アレフは背中に殺気を感じてすばやく振りむくと、アレフの倍はありそうな甲冑の魔物がいきなり襲いかかってきた。
「うわっ！」
アレフは身をかわして斬りかかった。だが、魔物もすばやく身をかわした。魔物は見かけによらず身軽ですばしこかった。
魔物はヨロイの騎士だった。もともとは竜王との戦いで戦場の露と消えたアレフガルドの騎士だが、死者の魂とひきかえに竜王の魔力によって命を与えられた魔物なのだ。戦場のあとや死者の霊に呪われた地をわけもなくさまよい、人間を見ると見境いなく襲いかかるのだ。
アレフはなおも斬りかかった。と、ヨロイの騎士は宙を跳んで身をかわすとすばやくアレフの剣をたたき落としたのだ。アレフがあわてて拾おうとすると、ヨロイの騎士が一瞬はやく剣を踏みつけて、いきなり鉄の手でアレフの首を絞めた。

「うっ！」
アレフの首に鉄の手が食いこみ、見る見るうちに顔がまっ赤になって、息ができなくなった。
だが、アレフはすかさず首飾りをつかんで呪法をかけていた。
と、首飾りをにぎりしめた拳が光につつまれたかと思うと、いきなりヨロイの騎士の全身に稲光のような鋭い光が走り、ヨロイの騎士は全身をはげしく震わせたまま動かなくなった。呪法がきいたのだ。アレフは苦しそうにのどもとを押さえながら剣を拾うと、大きく深呼吸していきおいよく宙に跳び、
「たーっ！」
ヨロイの騎士の首を目がけてありったけの力で振りおろした。
ガキーン――！　金属音が響いて、いきおいよくヨロイの騎士の首が宙にはねた。ヨロイの騎士は数歩よろけると、ガラガラガラ――と、音を立てながらばらばらに崩れ落ちた。ヨロイのなかは空洞だった。と、ばらばらになったヨロイの騎士は、吹きぬけた風に飛ばされて行った。
静寂がもどった。聞こえてくるのは風の音だけだった。とにかく、予定通りメルキドへ向かおう。命の石を置いて立ち去った僧侶をさがし出せば、ドムドーラのことも生まれた家もきっとわかるはずだ――アレフは気を取りなおして城門へむかったのだった。

秋の日の落ちるのは早い。アレフは足を速めた。野宿に適した地形をさがすためだ。だが、目

の前の丘をのぼりきって、
「あっ！」
アレフは思わず目を輝かせた。目の前に平地が広がっていて、そのはるかむこうのなだらかな丘に三方を森にかこまれた城壁が見えたのだ。メルキドの町だった。アレフは町にむかって元気に走り出した。
ところが、城門の七、八〇歩手前に、崩れかけた巨大な大男の石像が立っていた。アレフは思わず立ちどまって見あげた。石像はアレフの十倍、いや二〇倍はありそうだ。アレフは崩れかけたその石像のヒザまでもなかった。
その石像の前を通って城門へむかおうとしたとき、アレフは頭上に視線を感じてふたたび見あげた。なんと、さっきまで閉じていた石像の眼がじっとアレフを見おろしていたのだ。ぞっと背筋が凍るようなおそろしい眼だった。と、
「ガオオオオッ！」
眼を光らせながら雄叫びをあげると、いきなり石像の全身にひび割れが走り、腕や胸、肩などの筋肉が隆起し、バラバラバラバラバラッ――と全身に積もっていた土埃が落ちた。石像が正体を現したのだ。
「うわぁっ!?」
アレフは驚きおののいて思わず数歩さがった。

このメルキドの城門の前だけに出没する巨大な石の化物ゴーレムだった。と、いきなりゴーレムは巨大な足でアレフを踏みつぶそうとした。

「うわっ！」

あわてて身をかわしたアレフは、ゴーレムの股の下をくぐって城門へむかって駆け出そうとした。だが、アレフの五、六歩がゴーレムの一歩なのだ。また、ゴーレムの巨大な足が地響きを立てて行く手をさえぎった。と、すさまじい唸りをあげて巨大な手の平が襲いかかった。アレフをつかもうとしたのだ。アレフは間一髪宙に跳んで逃げると、体勢を変えて巨大な足に斬りかかった。だが、剣はあっけなくはじき返された。

「く、くそっ！」

アレフは首飾りをにぎりしめて呪法をかけた。まともに戦っては勝負にならないからだ。アレフの拳から発した炎の光がゴーレムを直撃し、ゴーレムの全身に鋭い稲光が走った。だが、呪法はきかず、ゴーレムがまた襲いかかってきた。アレフはすばやく逃げると、一歩踏みこんで、

「たーっ！」

首飾りをにぎりしめていた手をゴーレムの心臓めがけて突き出した。と、五本の指からすさまじい光線が発して、ゴーレムの心臓を直撃した。別の呪法をかけたのだ。だが、つぎの瞬間、

「うっ！」

アレフの全身にはげしい衝撃が走った。呪法がきかず、一瞬のすきをつかれてつかまったの

だ。ゴーレムは顔の前までアレフを持ちあげてぎゅっとにぎりつぶそうとした。
「うわあああっ！」
鈍い音を立てて骨がきしんだ。
そのときだった。アレフは突然マヌエルの話を思い出したのだ。かつてマイラの村を襲った巨大化した魔物や怪獣たちが、妖精(ようせい)の笛(ふえ)の音を聞いたとたんに脅(おび)えて逃げ、人間の形をした巨大な石の化物がその場に眠ってしまったという話を――。
「こ、こ、この野郎ーっ！」
アレフはゴーレムの右眼をねらってありったけの力で剣を突き刺した。剣は鍔(つば)のところまで突き刺さった。と、
「ガオオオーーーッ！」
ゴーレムがすさまじい叫び声をとどろかせてのけぞり、その手からこぼれ落ちたアレフは悲鳴(ひめい)をあげながら落下し、背中から地面に落ちた。全身にはげしい衝撃が走り、一瞬(いっしゅん)息がつけないほど苦しかった。だが、アレフは革袋からマヌエルにもらった妖精の笛をすばやく取り出して、笛に唇(くちびる)をあてた。高い澄んだ音があたり一帯に流れた。
と、襲いかかろうとしていたゴーレムがはっとなって、すさまじい形相(ぎょうそう)のまま攻撃(こうげき)の手をとめた。やがてその形相から怒りが消え、仁王(におう)立ちになったまま動かなくなった。眠ってしまったのだ。

アレフは笛を吹く手をとめて、あ然としてゴーレムを見あげた。が、はっと我にかえるとおそるおそるゴーレムの横をすりぬけ、脱兎のごとく城門にむかって走り出した。
城門の見張り台の兵士たちはあ然としてアレフとゴーレムを見ていた。

2 メルキド

かつてアレフガルド最大の商業都市として栄えたメルキドの町は、内外二重の強固な城壁に守られていた。二重の城壁があるのは、それよりもはるか昔、この地に城が築かれていたからだ。見張り台のある城壁の城門をぬけると、正面の小高い丘の城壁の中門まで石畳の道がまっすぐのびていた。歩数にして三、四〇〇歩ほどの距離だ。そして城壁と城壁の間には収穫の終えたばかりの畑や果樹園が広がっていた。おそらく丘の上の城壁をこの畑や果樹園がぐるりと取りかこんでいるのだろう。
石畳を進み、小高い丘の城壁の階段をのぼって中門をくぐると町だった。正面には大理石の立派な神殿があり、その神殿を中心に通りが東西南北にのびていた。町はラダトームよりひとまわり大きいが、人通りはラダトーム同様少なかった。
神殿の南にある宿についたときには日はすでに落ちていた。アレフは前金で宿賃を払うと、ロビーのとなりの食堂で食事ができるかどうか主人にたずねた。

この町で一番大きくて由緒(ゆいしょ)ある宿だが、広いロビーや食堂は閑散(かんさん)としていて、かつての栄華(えいが)の名残をとどめる豪華(ごうか)なシャンデリアも壊れたまま放置されている。めったに客がないからだ。メニューも昔使っていた古いもので、料理のほとんどが線で消されていたが、それでもラダトームの食堂よりは種類が多かった。おそらく城壁のなかに畑があるから他の町にくらべていくらか食料は豊富なのだろう。

アレフはメルキド名物だというあったかいきのこのスープと黒地鶏のガーリック蒸(む)しの料理を注文した。小麦粉を練って薄くのばして焼いたパンがそえられていた。ガライで食べたものとまったく同じパンだった。アレフはまた美しいあのセシールの笑顔を思い出した。

旅の途中、ことあるたびにアレフはセシールのことを思い出した。そのたびに、なぜ影の騎士がセシールの両親を殺し、セシールだけを連れ去ったのだろうか――？　と、疑問を抱いた。そして、セシールはきっとどこかで生きているに違いない――と、自分にいい聞かせた。アレフガルド北東部の山岳(さんがく)地帯で襲ってきたように、いずれ影の騎士が自分の前に立ちはだかってくるはずだ。そのときこそはっ――！　そう思って、セシールのことを思い出すたびに、影の騎士への怒りを燃やしてきたのだ。

アレフが料理にむしゃぶりついたときだった。若い兵士がやってきて、町の長老(ちょうろう)の使いの者だと名のった。

「長老がぜひお話ししたいと申しております。ゴーレムのことで」

「ゴーレム？」
「はい。城門の前であなたが眠らせたあの大男の化物のことです」
城門の見張り台の兵士から長老の耳に届いたことが容易に察せられた。
「いいよ」
あとで長老に会ってドムドーラのことを聞こうと思っていたので、アレフは喜んで返事をした。
今年一二〇歳になるという白髪痩身の長老は、神殿の奥にある大きな室内庭園の池の噴水のそばでアレフを待っていた。
何本もの巨大で美しい大理石の柱が庭園の屋根を支えていた。ほどよく配置された女神や勇士などの彫像物が美しい庭園に調和し、よく手入れされた芝生や植えこみの緑が、庭園を照らしているたいまつのあかりに美しく映えていた。
「ほう。おまえさんか――」
長老はおだやかな目でアレフをじっと見つめた。
「ところで――妖精の笛をどこで手に入れたのかな？」
「マイラの村で元道化師にもらったけど。これがなにか？」
アレフは革袋から妖精の笛を出した。
「ほう、これが妖精の笛か――」

長老は手にとって浅黄色の美しい笛を見ると、
「メルキドに残っている伝承によれば、この妖精の笛は妖精の一族がゴーレムを生み出した魔道士に与えたものだそうじゃ――」
そういって長老はゴーレムの話をはじめた。

一三四八年――竜王討伐のため、メルキドの太守ポルポト侯は配下の騎士団のほとんどをひき連れて出陣した。強固な城壁と残留騎士団で町を守る自信があったからだ。
かつてこの南アレフガルドを治め、この丘の上に城を築いたポルポト侯の先祖は、「いずれまたこの地は外敵により襲われるでしょう」という予言者の言葉を信じて、この世に類を見ない強固な二重の城壁を築いたといわれている。さらにその後、何代にもわたって補強に補強を重ねてきたから、ポルポト侯もこの城壁には絶対の自信があったのだ。
だが、竜王の六魔将のひとりである大魔道士が巨体と怪力を誇るストーンマン部隊を率いてこの町を襲い、迎撃した残留騎士団を全滅し、強固な城壁を破壊しはじめたのだ。
ストーンマンは、かつて権力者などの墓に副葬品として埋葬された石人形や石像が、竜王の強力な魔力によって命を吹きこまれ巨大化した魔物だ。
だが、このストーンマン部隊に立ちむかったのが、偉大な善の魔道士が産み出したといわれている伝説の巨人ゴーレムだった。ゴーレムはたった一体で無数のストーンマンとわたり合い、三

日三晩つづいたはげしい戦いのすえ、ついにストーンマン部隊を全滅させたのだ。
そして、竜王の逆鱗にふれた大魔道士は、名誉回復のためにゴーレムに呪法をかけてこの町を破壊することをたくらみ、異界から鬼面道士を呼んだのだ。だが、大魔道士の思惑ははずれた。鬼面道士に呪法をかけられたゴーレムは混乱し、なぜか城門の前に立ちはだかって、城門に接近するものを無差別に攻撃しはじめたのだ。
この結果、町の人々は城門から外にでることができなくなり、大魔道士もまた攻撃をあきらめざるをえなくなってしまったのだ。

「おまえさんがはじめてなんじゃよ。それ以来この城門をくぐったのは——」
「じゃあ、いままでやってきた旅人たちはどうやってこの町に——？」
「西にある深い森をぬけてやってくるんじゃよ。魔物や怪獣がたくさん棲んでるが、ゴーレムを相手にするよりはいいからな」
そういって長老が笑いながら妖精の笛をアレフにかえすと、
「だが、普通の人間がその妖精の笛を吹いてもゴーレムを眠らせることはできないといわれておる。それを持つにふさわしい者でなければな」
と、じっとアレフを見つめた。
「一体おまえさんは何者なのじゃ？　なぜ、そんなに若いのにひとりで旅をしておる？」

「じつは、ぼくは勇者ロトの血をひく者なんです」
「な、なにっ!?」
さすがの長老も顔色を変えて驚いた。
「ゆ、勇者ロトの――!?」
「はい。竜王の島にわたる手がかりを求めて旅してるんです」
アレフは、いままでのいきさつをかいつまんで話すと、勇者ロトが三人の賢者に託したもののうち二つを手に入れたことをつけ加えて、革袋から雨雲のつえと太陽の石を出して見せた。
アレフの話を聞いているうちに長老の顔は見る見るうちに上気してきた。
「そうか――」
長老は興奮に震えそうになるのをがまんしながら、熱い視線でアレフを見つめた。
「勇者ロトの血をひく者か――。おおっ、そうじゃ。その賢者に託したひとつかどうかわからんが、たしかユキノフがいっておった」
「ユキノフ?」
「わしの友人じゃ。ドムドーラの出身で十三年前に死んでしまったがな。ユキノフが子供のころ、ドムドーラの町にロトのヨロイが伝わっておる、といううわさ話を聞いたことがあるとな」
「ロトのヨロイ!?」
「そうじゃ。勇者ロトが魔王を倒したときに身につけておったロトのヨロイじゃ」

「ドムドーラのどこにあるんですか？」
アレフは詰め寄った。
「さあ――」
長老は無念そうに首を横に振った。
「他になにか知りませんか!?　手がかりになるんなら、なんだっていいんです！」
「とにかく、東通りのカゼノフの道具屋へ行くがいい。ユキノフの孫じゃ。なにか聞いて知っておるかもしれんからな」
「ほんとですか!?」
アレフは革袋に太陽の石と雨雲のつえを入れ、妖精の笛も入れようとして、
「そうだ、これ――」
と、長老に差し出した。
「長老ならこれ使えるでしょう？　これで町の人や旅の人を守ってください」
「し、しかし、これは――」
だが、アレフは笛を長老に押しつけていきおいよく出口にむかって駆け出していた。
長老は熱い視線でアレフを見送ると、
「ユキノフよ――」
と、熱い思いで友人の名を呼んだ。

「やっときたぞ。やっとな——」
長老の友人ユキノフは、普通の人間として一生を終えた。だが、アレフガルドを思う気持ちはだれにも負けなかった。そして、勇者ロトの伝説が蘇る日を夢見ながら死んでいったのだ。
「勇者ロトの伝説が蘇るときがな。勇者ロトの血をひく者によってな。勇者ロトの——」
いつの間にか、長老の目から涙が流れていた。長老もまたユキノフ以上に勇者ロトの伝説の蘇る日を夢に見ていたのだ。
神殿を飛び出したアレフは、東通りへむかった。道具屋はすぐ見つかった。「閉店」の木札が扉にかかっていたが、あかりがついていたのでアレフは扉を押した。間口はせまかったが奥行きの深い店だった。
「ロトのヨロイ?」
カウンターのなかであとかたづけをしていた五〇半ばのユキノフの孫のカゼノフが、怪訝な顔でアレフを見た。
「ええ、長老から聞いたんです。ドムドーラの町に伝わってるってユキノフさんがいっていたって」
「死んだじいさんが?」
カゼノフは少し考えて、
「聞いたこともねえなあ」

「じゃあなんでもいいからドムドーラのことについて教えてください。なんか聞いたことがあるでしょう？　おじいさんから」
「ヨロイのことは聞いたことはねえが、樫(かし)の木のことなら、子供のころから耳にたこができるぐらいよく聞かされたなあ」
「樫の木!?」
「ドムドーラの町の広場に大きな樫の木があったんだそうだ」
「いまでもあります」
「そうか。竜王の手下に襲(おそ)われたとき、てっきり燃えてしまったのかと思っていたよ。その根っこが教会の路地の階段の下に張り出してるんだそうだ。こーんな根っこがな」
と、背伸びして両手を大きく広げた。
「じいさんが子供のころ、その木の根っこで遊んでいると、よく親や町の人たちに叱(しか)られたもんだってさ。木の根っこに近づくんじゃない！　神隠(かみかく)しにあうぞっ！　ってな」
「神隠し!?」
「まあ、よくある迷信さ。なんでも昔からそういわれてたらしいんだよな。じいさん、死ぬまでそのことばっかりいってたなあ」
と、ユキノフのことを思い出してカゼノフは懐かしそうな顔をした。
「でも、なんでそんなことを聞くんだ？」

「実はぼくもドムドーラで生まれたんです」

「な、なんだって!?」

カゼノフは思わずアレフを見た。だが、

「はっはははは」

いきなり腹をかかえて笑い出した。

「ばかなことをいうんじゃない。今いくつなんだ？」

「十五です」

「だろ!? あのさ、十五年前、ドムドーラの町は竜王の手下に襲われてみな殺しにされたんだよ。女子供、赤ん坊までな。だから、ドムドーラ出身で生き残った者は、そのときドムドーラを留守にしていたか、よその町で暮らしていた者しかいないんだよ」

「で、でも本当なんです。ぼくが生まれた日の夜に襲われたんです」

「生まれた日に？」

カゼノフは、はっとなった。

「ほんとに襲われた日に生まれたのか？」

じっとアレフを見た。

「それがどうかしたんですか？」

「いや、ちょうど襲われた日に生まれた赤ん坊の話を聞いたことがあるんだよ」

「えーっ⁉　ど、どんな話ですか⁉」
「ちょうど十五年前のことだ。薄汚れた不精髭の僧侶が閉店まぎわに薬草買いにきたんだよ。ドムドーラからの帰りだといってな」
「僧侶が⁉」
「ドムドーラが襲われる日にドムドーラに行ったんだそうだ」
「えっ⁉　そ、その僧侶はどこに住んでるんですか⁉」
カゼノフは首を横に振った。
「なにしろ初めての客だったからなあ。あのときのことはよく覚えてんだ。ドムドーラが襲われたあとだし、その僧侶が帰る途中魔物に襲われたらしくてな、体中キズだらけだったからな。おれは、なぜドムドーラに行ってきたのか聞いてみたんだよ。一応、ドムドーラって聞きゃあ気になるからな」
「そしたら──⁉」
「そしたらな──」
カゼノフはカウンターに身を乗り出して話はじめた。
「ある晩のこと、その僧侶の住んでる洞窟に美しい妖精の少女が訪ねてきたんだそうだ」
「妖精⁉」
妖精の一族は人間嫌いでめったに人の前に姿を見せることがなく、深山幽谷に住む賢者やなに

かの拍子に妖精の里に迷いこんだ旅人だけがその姿に接することがあるといわれている。

「その美しい妖精の少女が、青く輝く小さな石を僧侶にわたしてこう告げたんだそうだ。『西にあるドムドーラの町に行くのです。そして、町で一番罪の薄き者にその命の石をわたしなさい』ってな。あんまり突然なんでその僧侶はあ然としたんだそうだ。そして、はっと我にかえったとき、すでに妖精は消えていたんだってさ。だが、いま起ったことが夢でも幻でもない証拠に、僧侶の手には青い石がしっかりとにぎられていたんだ。僧侶はその夜のうちに旅支度を整えると、夜があけるのを待ってドムドーラにむかったんだ。僧侶は妖精のいった言葉の意味を考えながらな。そして、ドムドーラに到着すると生まれたばかりの赤ん坊をさがして、その赤ん坊の手に命の石をにぎらせて帰ってきたんだそうだ。人はみな多かれ少なかれ罪を犯すもの。もし町のなかで一番罪薄き者を選ぶとすれば、それは生まれたての赤ん坊の他にあるまい——僧侶はそう考えてな——」

「ねえ、その赤ん坊の家はドムドーラのどこだったの!?」

「さあな。そこまでは——」

「じゃあ、その家の名前は?」

「すまんな——」

カゼノフは申しわけなさそうに笑った。

3　再会

生まれた家のことについては、ついにわからなかった。だが、命の石を持って行った僧侶をさがすのは大変だし、そんな時間もない。とにかく明日はドムドーラに向かおう。そして、ロトのヨロイをさがそう。賢者に託したものをさがすのが先決だ——道具屋を出たアレフは、気を取りなおして宿へむかった。

通りはひっそりとして人影もなかった。アレフの歩く足音だけが石畳に響いた。空には雲の合間から上弦の月が出ている。今夜もまた冷えこみそうだ。足もとを風が吹きぬけて行った。

と、突然、頭上に何者かの気配を感じてはっと見あげると、太った蛇のような胴体に禿げ鷹の頭と翼を持った怪鳥の編隊がすぐ目の前に迫っていた。キメラの飛行部隊が急降下しながら襲いかかってきたのだ。キメラは人間より小柄だが、鋭い嘴を持っている。

「うわっ！」

アレフはすばやく横に跳びながら剣をぬいて斬りかかった。だが、剣は空を斬り、キメラの鋭い嘴がつぎつぎにアレフの体をかすめて行った。と、すかさず別の編隊が急降下して襲いかかってきた。キメラより強力でひとまわり大きいメイジキメラの部隊だった。

キメラの編隊は二〇匹、メイジキメラの編隊は一〇匹ほどだ。この二つの編隊が息もつかせず

代わる代わる急降下して襲いかかってきた。さらに、編隊からはなれて戦況を見つめている一匹のキメラがいた。キメラやメイジキメラよりも巨大で、アレフよりもひとまわり大きいキメラだ。この部隊を指揮する六魔将のひとりスターキメラだった。

この飛行部隊は、地上からの侵攻がむずかしい城塞都市に対して空中からの攻撃のために編成された。そして、キメラのなかで特に能力の高かった雌のスターキメラが竜王のはからいで六魔将のひとりとして指揮をとることになったのだ。竜王を幼少のころから世話してくれたのが、スターキメラの祖母だった。そして、竜王とスターキメラは兄妹のように育てられたのだ。だが、ラダトームでのはげしい攻防でスターキメラはその兵力をほとんど失い、いまでは竜王直属の偵察部隊となっていた。

アレフは攻撃をかわしながら必死に逃げ、すばやくキメラの編隊が追った。が、すかさずメイジキメラの編隊が前から襲いかかり、アレフは思わず目の前の路地に逃げこんだ。そして、路地から裏通りに出たところで城壁に追いつめられてしまった。城壁の高さはアレフの背丈の倍はあった。

と、アレフの前に飛来してきたスターキメラは、大きな鋭い目でにらみつけて意外そうな顔をした。

「なんだ、まだ子供かっ!?」

スターキメラが鼻で笑うと、

「さあ、妖精の笛をわたすのだっ！」
「ふん、冗談じゃねえっ！」
アレフは剣をにぎりなおした。
「どうしてもわたせぬというなら、命をいただくまで──！」
やれっ！──スターキメラが合図すると、いっせいに襲いかかった。
配下のものから巨人ゴーレムが妖精の笛で眠らされたという報告を受けて、さすがのスターキメラも驚いた。かつて、ゴーレムを眠らせた者はいない。それだけの能力を持つ者なら、鬼面道士がかけた呪法を解くことができるかもしれない。もしゴーレムの呪法が解けてもとのゴーレムにもどってしまったら──と、不安になったのだ。それであわててメルキドに飛んできたのだ。
アレフは必死に攻撃をかわしながら斬りかかった。だが、鍛えぬかれた飛行部隊は敏速だった。キメラ四匹とメイジキメラ二匹が混合編隊を組み、五隊に別れてつぎつぎにすさまじい速度で襲いかかった。
アレフはすばやく壁にもたれ、首飾りをつかんで呪法をかけた。壁を背にすれば、うしろから攻撃を受ける心配がないからだ。と、印を結んだ指先から鋭い光線が走り、空中で稲光のように炸裂して、襲いかかった編隊を直撃した。とたんに雷に打たれたようにキメラ四匹とメイジキメラ二匹が宙に浮いたまま動かなくなった。
「たーっ！」

アレフはすかさず大きく宙に跳んで、つぎつぎに斬り落とした。
黄色い血しぶきがいきおいよく飛び散り、石畳に落ちたキメラたちは瞬時にしてどろどろの腐乱体に変化し、やがて溶けて消えた。
「うぬぬぬっ！」
さすがのスターキメラも顔色が変わった。
「子供ひとり相手になんたる醜態！」
手下の攻撃に業を煮やしたスターキメラは、急降下しながらアレフ目がけてすさまじいまっ赤な炎を吐いた。
「うわっ！」
アレフはかろうじて跳んでかわした。と、着地したところをまた炎が襲ってきた。アレフはすばやくかわすと、宙に跳んでスターキメラ目がけて剣を振りおろし、翼を斬り裂いた。だが、
「ふっふふふ」
スターキメラがぶきみな笑い声をあげながら眼を赤く光らせると、全身から赤い光を発した。と、なんと斬り裂かれた翼が元通りにぴったりとくっついたのだ。一瞬にして呪法でキズを回復させたのだ。
「あーっ!?」
アレフはあ然とした。

と、スターキメラは両翼で大きく扇ぐと、すさまじい突風の龍巻が起こり、一瞬にしてアレフをのみこんだ。
「うわあ〜〜っ！」
アレフはまるで独楽のようにはげしく回転しながら空中まで飛ばされたかと思うと、いきおいよく落下して背中から地面にたたきつけられた。すさまじい衝撃が全身に走った。と、またスターキメラが炎を吐いた。
「うわあ！」
もろに炎をあびたアレフは七、八歩うしろの城壁まで吹っ飛び、背中を強く打って一瞬気を失った。
「ふっふ。とどめだーっ！」
すかさずスターキメラが低空飛行しながらアレフを襲った。はっと気がつくと、スターキメラの鋭い嘴がすさまじい速度で目の前に迫っていた。アレフはあわてて逃げた。だが、嘴は鋭く右腕に突き刺さった。
「うっ！」
激痛と衝撃にアレフの手から剣が落ちた。右腕のヨロイが破れ大量の血が噴き出してる。と、スターキメラはまた炎をあびせながらアレフにすさまじい速度で襲いかかった。思わずアレフは首飾りをにぎって呪法をかけた。そのときだった。

「うっ！」
うめき声をあげたのはスターキメラだった。スターキメラの嘴がアレフの顔面の手前拳ひとつほどのところでとまった。と、宙に浮いたままスターキメラのおそろしい顔がさらに大きく歪んだ。あけた口の奥に鉄のやじりの先が突き出しているのが見えた。アレフは一瞬なにが起きたのか理解できなかった。と、スターキメラが、
「うわあああっ！」
すさまじい悲鳴をあげながら全身をはげしく痙攣させてアレフの上に崩れ落ちた。
「ひえっ！」
あわててアレフはスターキメラを払いのけると、アレフの横にスターキメラがうつぶせに倒れた。首に一本の矢が突き刺さっていて、黄色い血がどくどくといきおいよく流れ出ていた。と、見る見るうちにスターキメラがどろどろの腐乱体になっていきなり爆発した。そのあとに焼けこげの黒い骨格と矢が残っていた。驚いた飛行部隊はあわてて北の空に逃げ去って行った。
アレフは、ほっとして矢の飛んできた方向を見た。上弦の月を背にして背の高い男が立っていた。手には引き金装置のついた弓を持っている。背中には長い剣を背負っていた。長い髪が風になびいた。
「あっ!?」
思わずアレフは声をあげた。見覚えのあるなつかしい姿だった。冬の砂漠で大さそりから救っ

てくれたあの旅の若者だった――。

4　竜王

「なにっ!?　スターキメラがっ!?」
　さすがの竜王も思わず玉座から立ちあがった。幼いころから兄妹同様に育てられたスターキメラが死んだのだ。驚くのも無理はなかった。
「はっ。昨日のことでございます」
　代表して大魔道のザルトータンが答えた。その横に影の騎士、悪魔の騎士、死神の騎士の三人の魔将がひれふしている。
「ゼィゼィ――ゼィゼィ――」
　ぶきみにのどを鳴らしながら、竜王はおそろしい眼でザルトータンをにらみつけた。
「相手はだれだっ!?」
「はっ。巨人ゴーレムを眠らせた者でございます」
「なにっ、ゴーレムをっ!?」
「はっ」
　だが、スターキメラの死を聞いて驚いたのは竜王だけではなかった。最初にスターキメラの配

下の者に報告を受けたザルトータンは一瞬自分の耳を疑ったほどだ。ザルトータンに呼ばれてそのことを聞かされた他の三人の魔将も顔色を変えて驚いた。特に影の騎士と悪魔の騎士の動揺がはげしかった。

「あやつめ、やはり生きておったか——」

にぎりしめた拳を震わせながら、影の騎士は心のなかで舌打ちした。

「いかがなさる、陛下には？」

ザルトータンは影の騎士と悪魔の騎士にたずねた。

影の騎士も悪魔の騎士も、アレフが真のロトの血をひく者かどうかいまだに半信半疑なのだ。だが、その真偽はともかく、六魔将のひとりが殺られたとあっては、もはやロトの血をひく者のことを竜王に隠しだてしておくことはできないのだ。

「六魔将のひとりとはいえ、スターキメラ殿と陛下のご関係は——」

「わかっておるっ！」

影の騎士は思わず怒鳴った。

「ならば、もはやこれ以上——」

隠しだてはできぬ——とばかりにザルトータンは首を横に振った。ザルトータンの言葉に死神の騎士は黙ってうなずいた。影の騎士と悪魔の騎士も、長い沈黙のあと溜息をついてうなずくしかなかったのだ。そして、竜王に報告するためこの謁見の間にやってきたのだ。

「何者なのだ⁉　そやつは⁉」
「はっ」
ザルトータンはじっと竜王を見つめておもむろに答えた。
「ロトの血をひく者ではないかと思われますが――」
「なにっ⁉　ロトのっ⁉」
さすがの竜王も顔色を変えた。
ザルトータンは、ちらりと影の騎士と悪魔の騎士の反応をうかがった。二人は唇を嚙んで大理石の床に目を落としている。
「十五になる少年でございます」
「十五――⁉　十五だとっ⁉」
「はっ」
「では、ロトの血をひく者が生きておったというのかっ⁉」
「しかし、真にロトの血をひく者であるかどうか確証がありませぬ。だが――その者がこの島にわたったとき、おのずとその答えは出ましょう」
影の騎士と悪魔の騎士は、愕然としてザルトータンを見ていた。二人はザルトータンから何の情報も聞かされていなかったのだ。何度か、「調べはついたのか？」とたずねたが、そのたびにザルトータンは、「いましばらくの辛抱を――」と、同じ言葉を繰りかえすばかりだったのだ。

「魔界童子の報告によれば――」
ザルトータンはさらに言葉をつづけた。
「その者はこの島にわたる手がかりを求めて旅をつづけておると聞いております。ロトが三人の賢者に託したものを――」
「ロトが――⁉ なんなのだそれは⁉ ロトが賢者に託したものとはっ⁉」
「わかりませぬ。ただ、その三つのうちすでに二つは手に入れたとか――」
「うぬぬぬっ！ 魔将ともあろう者が揃っていながらなにをしておるっ！ なぜ、さっさと始末せぬっ！ 悪魔の騎士よっ！」
いきなり竜王は悪魔の騎士を鋭い眼光でにらみつけた。
「はっ」
悪魔の騎士はおびえながらおそるおそる顔をあげた。その目は竜王を正視できなかった。うろたえているのがはっきりわかる。
「あの赤児はなんだったのだっ⁉ 十五年前ロトの血をひく者だとわしの前に差し出した、あの赤児の死体はっ⁉」
「し、しかし陛下、あれは間違いなく！」
「黙れいっ！」
必死に言いわけしようとする悪魔の騎士を一喝した。

「はっ——」
悪魔の騎士の眼は絶望を通り越して恐怖に脅えた。処刑——の二文字が脳裏をかすめたのだ。いままでになんども同志が処刑されているからだ。悪魔の騎士はうなだれてひれふした。だが、竜王はじっと見つめると、
「いま一度だけ機会を与えよう！」
「はっ？」
はじかれたように悪魔の騎士が顔をあげ、竜王を見た。思いもよらなかったのだ。
「だが、二度と失敗は許さん！　わかっておるなっ！」
「はっ！」
悪魔の騎士は深々とひれふした。
「ザルトータンよ！」
「はっ」
「たしか、あのときそちは、その者が王女の愛を得るとき、このわしをも倒す——と申したなっ!?」
「たしかに——！」
「影の騎士よっ！」
影の騎士の肩がぴくっと震えた。
「はっ」

影の騎士はおそるおそる顔をあげた。
「十五年前、ラルス十六世の娘を殺したのはたしかだろうなっ⁉」
「はっ、間違いありませぬ！」
「もし、生きておったらどうする⁉」
「そ、それは――」
影の騎士は一瞬(いっしゅん)うろたえた。だが、きっと竜王を見つめた。ここでうろたえてはそれを認めたことになると思ったのだ。
「そのようなことは絶対ありえませぬ！　この命にかえても！」
竜王はじっとにらみつけると、
「その言葉、忘れるでない！」
と、いって肩で大きく溜息(ためいき)をつき、おもむろに玉座(ぎょくざ)に座った。
と、突然玉座のまわりにすさまじい稲光(いなびかり)が走ったかと思うと、目のくらむような光の白煙が竜王をつつんだ。やがて、その光が消えると竜王は姿を消していた。
「大魔道！　約束が違うではないかっ！」
「どういうことだっ⁉」
竜王が消えると、影の騎士と悪魔の騎士はザルトータンに詰め寄って責(せ)めた。
「なぜわれわれに隠しておったのだ、あのような重要な情報を⁉」

「陛下より、まずはわれわれに知らせるべきではないのか⁉」
だが、ザルトータンは悠然といった。
「しかし、そういう貴殿どももわしに内密で動いておったとか――」
「うっ――！」
「もっとも失敗したそうだがな。あやつを襲って」
と、ザルトータンは鼻さきで笑った。
「く、くそっ！　いつの間にっ⁉」
かっとなって影の騎士はザルトータンにつかみかかろうとした。だが、
「待たれいっ、影殿！」
あわてて死神の騎士がとめた。
「いま仲間割れなどしておるときではなかろう！　六魔将とはいえ、いまではもうこの四人しか残ってないのだからなっ！」
アレフガルド侵略のさい、影の騎士、悪魔の騎士、死神の騎士、スターキメラ、大魔道カトゥサ、ギガンテスの六魔将が配下の軍団を率いアレフガルド各地に散った。だが、ギガンテスはドムドーラの戦いで南国からの援軍の奇襲にあって戦死し、大魔道カトゥサもゴーレムの出現によりメルキド攻略に失敗して竜王に処刑されたのだ。そして、死の世界から蘇ったもと人間のザルトータンがカトゥサの後任に任命されたのだ。それ以来竜王にとり入ろうとするザルトータンを

古くからの魔将たちが快く思っていなかったのだ。
「もう貴様なぞの新参者の手など借りぬわいっ！　こっちはこっちで勝手にやらせてもらう！」
「いずれにせよ、あせりは禁物。ま、くれぐれも手ぬかりなきよう」
「黙れっ！」
影の騎士は鋭い眼でザルトータンをにらみつけると、
「貴様などに指示される覚えはないっ！」
吐き捨てるようにいって、悪魔の騎士とともに出て行った。

5　仇敵(きゅうてき)

上空を大鷲(おおわし)が大きな翼(つばさ)を広げて優雅に舞っていた。
その下の荒涼(こうりょう)とした砂漠をアレフと若者が一緒にドムドーラにむかって旅をつづけていた。若者の名をガルチラといった。
アレフがスターキメラの攻撃から助けてもらった夜――。
若者が腰にかけた布をひき裂いて負傷したアレフの右腕に巻きつけて立ち去ろうとするのを、アレフは強引に宿に連れて行った。

助けられた礼もちゃんといいたかったし、勇者ロトが賢者に託したものについてなにか知っているかもしれないと思ったからだ。それに、なつかしさもあった――。
だが、礼をいったあと賢者に託したものについてたずねると、若者は首を横に振っただけだった。
アレフは溜息をつくと、若者と別れたあとのことを話しはじめた。若者にとってはどうでもいいことだったかもしれないが、最初会ったとき勇者ロトの血をひく者だといっても信じてもらえなかったからだ。
封印されたガライの墓のことを話し、密林で五匹の大蛇に襲われた話をすると、それまでなんの反応も示さず黙って布で横笛を磨いていた若者が、はっと顔色を変えてアレフを見た。にらみつけるような怖い目だった。
「ねえ、大蛇のこと知ってるの⁉」
アレフは思わずたずねた。
だが、若者はなにもいわずまた横笛を磨きはじめた。しかたがなくアレフはそのあとの話をつづけた。ロトの洞窟でガライと会ったこと、マイラの道化師マヌエルのこと、一〇〇〇年魔女のこと、雨雲のつえのこと、ガライの墓の封印を解いたこと、銀の竪琴のこと、メルキドでのこと、もちろん、古地図と命の石とキメラの翼のことも――。若者は表情ひとつ変えず黙って聞いていた。だが、アレフが話し終わると、初めて口を開いた。そして、意外なことをいった。

「一緒に旅してもいいぜ——」
「えっ、ほんと!?」
アレフはうれしくなって思わず叫んだ。
「あんたと一緒なら心強いよ！　お願いするよ、ぜひ一緒に旅してくれよ！　あっ、ぼくアレフっていうんだけど——」
「——」
若者は、ちょっと間をおくと、
「ガルチラだ——」
と、名のった。

ガルチラは旅の途中はほとんどなにもいわなかった。ただ黙々と同じ速度で歩きつづけた。最初、ガルチラについて行くのがやっとだった。だが、三日もすると、ガルチラの速度について行けるようになっていた。
上空ではいつも大鷲が見守るように優雅に翼を広げて舞っていた。
「ねえ——」
アレフは思いきって聞いた。
前から大鷲と横笛のことを聞きたいと思っていたのだ。だが、ガルチラはほとんど口をきかな

いし、自分のことをいおうともしないので聞いてはいけないのかと気を遣って遠慮していたのだ。
「あの大鷲といつから一緒なの？」
ガルチラは大鷲を見あげた。そして、おもむろにいった。
「ずーっとだ」
「ずーっと？」
「赤ん坊のときからな」
「赤ん坊？」
「おれを拾って育ててくれたじいさんが飼っていたのさ」
「ひ、拾ってって――？」
驚いてアレフはガルチラを見た。
「じゃあ、みなしごだったの⁉」
「山のなかに捨てられていたんだそうだ」
「そうだったのか。それから、いつも磨いている笛のことなんだけど――」
アレフは遠慮がちにたずねた。と、ガルチラは懐から出して見せると、
「じいさんの形見さ」
といって、また黙々と歩き出した。
それから一時間ほどしたときだった。砂漠の前方にドムドーラの城壁が見えてきた。アレフと

ガルチラは足を速めた。
城門を入ると、さすがのガルチラも町の荒れ果てた様相に驚いて一瞬立ちどまった。町のなかを、前きたときと同じように冷たい風が吹いていた。
アレフとガルチラは魔物に気を払いながら町の広場にむかい、道具屋のカゼノフが教えてくれた教会の横の路地に入ろうとしたときだった。ガルチラは何者かの気配を感じてアレフを制した。二人は立ちどまって剣をぬきながら全神経を集中させて気配をうかがった。
低い咆哮が左右からいくつも聞こえた。獣だ。五匹、いやそれ以上いるかもしれない――アレフがそう思ったときだった。廃屋の入口や壊れた窓、さらに教会の崩れ落ちた壁のなかから、いきなりアレフの倍はある巨大な獣人が咆哮をあげて襲いかかってきた。その数は一〇匹あまりだ。
「くそっ！」
アレフとガルチラはすばやく身をかわしながら斬りかかった。
巨大な獣人は獰猛なキラーリカントだった。もともと深山にすむおとなしい小さな獣人だったが、竜王の魔力で巨大化し、凶暴化した魔物だ。
飢えた野獣のように鋭い牙と鋭い爪を突き立ててキラーリカントが襲ってくる。アレフとガルチラはすばやく路地の壁を背にした。こうすれば少なくとも後ろから襲われる心配はない。アレフはすかさず首飾りをつかんで呪法をかけた。そして、首飾りをにぎりしめた拳をまばゆい光がつつむと、

なった。

と、その手からすさまじい光線を発してキラーリカントを直撃した。と、キラーリカントの全身を稲光のようなはげしい光が走ると、キラーリカントははげしく全身を痙攣させながら動かなく

両足をしっかり踏んばり、アレフは襲いかかってきたキラーリカント目がけて手を突き出した。

「たーっ！」

すかさずガルチラが宙に跳んで剣を振りおろした。まっ赤な血しぶきがいきおいよく飛び散った。倒れたキラーリカントは見る見るうちに、もとの小さな姿になってそのまま動かなくなった。

「たーっ！」

アレフは、また襲いかかろうとしたキラーリカントに手をむけた。と、手からすさまじい光線を発してキラーリカントを直撃した。アレフはつぎつぎに呪法をかけ、ガルチラは片っ端から呪法のかかったキラーリカントを斬り倒し、やっと全部をかたづけた。

アレフの体からすーっと力がぬけた。呪法を使いすぎて体力が消耗したのだ。ガルチラはあわてて倒れそうになったアレフをかかえた。と、風が吹きぬけて行った、そのときだった。はっと人の気配を感じて、思わず二人は振りむいて、

「あっ⁉」

すかさず剣を身がまえた。アレフよりガルチラのほうがはるかに驚きが大きかった。

魔界童子が樫の木の巨大な根もとに立ってぶきみな笑みを浮かべていたのだ。

「お、おまえはっ⁉」
アレフが叫んだとき、ガルチラがすでに動き出していた。ガルチラはすさまじい形相(ぎょうそう)ですばやく斬りかかり、渾身(こんしん)の力をこめて剣を振りおろした。その目には憎しみが燃えていた。が、ぱっと魔界童子が宙に跳(と)んだ。
「あっ⁉」
ガルチラは、一瞬見失った。つぎの瞬間、魔界童子はアレフのまうしろに音もなく着地した。着地したのと同時だった。
「たーっ！」
アレフは疲れきった体を震い立たせ、思いっきり踏みこんで剣を振りおろした。だが魔界童子はすばやく宙に跳んでアレフの剣をかわした。
「ウリャーッ！」
アレフは、すかさず体勢をかえて、大きく跳んだ。と、同時に、
「トーッ！」
ガルチラも大きく宙に跳んで剣をかざした。宙で魔界童子をはさみ討ちにし、アレフとガルチラは同時に剣を振りおろした。「もらった！」──アレフもガルチラもそう思った。だが、つぎの瞬間、
カキーン！

乾いた音が広場に響いた。刃と刃がむなしくぶつかり合った。

「あっ!?」

魔界童子の姿が消えたのだ。着地したガルチラとアレフは、魔界童子を見失ってしまった。と、

「ふっふふふふ！」

ぶきみな笑いが頭上からした。

「あっ!?」

樫の木の中ほどに張りだした枝に、魔界童子が平然と立っていた。

「おりてこいっ！」

ガルチラが叫んだ。

「ふっふふふ。はっははは」

魔界童子はぶきみな声で笑った。

と、大鷲が、魔界童子目がけて矢のように上空から急降下してきた。さっと魔界童子の顔色が変わった。大鷲の鋭い嘴(くちばし)が急接近した。その目は獣(けもの)を襲(おそ)うときのそれより鋭かった。

「ちっ」

魔界童子は舌打ちしたかと思うと、すばやく姿を消し、シュッ——と音を立てて大鷲の鋭い嘴はむなしく空(くう)を斬った。ほんの一瞬(いっしゅん)遅かったのだ。風が音を立てて吹きぬけて行った。

アレフとガルチラは全神経を集中させて気配をさぐった。だが、風の音ばかりだった。それっ

きり魔界童子は姿を現さなかった。
「くそっ、魔界童子めっ！」
ガルチラは、くやしそうに唇を噛んだ。
「魔界童子？」
「竜王に仕える魔物だ。やつにじいさんが殺されたのさ」
「えっ!?」
「実は――じいさんはラダトーム城の間諜だったのさ」
「間諜!?」
「旅人に変装して竜王側の動きを密かに調べていたんだ。大鷲と旅をしながらな。だが、魔界童子が魔物だと見破ったばっかりに、やつの呪法にかかって殺されたのさ。五匹の大蛇にな。おれが八歳の冬だった」
「だ、大蛇に!? そうか。あの大蛇はあの魔界童子が操っていたのか――」
アレフはふと、メルキドの宿で大蛇の話をしたとき、ガルチラが顔色を変えたことを思い出した。
「じゃあガルチラは敵を討つために旅を――!?」
あ然としてアレフはたずねた。
「おれはずっとやつを捜していた。大鷲と一緒にな」

それで、鷲もさっき襲ったのか——アレフは空を見あげた。
大鷲が、ゆっくりと上空を舞っていた。

6　ロトのヨロイ

「だが、この十四年間、やつは一度もおれの前に現れなかった。正直いって、おれはあきらめかけていた。だが、おまえについてきて正解だった」
教会の横の路地を奥に進みながら、そういってガルチラは白い歯を見せた。
「おまえと一緒に旅をつづけてりゃ、そのうちまた襲ってくるだろうからな」
と、石畳の坂をちょっと下った先に階段を見つけた。
「あそこだ！」
アレフは思わず目を輝かせて駆け寄った。
「く」の字に曲がった石の階段は、両側に大きく張り出している巨大な二つの根っこのかたまりの間を縫うように下の石畳につづいている。アレフとガルチラは、すばやく階段をおり、巨大な木の根っこのかたまりを見あげた。まるで岩のようだ。
「すげえ！」
アレフは、思わず見とれた。

根っこの高さはアレフの三倍はある。太さも両手を広げても届きそうもない。そんな根っこが何本も張りだし、複雑にからみあいながらくっついて、ひとつのかたまりのようになっている。
根っこの左の奥には崩(くず)れかけた古い石の柵があった。ちょうど根っこがくぼんだところだ。かつてドムドーラの人たちが子供たちをなかに踏みこませないために作ったのだろう。
アレフとガルチラは、柵のなかにはいって根っこのくぼんだところを調べた。その奥は、さらに根と根が複雑にからみ合っていた。その複雑にからみ合った根の裏側をのぞきこんで、
「あっ!?」
思わずアレフは声をあげた。
やっと人間がひとり入れるほどの小さな穴がぽっかりと口をあけていた。
入口の小さな穴をくぐりぬけて奥にはいると、なかは広い根っこの空洞(くうどう)になっていた。アレフは、たいまつをつけて奥を照らした。奥に闇(やみ)があった。アレフとガルチラは、闇にむかって進んだ。
空洞は複雑に入りくんでいた。二人は、さらに奥に進んだ。と、根っこの空洞を出ると、そこは巨大な根っこがからみあって自然にできた洞窟になっていた。アレフはいまさらながら、樫の木の偉大さに驚いていた。こんなに深くまでどっしりと根をおろしている樫の木に、感動に近いものを覚えていた。
二人はさらに奥に進んだ。すると、ちょっとした部屋のようなところに突きあたった。アレフ

はたいまつをかざしてなかを照らすと、奥の棚のように平らになった根っこの上に置いてある頑丈そうな箱が闇のなかに浮かびあがった。がっちりとした木製の箱で、鋼鉄のふちどりがしてあった。

アレフは、すばやくその箱に駆け寄ってふたをあけて、

「あっ!?」

思わず目を輝かした。

鏡のような光沢をした立派なヨロイがひとつはいっていた。両肩に美しい翼の飾りがほどこしてある。そして、左胸の心臓のところに楔形文字が彫ってあった。見覚えのある文字だった。ロトの洞窟に彫られていたロトの言葉の一番最後にあるものと同じ文字だった。「ロト」というその文字だけはアレフの頭にしっかりと刻まれていたのだ。

「ロトのヨロイだっ!」

さっそくアレフは、マイラで新調したヨロイを脱ぎ捨て、ロトのヨロイを着た。まるでぴたっと体に吸いついたような感触がした。と、ぶるぶるっ——と全身が震えた。

「こ、これは!?」

ヨロイからふしぎな力が伝わってきた。その力が、まるで血液のように、あっという間に全身を駆けまわった。胸の奥から熱い闘志がこみあげてきた。と、そのときだった。

「勇者ロトの血をひく者よ」

と、うしろで声がした。

「うっ!?」

ガルチラは振りむきざますばやく剣の柄に手をかけた。が、アレフはあわててその手をつかんで押さえた。アレフには、聞き覚えのある、なつかしい声だった。

青白い炎につつまれた白髪の老人の像が宙に浮いていた。

「ガライ!」

アレフはなつかしそうにほほえんだ。

「ガライ——!?」

ガルチラは、あ然としてガライを見た。アレフから話は聞いていたが、実際に目の前で見ると、さすがのガルチラも驚かざるをえなかったのだ。

「こ、これが勇者ロトが三人の賢者に託したものの最後のひとつなんですね!? これで竜王の島にわたれるんですね!?」

が、ガライは首を横に振った。

「それだけでは完全ではない」

「えっ!?」

「『ロトのしるし』が必要なのじゃ」

「『ロトのしるし』!?」

ガライは、じっとアレフを見つめた。
「その前に、おまえにはやらなければならないことがひとつある」
「!?」
アレフは思わずガルチラと顔を見合わせた。
「アレフガルドの東のはずれに近いところに沼地の森がある。そのそばにある岩場の洞窟の闇のなかで、ローラ姫が生きている」
「ローラ姫がっ!?」
アレフは、思わず自分の耳を疑った。
「で、でもローラ姫は!?」
「生きておったのじゃよ」
「ま、まさか――!?」
アレフには信じられなかった。
「いまのおまえならできるはずじゃ。行ってローラ姫を助け出すのじゃ。そして、聖なるほこらに行くがいい」
「聖なるほこら!?　それはどこにあるんですか!?」
「リムルダールへ行けばおのずとわかるじゃろう。そこへ行く道すがらおまえは『ロトのしるし』をきっと見つけるはずじゃ。おまえの心のなかにな」

「心のなか――!?」

『ロトのしるし』を見つけたら、おまえはその聖なるほこらで、竜王の島へわたることができる『虹(にじ)のしずく』を、おのずと手に入れることができる」

「『虹のしずく』!?」

「そうじゃ。さらばじゃ勇者ロトの血をひく者よ。必ずや竜王を倒し、光の玉を奪い返すのじゃ」

と、青白い炎とともにすーっとガライの姿が消えてしまった。

西の空に大きな太陽が沈みかけていた。

ドムドーラの城門を出たアレフとガルチラは北へむかって歩き出した。

アレフは何度も振りむいた。そのたびにドムドーラが遠くなる。

さらば、ドムドーラよ! さらばわが故郷よ!

アレフは、心のなかで叫んだ。

必ずや、竜王を倒してみせる! かならずや、アレフガルドに平和を取りもどしてみせる!

その日まで、さらばだ!

第五章　ローラ姫救出

ドムドーラを出発したアレフとガルチラの二人は、アレフガルド東部の沼地の森を目指して旅をつづけた。
旧メルキド街道を北上し、旧ガライ街道をへて、旧アレフガルド街道を東へむかった。北アレフガルドと東部を結んでいる入江の崩(くず)れかけた橋をわたり北へまっすぐ行くとマイラにつながっている。だが、二人は橋をわたると南に下りながら東へむかい、やがて沼地の森に入った。かつての旧アレフガルド街道だが、天変地異(てんぺんちい)で街道は消え、おそろしい沼地の森に変貌(へんぼう)したのだ。
そして、この旧街道の先にリムルダール島にわたる港町があったという。そこが旧アレフガルド街道の終点だったのだ。だが、いまではその町も沼地の森のなかに消滅(しょうめつ)してしまったのだ。さらに、リムルダール島にわたるおだやかな海峡も、波がさか巻くはげしい潮の流れに一変してしまったのだ。
いま旅人がアレフガルドからリムルダール島にわたるには、この沼地の森と海峡をさけ、アレフガルドの北東部の浜辺で船を見つけて、いったん外洋に出てまっすぐ南下し、リムルダール島

の東の岬へ向かう。これが、リムルダール島にわたる通常のルートなのだ。もっとも、リムルダールにわたる船は月に一度あるかないかなのだが――。
竜の月から王の月に変わろうとしていた。季節はふたたび冬を迎えていた。

1 思惑

「な、なにっ⁉」
悪魔の騎士は愕然とした。
「あのときの赤児はにせものだというのかっ⁉」
闇のなかの一室で燭台のローソクが燃えている。そのあかりをはさんで影の騎士と悪魔の騎士が対座していた。
竜王の怒りに触れてから、二人はメルキドまでのアレフの旅の足取りを追っていたのだ。すぐ襲撃してもよかったのだが、真にロトの血をひく者かどうか、どうしてもたしかめたくなったのだ。もし、たしかめないで抹殺したらそのまま謎が残るからだ。
「残念ながらな――」
じっと悪魔の騎士を見つめながら影の騎士が答えた。
「そ、そんなばかなっ！」

「まあ聞くがいい」
悪魔の騎士を制して影の騎士はひと呼吸おいて喋り出した。
「十五年、いや十六年前の竜の月の最初の日。その日ドムドーラに生まれた赤児の家に三人の男が現れて、古地図と命の石とキメラの翼を置いて立ち去ったのだそうだ。その夜、貴殿がドムドーラを襲った。だが、赤児は、母親の手によってそのキメラの翼で瞬時にしてラダトームの近くまで飛んだのだ。そして、通りがかったラダトームの鍛冶職人に拾われて育ったのだ。つまりあやつはドムドーラの唯一の生き残りなのだ。しかもロトの血をひくなっ」
「うぬぬぬっ！」
悪魔の騎士の唇がはげしく震えた。竜王に差し出した赤児の死体には絶対の自信があっただけに衝撃が大きかった。
「それにしても大魔道のやつ、約束通り情報をくれれば、こんな無駄足をしなくてすんだものをっ」
影の騎士は忌ま忌ましそうに吐き捨てた。だが、悪魔の騎士はそんな言葉など聞いていなかった。屈辱と怒りで頭のなかがいっぱいなのだ。鋭い目で奥歯をぎっと嚙むと、はげしく全身を震わせて、
「くそっ！　許せぬっ！」
いきおいよく立ちあがった。アレフの襲撃にむかおうとしたのだ。

「待たれいっ！」
あわてて影の騎士はひきとめた。
「いまあやつを殺したらわしの目論見(もくろみ)はどうなる！」
じっと鋭い目でにらみつけると、
「真のローラ姫かどうかたしかめるまでは」
殺(や)ってはならぬ——と、さとすようにゆっくりと首を横に振った。
「そのために時間を費(つい)やしたのだからなっ」
「うぬぬっ！」
悪魔の騎士は影の騎士の手を払うと、悔(くや)しそうに肩で大きく溜息(ためいき)をついた。
「いずれにせよ、あやつらは明日にも沼地の森の岩場に到着するだろう。うまくここに誘いこむのだ。陛下(へいか)のところへはわしがおもむく」
大魔道ザルトータンから、さすがの陛下も業(ごう)を煮(に)やしてどうなっているか気にしておられる、一度報告におもむいたほうがよいのではないか——と再三(さいさん)にわたって連絡があったからだ。
「無下(むげ)にしてもよいのだが、あやつのことだ、あらぬことを陛下に進言するやもしれん」
「だが、貴殿だけでは陛下は——」
悪魔の騎士は竜王の様子が気になっていた。これ以上信用を落とすと、大魔道カトゥサの二(に)の舞(ま)いになるのが見えているからだ。

「貴殿の胸中(きょうちゅう)はよくわかる。だが、どちらかがここに残らねばならぬ。念には念をいれねばな。ま、安心なされい。陛下(へいか)にはわしからうまく申しておく」
「し、しかし――」
悪魔の騎士にとって、それは気休めの言葉でしかないのだ。竜王はそんなことで誤魔化(ごまか)せる相手ではないのだ。
「いずれにせよ、あやつを殺(や)るのは時間の問題なのだからな」
「――」
悪魔の騎士はまた溜息(ためいき)をついた。
「わかった――」
「用件が済みしだいすぐもどる。では」
そういい残して影の騎士は疾風(はやて)のように闇(やみ)のなかに消えた。

2　洞窟

ずぼっ、ずぼっ、ずぼっ――。
一歩踏(ふ)み出すたびに、やわらかな沼地が踝(くるぶし)まで沈む。うっそうとしたぶきみな深い森。わたる風もなければ、鳴く鳥の声さえない。

ところどころに、ぶくぶくと泡を立てたぶきみな沼地が待ちかまえている。そこは、ほかの沼地と違って異様にどす黒い色をしている。おそろしい底なしの沼地だ。アレフとガルチラは、その底なしの沼地を避けながら、比較的地盤の固い木々が密集しているところを選んで、東へ進んでいた。

一時間も歩くと、真冬だというのに汗でびっしょりになる。足が棒のようになる。歩いては休み、休んでは歩く。くる日もくる日もその繰りかえしばかりだ。この沼地に入って、すでに七日目の夜を迎えようとしていた。

二人はまた横に張り出した大きな木の根っこでひと休みすると、野宿に適した地形をさがしながらさらに進んだ。と、急に地面の傾斜がきつくなった。のぼりになったのだ。足も地面に沈まない。沼地から固い地面になったのだ。二人はさらに足を速めた。そして、森をぬけると目の前に大きな岩場が広がっていた。

「やった！」

アレフは目を輝かせて叫ぶと、二人は波の音のする方にむかって走った。

岩場は海に突き出していた。目の前に潮の流れのはげしい海峡が広がり、対岸に黒々とした陸地が連なっていた。

「リムルダールだ！　リムルダールだよねっ!?」

対岸を見つめながらガルチラは黙ってうなずいた。

北の山脈から吹きおろす冷たい風が容赦なく吹きつけていた。いつの間にか上空には月が出ていた。そのときだった。

「リムルダールにわたりたいのか？」

突然、うしろから男の声がした。

はっとなって剣の柄をつかみながら振りむくと、小柄な法衣姿の老人が立っていた。暗くてフードのなかの顔はよく見えないが、目だけは異様に鋭かった。

「怪しい者ではない」

老人は警戒しているアレフとガルチラにかすかにほほえんだ。

「この沼地の森の奥に住んでおる者じゃ。かつてここは、といっても竜王に支配される前の話じゃがな、港町としてずいぶん栄えたところじゃ。アレフガルド中から船乗りや酒場の女たちが集まってきてな、夜もあかりが消えることがないほど賑わったそうじゃ。だが、いまは見ての通りじゃ」

老人は哀しそうな目で一帯を見わした。

「でも、どうしてこんなところに!?」

アレフはたずねた。

「――」

だが、老人は答えずじっとアレフを見つめた。

「リムルダールにわたるなら、わしが秘密の洞窟を教えてやろう」
「洞窟!?」
アレフとガルチラは思わず顔を見合わせた。
「四〇〇年ほど前のことじゃ。このアレフガルドがまだ大魔王に支配されていたころ、この海峡がいまと同じように荒れ狂っておったんじゃ。そこで、この町の人々はこの海峡の下に秘密の洞窟を掘ったんじゃよ。あの岬までな」
老人はリムルダールの黒々とした陸地の岬を指差した。
「だが、その後、勇者ロトが大魔王を倒してから、この洞窟はあまり使われなくなったんじゃ。船で一直線にリムルダールにわたった方が速いからな。わざわざ時間をかけて危険な洞窟を歩かなくてもいいんじゃからな」
「その洞窟ってのはどこにあるの!?」
「この下に入口がある」
老人は足もとの、荒波が押し寄せる岩場を見おろした。
「いまは満潮で海面に隠れておるが、朝、潮がひけば入口が姿を現す。ま、気をつけて行くんじゃな」
そういって老人は風に吹かれながら、いずこともなく姿を消した。
「気に入らねえぜ――」

ガルチラが舌打ちした。妙に親切すぎるのが気に入らないのだ。

「でも苦労しないでわかったんだからいいじゃないか。どうせ洞窟に入らなきゃならないんだから」

その夜、二人は岩場の窪地で風をさけながら野宿した。

翌朝――。

アレフは、波の音で、はっとはじかれたように飛び起きた。沼地での疲れからか、いつもより寝すぎてしまったのだ。灰色の冬空からかすかに太陽の光が差していた。上空をいつの間に追ってきたのか、あの大鷲がゆっくりと旋回していた。と、

「アレフ！」

岩場の下からガルチラの呼ぶ声がした。

見ると、ガルチラが、波打ちぎわの岩に立って岩場の下を指差した。アレフはあわてて荷物をかき集めて岩場をおりた。

岩場の下に洞窟の入口がぽっかりと口をあけていた。入口には波が押し寄せてくる。だが、ひざの下まで濡れただけで、なかに入れそうだ。

アレフとガルチラは、さっそく海水につかりながらなかに入ると、たいまつをつけて奥へ進んだ。と、急にのぼり坂になっていた。二人はそこで海水からあがり、その坂をのぼった。岩のりや海草が生えていて足が滑る。満潮時には、そこまで潮があがってくることを示していた。だが、

途中から岩だけになった。

坂をのぼりきると、こんどは左にまがりながら下にむかう階段があった。いたるところに蜘蛛の巣が張り、ところどころ階段は崩れ落ちている。二人は蜘蛛の巣をかきわけ、足もとに気をつけながらさらに下へ、そして奥へと進んだ。

三〇分ばかり階段を下りると洞窟はさらに奥へと複雑な迷路のようにつづいていた。岩盤が弱いのか洞窟の両側や天井は、まるで鉱山の坑道のように無数の太い丸太や板で崩れ落ちないように支えられていた。だが、丸太や板は枯れているものもあれば折れているものもある。ときどき、バラバラバラッ――と、その天井のすきまから土砂や細かい石が落ちる。

崩れ落ちていてやっと通れるようなところも何カ所もある。地下水が滲み出て湿っているところではたえず冷たい雫が天井から落ちてくる。大きな水たまりもたくさんあり、三〇〇歩も四〇〇歩もつづいていたり、ひざまで浸からなければ進めないところもあった。

三時間ほど進むと、洞窟が二つに分かれていて、どっちへ行ったらいいのか見当がつかなかった。二人はとりあえずひと休みすることにした。

「しかし、こんな洞窟でどうやって生きのびてたんだろ、ローラ姫は――」

アレフは溜息をついて、床に突き出た岩に腰をおろして洞窟を支えている丸太にもたれた。と、その丸太がまっ二つに折れ、ドドドドッ――と、いきおいよく洞窟が崩れ落ちたのだ。

「うわあっ！」

アレフはあわてて飛びのいた。ちょうどその崩れた個所を境にアレフとガルチラが反対側に離れ離れになった。

落盤はとどまることを知らなかった。すさまじいいきおいで崩れ落ち、さらに天井が崩れ落ちて、一瞬にして洞窟を埋めてしまったのだ。アレフとガルチラはその土砂で完全に遮断されてしまった。

「ガルチラ！」

アレフは必死に叫んだ。

「ガルチラ！」

だが、返事がなかった。アレフの声がむなしく闇のなかに谺するだけだった。アレフは茫然としてその場に立ちつくしていた。

だが、じっとしていてもはじまらない。おそらくガルチラはもう一本の洞窟を進んでいるはずだ。ひょっとしたらどっかでつながっているのかもしれない——数分後、気を取りなおしたアレフはさらに奥へ進んだ。

二時間ばかり進むと、今度は洞窟が十字路になっていた。

「大丈夫かな、ガルチラのやつ——」

ガルチラのことを心配しながらひと休みしようとして腰をおろしたときだった。右の突きあたりにある扉のようなものが目に入ったのだ。

「あ、あれは⁉」
たいまつをかざして目をこらした。たしかに扉だった。
「ま、まさかっ⁉」
とたんにアレフの胸の鼓動が急に速くなった。
「まさか、あそこにローラ姫が⁉」
アレフは思わず扉の前に駆け寄った。頑丈そうな鉄の扉に、これまた頑丈そうな鉄の錠がかけてあった。アレフは、扉を押してみた。だが、びくともしなかった。
「よーし！」
アレフはすかさず扉の前に座ると、首飾りをつかんで印を結び、指先に全神経を集中して、精根こめて必死に念じた。
「われに力を——！　扉のあかれんことを——！」
と、指先から黄金色の光がほとばしり、その光が錠を直撃し、扉全体が稲光を浴びたようにはげしく反応した。そして、その光が消えると、扉はむこうがわに大きな音を立てて崩れ落ちた。
「やった——！」
アレフは心のなかで叫んだ。だが、体中から力がぬけて一瞬動けなかった。アレフは気力を振りしぼって立ちあがると、全神経を集中させ警戒しながら扉をまたいで奥に進み、たいまつをかざした。そこは部屋になっていた。そのときだった。

「アレフ!?」
と、驚く女の声がした。
「えっ!?」
アレフは驚いて声のした方にたいまつをかざした。
「あっ!?」
部屋の隅に座っていたパジャマ姿の美しい少女が立ちあがった。セシールだった。

3　ローラ姫

「セシール!?」
アレフは驚いて駆け寄った。
「よく、生きてたね！」
「アレフ――！」
「お待ちしていましたわ――」
セシールはじっとアレフを見つめた。その目に涙が滲んだ。
「心配してたんだよ！」
アレフの目頭も熱くなった。

セシールはやせて見えた。長い間こんなところに閉じこめられていたから無理もない。だが、前よりだいぶ大人っぽくなって、女としての美しさがいっそう増していた。
「そ、そうだ！　ロ、ローラ姫は⁉」
はっとなってアレフは思わず部屋のなかを見まわした。だが、セシールのほかにだれもいなかった。さっとアレフの顔色が変わった。
ま、まさかっ⁉　まさかセシールがっ⁉　セシールが⁉
「セシール⁉」
アレフは、あ然としてセシールを見つめた。
「――」
セシールはこくりとうなずいた。
「セシールがローラ姫だっていうのか⁉」
思わずセシールの肩をつかんで揺すった。
「はい――」
セシールは、まっすぐアレフを見つめた。
「初めはわたしも信じられませんでした」
「で、でも、ど、どうなってんだよ⁉」
「ガライが現れたんです」

「ガライがっ⁉　いつ⁉」
「竜の月の四〇日」
「竜の月の四〇日？」
「ええ。ちょうどわたしの十六歳の誕生日の日に――」
「誕生日⁉」
アレフははっとなった。今日から、竜の月から王の月に変わったのをうっかり忘れていたのだ。王の月の最初の日、つまり今日がアレフの本当の誕生日だったのだ。ちょうど十六年前の今日、アレフが生まれ、その夜ドムドーラが竜王配下のドラゴン部隊に襲われたのだ。そして、竜の月の四〇日は今日より七日前にあたる。
「そこに現れたのです」
セシール、いやローラ姫が部屋の反対側の隅を指差した。
闇のなかには月も季節もない。いや、それどころか昼も夜もない。
セシールがこの闇にら致されてからすでに二四〇日にもなろうとしていた。だが、セシールには二年にも三年にも、いや一〇年にも感じられた。セシールは、ら致されてからいく日たったかわからなくなっていた。闇のなかは、絶望と気の遠くなるような時間ばかりだった。竜王の配下の魔物になぜこの闇のなかに閉じこめられているのかセシールにはわからなかった。殺された両

親のことを思い、ただ涙を流すだけだった。だが、その涙もいつの間にか涸れ果てていた。ただ茫然として、くる日もくる日も闇のなかでじっと身を殻にしていた。そして、

「いっそ死んだら——」

そう思うようになっていた。

だが、アレフのことを思い出すと、いくらか勇気が湧いてきた。アレフが真の勇者ロトの血をひく者なら、いつの日か竜王を倒して、自分もこの闇から出られるのではないか、とかすかな希望が生まれるからだ。アレフが頑張っているのだから、自分も頑張らねば——と。

そのときも、セシールはアレフのことを思っていた。と、突然、闇のなかの宙にほのかな青白い炎がともった。はっとなってセシールは脅えた。竜王の配下の魔物だと思ったのだ。だが、

「脅えることはない」

と、やさしい声がした。ほのかな青白い炎のなかに、半透明の白髪の老人の像がうっすらと浮かびあがった。ガライだった。

「わしの名はガライ」

ガライは神秘的なおだやかな目でセシールを見つめた。

「ガライ？」

セシールは驚いた。

「今日はあなたさまの十六回目の誕生日にあたります」

「誕生日——？」
もうそんなになるのか——と、このとき初めてセシールは致されてから今日で何日目にあたるのかがわかった。
「おめでとうございます。ローラ姫」
「ローラ姫!? わ、わたしはローラ姫ではありません。ガライの町のセシールという者です」
「いや——」
ガライはやさしくほほえむと、ローラ姫の胸を指差した。
「その首飾りがなによりの証拠」
「こ、これが!?」
セシールはあわててパジャマのなかから首飾りを出した。
薄緑のきれいな宝石に銀の装飾がしてある。指の爪ほどの小さな宝石だが、セシールが子供のころから肌身離さず持っていたものだ。
「その首飾りの宝石は、勇者ロトが大魔王を倒しラダトーム城に凱旋したときはめていた指輪の宝石なのです」
「勇者ロトが——？」
「大魔王を倒すために旅をつづけていた勇者ロトが、ある深山で妖精に会い、その宝石を授かったのだそうです。きっとこの石があなたの命を守ってくれるでしょう——そういわれて」

セシールはあ然としたまま首飾りの宝石を見つめていた。

「そして、姫がお生まれになったとき、ラルス十六世がお祝いとして、その宝石を首飾りにして姫に贈られたのです」

セシールは十三歳の誕生日のことをふと思い出した。両親はその日、首飾りの鎖が小さすぎたので新しい大きな鎖をプレゼントしてくれたのだ。だが、そのときセシールは両親の子供でないことを知っていた。前の晩、本当のことを打ちあけたほうがいいかどうかと両親がもめていたのを偶然聞いてしまったからだ。

「十六年前――ラダトーム城では姫のお七夜の祝宴が催されておりました。ところが、突然竜王の配下の影の騎士率いる黒影軍団が姫のお命を狙って襲ってきたのです。乳母は姫を連れて運よく逃げたのですが、ラダトームの東にある岬でついに黒影の軍団につかまってしまい、乳母は斬られて、姫をかかえたまま崖の上から荒れ狂う海に落ちたのです。ところが、岩場に落下する直前、姫の首にかけてあったその宝石が突然光り輝き、姫をつつんでそのまま消えてしまったのです。そして、時を同じくして、ガライの町にある小さな宿屋の夫婦は偶然同じ夢を見たのだそうです。夢のなかに赤ん坊をかかえた妖精の老婆が現れてこう告げたのだそうです。『この子は今夜お七夜をむかえたばかりじゃが、アレフガルドにはなくてはならぬ子。自分たちの子として大事に育てるがいい』。夫婦は驚いて目を覚ますと、妖精の姿はなく、ベッドでかわいい赤ちゃんがおだやかな顔で眠っていたのだそうです。そして、首には美しい薄緑の宝石の首飾りが光輝いてい

たのです。子供に恵まれなかった夫婦は喜んでその赤ちゃんを育てたのです。その子が、姫、あなたさまなのです——」
「で、でも——」
セシールは首を横に振った。とても信じられなかったのだ。
「希望をお持ちくだされ姫。近いうちに必ずや勇者ロトの血をひく者がここに現れるでしょう」
「勇者ロトの血をひく者が!?」
セシールはとっさにアレフの顔を思い浮かべた。
「そして、一緒にリムルダール島にある聖なるほこらに行けば、あなたさまが真のローラ姫であるかどうか、その首飾りが証明してくれるでしょう」
そういってガライは青白い炎とともに消えたのだった——。

「そうか、そうだったのか——」
ローラ姫の胸で輝いている薄緑の美しい宝石を見ていたアレフが顔をあげてじっとローラ姫を見た。ローラ姫もまた澄んだ瞳(ひとみ)でアレフを見てうなずいた。このとき、はじめてアレフはローラ姫がパジャマ一枚であることに気づいた。寝ているとこを襲われたのだ。
「あっ——」
ローラ姫はアレフの視線に気づき、ほんのちょっとだがはだけている胸元(むなもと)をあわてて隠(かく)して恥(は)

じらった。
「さあ」
アレフは自分のマントを着せると、
「とにかく、ここを出よう！　さあ！」
アレフはローラ姫の手をとって部屋を出て、
「あっ⁉」
思わずローラ姫をかばってすばやく剣をぬいた。
すぐ目の前の暗闇のなかで、まっ赤なぶきみな眼が光ったのだ。アレフの七、八倍はある巨大なドラゴンが立ちはだかっていた。ドラゴンは、竜王の侵攻とともに魔界からこの地上にやってきた魔物の怪獣なのだ。と、
「ふっふっふっふ」
ぶきみな笑い声がとどろいた。なんと、ドラゴンの背に昨夜の老人がまたがっていた。
「ゆ、昨夜のっ⁉」
「話は全部聞かせてもらった。その娘が真のローラ姫だったとはなっ！」
と、老人の体がいきなりひとまわり、いやふたまわりも大きくなったかと思うと、まとっていたフードや法衣がいきおいよくちぎれ飛んで正体を現した。悪魔の騎士だった。
「うっ⁉」

「ふっふふふ。六魔将のひとり悪魔の騎士だっ！」
「な、なにっ!?　悪魔の騎士!?」

4　悪魔の騎士

「く、くそっ、おまえかっ、ドムドーラの人々をみな殺しにして町を燃やした張本人はっ!?」
「いかにも。それというのも、貴様の命を奪うためだったのだっ！」
「なにっ!?」
「ロトの血をひく者のなっ！」
「うっ！　ぼ、ぼくの命を奪うために、町の人たちまで巻きこんだのかっ!?」
　とたんに怒りがこみあげてきた。
「許せない！　そのためにあんなことをするなんて絶対に許せないっ！」
「だが、わしにとっても貴様が許せぬ！　ドムドーラで唯一生き残った貴様がなっ！　わしは六魔将のひとりとして、竜王陛下の期待に存分に応えてきたっ！　数ある戦いのなかでも、わしの思い通りにならなかったことはただの一度だってないっ！　だが、殺したはずの貴様が生きておったっ！　貴様の存在だけが、わしの唯一の汚点となってしまったのだっ！」
と、ブォォォォッ——ドラゴンがまっ赤な炎を吐いて襲いかかった。

「うわあっ！」
アレフはかろうじてかわすと、ローラ姫をかばいながらドラゴンの横をすりぬけて逃げ、ローラ姫にたいまつをわたした。と、すかさずまたドラゴンが炎を吐いた。アレフは横に逃げて十字路の方にローラ姫を押しやると、ローラ姫がかざしているたいまつのあかりを頼りに、
「エイッ！」
ドラゴンの足に、思いっきり剣を振りおろした。
ブシューッ！　青い血が飛んだ。と、ドラゴンは咆哮をあげながらまた炎を吐いて、逃げようとしたアレフに命中した。
「あーっ！」
火だるまとなったアレフは洞窟を支えている丸太まで吹き飛ばされて背中を打った。と、丸太が折れてそこからドサドサッ——と土砂や岩が崩れ落ちた。
と、今度はドラゴンの巨大な鋭い爪が襲った。アレフがかろうじてかわすと、爪は丸太や板を粉々にぶち破り、また土砂や岩が崩れ落ちた。
「ぐっははは。徹底的になぶり殺しにしてやるわいっ！　徹底的になっ！」
悪魔の騎士は残忍な笑いをあげた。
「くそっ！」
アレフは首飾りをつかんで呪法をかけた。と、拳を光がつつむと、その光が一本の光線になっ

てドラゴンを直撃（ちょくげき）した。だが、呪法はきかなかった。
「はっははは」
悪魔の騎士はまた笑った。と、ドラゴンの炎がまたアレフに命中して、
「うわあっ！」
アレフは火だるまになって吹っ飛んだ。
すかさずドラゴンは倒れているアレフに巨大な爪で襲いかかった。そのときだった。一本の矢がいきおいよく飛んできて、ドラゴンの右眼に突き刺さったのだ。ドラゴンは苦しそうにのけぞった。ガルチラだった。
「アレフ！」
ガルチラが弓を肩におさめ、剣をぬきながら駆（か）けつけてきた。もう一本の洞窟を進んだら偶然この十字路につながっていたのだ。
「うぬぬぬっ！」
悪魔の騎士はすかさずドラゴンの背から飛びおり、巨大な斧（おの）をかざしてガルチラの前に立ちはだかった。
ドラゴンはまた炎を吐きながらアレフに襲いかかった。だが、アレフはかろうじてかわすと、体勢を変えてドラゴンの左眼に剣を突き刺した。ドラゴンは咆哮をあげてのけぞった。
両眼を失ったドラゴンは炎を吐きながらはげしく暴（あば）れまくった。だが、アレフは炎をかわしな

がらのどもとを突き刺し、宙に跳んでドラゴンの首を目がけて思いっきり剣を振りおろした。
青い血がつぎつぎに噴き出し、ドラゴンはすさまじい咆哮をあげながら仁王立ちになると地響きを立てて倒れた。と、その振動で、ドドドドドッ――天井から土砂や岩が崩れ落ちた。

「うぬぬっ！」

ガルチラを追い詰めていた悪魔の騎士の顔色が変わった。悪魔の騎士はすかさず巨大な斧を振りかざしてアレフに襲いかかった。ビュンビュン唸りをあげながら鋭い斧の刃先がアレフをかすめた。

アレフは必死に斧をかわして斬りかかった。同時に後方からガルチラも斬りかかった。だが、さすがに悪魔の騎士は強かった。ふたりの剣をすばやく斧の刃先で受けてかわしたのだ。

と、悪魔の騎士は残忍な笑みを浮かべ、斧をにぎり変えて襲いかかってきた。アレフは斧の刃先をかわしながら、首飾りをつかんで呪法をかけた。と、拳をつつんだ光が一本の線になった。

そのとき、悪魔の騎士はアレフ目がけて斧を振りおろしていた。

「うわっ！」

転倒しながらかろうじて斧をかわした。と、光線は悪魔の騎士をかすめて洞窟の天井を直撃した。だが、悪魔の騎士はすかさず体勢を変えてまたアレフに斧を振りおろした。が、一瞬速く、横から、

「ターッ！」

ガルチラが悪魔の騎士目がけて剣を振りおろしていた。
「うっ！」
悪魔の騎士の顔が大きく歪んだ。胴からまっ黒な血がいきおいよく噴き出したのと、斧がアレフの顔をかすめて地面に突き刺さったのが同時だった。
「うぬぬっ！」
鋭い眼で悪魔の騎士はガルチラをにらみつけた。そのときだった。ドドドドッ——すさまじいいきおいで天井が落盤しはじめたのだ。アレフの呪法が天井を直撃したとき、すさまじい衝撃を与えたのだ。
「あーっ!?」
アレフとガルチラはあわてて逃げた。
だが、一歩逃げ遅れた悪魔の騎士の頭上をすさまじい落盤が襲い、悪魔の騎士の悲鳴がその落盤の音にむなしくかき消された。そして落盤はほかの落盤を誘発し、一瞬にして悪魔の騎士とドラゴンを埋め、洞窟をも埋めつくしたのだ。
十字路のローラ姫がいたところまで逃げたアレフとガルチラはあ然として見ていた。が、はっと我れにかえると、急いでその場から逃げた。
埋めつくされた土砂や岩の一部がかすかに動いた。と、そこから手が出たかと思うと、悪魔の騎士が最後の力を振りしぼってやっと腰まではい出た。だが、そこまでだった。

「うぬぬぬっ――」
悪魔の騎士は悔しそうに顔を歪め、力尽きてその場に倒れたのだ。
アレフたちは必死に洞窟を奥へ奥へと逃げていた。と、
「あっ」
ローラ姫が、つまづいて転んだ。
「大丈夫!?」
あわててアレフは抱き起こした。
ローラ姫は痛そうに足を押さえた。裸足だったのだ。足の裏の傷から血が流れていた。
「ちょっと待ってて!」
アレフは革袋から薬草を出して塗り、布を裂いて両足の傷を結わえた。ガルチラは自分の革袋から革のサンダルを出して、
「大きいが、はかないよりはましだ」
と、サンダルをローラ姫にはかせた。予備用に持ち歩いているのだ。いわば旅の知恵だ。
「すみません」
「さあ!」
アレフはローラ姫の前にしゃがんだ。
「でも――」

「遠慮なんかしないでっ」
すでにガルチラはたいまつをかざして歩き出している。アレフは無理やりローラ姫を背負ってガルチラのあとを追った。
どっちへむかっているか見当もつかないが、とにかく前へ前へと進んだ。三時間ほど進んだときだった。前方の暗闇にかすかな光が見えた。
「そ、そとだ!?」
ガルチラは思わず叫んだ。
ガルチラとアレフはその光にむかって足を速めた。光がだんだん大きくなった。やはりそとのあかりだった。
「やった!」
アレフたちは喜び勇んでそとに出ると、そこは海に面した岬の大きな岩場だった。空はどんよりと曇り、いまにも日が暮れようとしていた。強い風がたえまなく海上から吹きつける。海峡の対岸には黒々とした陸地が見えた。
「こ、ここは!?」
「リムルダールの島の岬だ」
と、ガルチラがいった。

それから一時間ほどして――。
洞窟にもどってきた影の騎士は、落盤に埋もれて倒れている悪魔の騎士の無残な姿を見て愕然となった。悪魔の騎士の体はすでに錆だらけになっていた。
「おい、どうした⁉　しっかりしろっ⁉」
悪魔の騎士をはげしく揺すった。と、
「うっ――」
悪魔の騎士はうめき声をあげて、かすかに目をあけた。
「ま、間違いなかった――あ、あの娘は――ロ、ローラ姫だ――」
「なにっ⁉」
「き、貴殿が――乳母を――が、崖の上から斬り――落としたとき――ロ、ローラ姫の――首飾りの石が光って――ローラ姫とともに、き、消えた――のだそうだ――」
「なにっ⁉　き、消えた⁉」
「もともと――その石は――ロトが妖精から授かった――も、もの――とか――」
それだけいうと、悪魔の騎士の首がもげて、ごろりと地面に転がり落ちた。
「悪魔殿！」
と、見る見るうちに悪魔の騎士の首や胴体が崩れはじめ、やがて粉々になって単なる鉱石の粉になってしまった。

5　影の騎士

岬の岩場を出発したアレフたちは、海岸段丘に広がる草原の腰まである深い枯れ草をかきわけながら、西へむかっていた。アレフはずっとローラ姫を背負ったままだった。
すでに日はとっぷりと暮れ、横なぐりの冷たい冬の風が容赦なく吹きつけている。風になびく枯れ草の草原はまるで荒れた海のように波打っていた。
ガルチラの記憶によれば、あと三時間も進めば深い森があるという。その森の足場のいいところで野宿することに決めたのだ。アレフたちはまずリムルダール島のほぼ中央にあるリムルダールの町に行くことにしたのだ。
「寒くない？」
アレフは背中のローラ姫にたずねた。
「ええ。それよりアレフの方こそ寒くありませんか。マント借りたままですから――」
「大丈夫〳〵。こんな寒さには慣れてるから」
と、いった矢先、一段と強い風が吹きぬけて行った。とたんにアレフは大きなくしゃみをし、ガルチラとローラ姫は思わず吹き出した。そのときだった。ゴォォォ――というぶきみな音が風上から聞こえてきたのは。

「あーっ⁉」

風上を見てアレフたちは驚いた。

草原がいつの間にかまっ赤な炎をあげて燃えていたのだ。その炎が風に煽られてすさまじいいきおいで横一列になって津波のようにこっちにむかって走ってくるのだ。そして、炎の玉もどんどん飛火してあたりが燃えた。

アレフたちは海がわの崖にむかって必死に逃げた。その方向しか逃げ道がないのだ。炎の速度はすごかった。かろうじて崖の広い岩場に逃げこんだとき、すでに背中まで追ってきていた。岩場をとり囲むように一面火の海になった。

アレフとガルチラは肩で大きく息をしながらあ然として燃えあがる炎を見た。当分は消えそうもなかった。そして、風に煽られて炎の玉がどんどん飛んでくる。と、アレフとガルチラは、何者かの気配を感じてはっと振りむいて、

「あっ⁉」

すばやく剣を身がまえた。敵の顔を見てローラ姫もはっと顔色を変えて脅えた。

いつの間にか九体の黒影の騎士団が待ちかまえていて、後方の一段高い岩に影の騎士が立っていたのだ。

「くそっ！　影の騎士めっ！」

アレフは剣をにぎり変えた。

黒影の騎士団が草原に火をつけて、この岩場におびき寄せたのだ。影の騎士はおそろしい眼でアレフをにらみつけた。
「悪魔の騎士の敵(かたき)を討たせてもらおう！　そして、ローラ姫の命をもなっ！」
「どうしてローラ姫をさらったんだ!?」
「貴様なぞに答える必要はないっ！」
影の騎士は吐き捨てるようにいった。
影の騎士はアレフガルド北東部の山岳地帯でアレフを襲ったが、激流(げきりゅう)にのまれたアレフを発見できなかった。そのとき、もし生きているなら、それほどの生命力があるなら、ひょっとしたら真のロトの血をひく者かも知れない――と、ふとそう思ったのだ。同時に、『勇者ロトの血をひく者が王女の愛を得るとき、そのとき陛下をも倒す力を持つ』と竜王に告げたザルトータンの言葉も思い出したのだ。
そこで影の騎士は万一に備えて、アレフガルド中の十五歳になる娘を片っ端から調べ、そのなかで一番怪(あや)しいとにらんだセシールをら致したのだ。
もし、ザルトータンの言葉が本当なら、そしてセシールが真のローラ姫なら、セシールの前にきっとロトの血をひく者が現れるに違いない。そうすれば十六年前ローラ姫の死骸(しがい)を発見できなかった謎(なぞ)が解明できるかも知れない、と考えたのだ。悪魔の騎士同様、影の騎士もまたどうしても十六年前の真相を知りたかったのだ。だが、

「真のローラ姫と知った以上、生かしてはおけぬっ！」
影の騎士が叫ぶと、騎士たちはそれが合図かのように疾風のように三人のまわりをまわりはじめた。前にアレフが襲われたときと同じ攪乱戦法だ。騎士たちの数が二〇体にも三〇体にも見える。その動きがさらに速くなった。
「く、くそっ！」
「アレフ！　火を背中にしろ！」
ガルチラがそう叫ぶと、騎士たちに斬りかかった。騎士たちもいっせいに襲いかかった。アレフはローラ姫をかばいながら攻撃をかわして、火を背中にした。つづいてガルチラもアレフの横に飛んできた。
背中が焼けるように熱い。だが、これならうしろからの攻撃を気にしなくてすむ。騎士たちは躊躇して動きをとめた。歯がゆさに影の騎士の口もとが震えた。
「ええいっ、なにをもたもたしておるっ！」
影の騎士の一喝に、いっせいに騎士たちが襲いかかった。
アレフとガルチラは必死に応戦した。アレフたちが火の海を背にしたので、皮肉なことに騎士たちが得意とする疾風のような敏速な攻撃ができないのだ。攻撃力が半減しているのが幸いした。
ガルチラの剣が一体の騎士を斬り倒し、つづいてアレフも一体を斬り倒した。と、その二体が

まっ黒な血を噴き出しながら火の海に落ち、いきおいよく炎とともに燃えあがった。そして、無数の黒焦げの破片になると、やがて細かな灰になって風に消えた。と、

「キャーッ！」

ローラ姫の悲鳴がとどろいた。

一体の騎士がガルチラを羽交いじめにし、もう一体がローラ姫に襲いかかった。が、つぎの瞬間、

「たーっ！」

宙に大きく跳んだアレフが襲いかかった一体の首をはね、着地すると体勢をかえて、羽交いじめにしている一体を斬り倒した。

「大丈夫か⁉」

「ええ」

アレフはローラ姫をかばいながら身がまえた。その間に、ガルチラは二体の騎士を斬り倒した。と、残った三体の騎士はいっせいに襲いかかった。アレフとガルチラはすばやく身をかわして一体ずつを斬り倒すと、かえす剣で同時に残った一体を左右から突き刺した。三体の騎士は無残な姿で火の海に消えた。

「うぬぬっ！」

さすがの影の騎士も顔色を変えた。

残るは影の騎士だけだ。アレフとガルチラはすばやく影の騎士の前に移動した。二人とも呼吸が乱れ、肩で大きく息をしていた。アレフは首飾りをつかんで呪法(じゅほう)をかけた。と、拳(こぶし)をつつんだ光が一本の光線になって影の騎士を直撃した。光は影の騎士の全身を稲光(いなびかり)のように走った。だが、呪法は効果がなかった。

「ふっ。そんなものなぞこのわしにはきかぬわっ！」

喋(しゃべ)っている間にガルチラがいきおいよく突進して斬りかかった。だが、影の騎士は疾風(はやて)のようにすばやく宙に跳んで消えた。

「あっ⁉」

アレフとガルチラは一瞬影の騎士を見失った。と、

「きゃっ！」

と、ローラ姫の悲鳴(ひめい)がした。

影の騎士がローラ姫を押さえて剣を振りかざしていた。そして、にやりと残忍(ざんにん)な笑いを浮かべるとローラ姫ののどもと目がけて剣をおろした。だが、そのほんの一瞬速くガルチラが投げた短剣が影の騎士の左眼に突き刺さったのだ。影の騎士の剣の刃先がローラ姫の白い肌の直前でとまった。

「うわあああっ！」

影の騎士はすさまじい悲鳴をあげてのけぞった。

と、すかさずアレフが斬りかかった。が、影の騎士はすばやく宙に跳んだ。その動きを読んだガルチラは着地した影の騎士に剣を振りおろした。しかし影の騎士はまた身をかわした、と思ったときだった。宙に跳んでいたアレフが思いっきり剣を振りおろした。

「たーっ！」

「うっ——！」

影の騎士の顔が大きく歪み、肩口からまっ黒な血が噴き出した。

「うぬぬぬっ！」

影の騎士はアレフに襲いかかった。

だが、横からガルチラが斬りかかり、また胸から血が噴き出した。それでも影の騎士は執拗にアレフに襲いかかった。ガルチラがうしろにまわって影の騎士をめった斬りにした。つぎつぎに血が噴き出した。それでもなおすさまじい執念を燃やしてアレフにむかってきた。ガルチラには見向きもしなかった。そして、最後の力をこめて、

「うおおおっ！」

剣を振りかざした。が、一瞬はやくアレフの剣が影の騎士の心臓をひと突きにした。

「ううっ！」

影の騎士はさらに大きく顔を歪めて、すさまじい形相になった。カッと見開いたその眼はぞっとするような恨みをこめてアレフをにらみつけていた。が、そのままよろよろっと前に出ると、

崩(くず)れるように火の海に落ちて炎とともにいきおいよく燃えあがった。

　肩で大きく息をしながら茫然(ぼうぜん)と見ていたアレフとガルチラは、そのまま力がぬけたようにその場に座りこんでしまった。ほっとしたらどっと疲れが襲(おそ)ってきたのだ。二人とも汗でびっしょりだった。声を出す気力もなかった。剣をにぎるアレフの手にはほとんど握力(あくりょく)が残っていなかった。

　やがて、一帯の火は消え、草原は黒々とした焦土(しょうど)に変わっていた。影の騎士の姿はどこにもなかった。灰になって風とともに消えてしまったのだ。

　しばらく休むと、アレフはまたローラ姫を背負い、ガルチラとともに西へむかって歩き出した。

　と、この岩場から遠くはなれた岬(みさき)の岩の上からアレフたちをじっとぶきみな眼で見ている男がいた。魔界童子だった。

　魔界童子から報告を受けた大魔道ザルトータンもさすがに驚(おどろ)いた。そして、竜王の部屋へ報告におもむいた。

　竜王も顔色を変えて驚くと、

「さんざん待たした揚句(あげく)にこのザマとはなっ！　魔将ともあろう者がっ！」

　と、吐き捨てた。その眼は怒りにぎらぎら燃えていた。勇者ロトの血をひく者に対してよりも魔将たちのだらしなさに腹を立てているのがザルトータンにはよくわかった。

「しかしながら陛下――」
ザルトータンがいった。
「ご安心ください。魔界童子がきっと陛下のお心を鎮めてくれるでしょう」
「魔界童子がっ⁉」
「はっ。いままでわたしの期待を裏切ったことは一度としてありませぬ。やつならかならずや――」
ザルトータンはじっと竜王を見た。竜王もまたザルトータンの魂胆をさぐるようにじっと見た。
「だれでもかまわぬっ！　そちに任したっ！」
「はっ」
「ただし！」
竜王はおそろしい眼でにらみつけた。
「失敗は許さぬっ！」

第六章　愛・ロトのしるし

影の騎士を倒してから八日目の昼——。
アレフたち三人は、三方をけわしい山脈に囲まれたリムルダール盆地の中央にあるリムルダール湖に出た。その湖のほぼ中央にリムルダールの町並が浮かんで見えた。ローラ姫の足の傷も完治し、ひとりで歩けるようになっていた。
リムルダールの町はもともとリムルダール湖に突出した巨大な岩盤の島だったが、この特殊な地形を利用して城と城下が築かれたのだ。敵の攻撃から城を守るには非常に有利な地形だったからだ。その後、この町はリムルダール島の交易や文化の中心として発展してきた。
二〇〇年前の天変地異後、青く澄んだ湖は瞬時にして汚染され、灰色の湖に姿を変えた。だが、この特殊な地形が幸いし、押し寄せた竜王配下の魔物たちが町を攻めあぐんだのだ。また、同じような立地条件が縁で姉妹都市となった南の国のベラヌールの町からの援軍が間に合ったことも町の人々にとっては幸運だった。
三人は、島へつながる長い吊り橋をわたり、城門前の跳ね橋をわたって町へ入った。

1 霊媒（れいばい）

「聖なるほこら？」
洋服屋の四〇半（なか）ばの主人は、靴屋の主人と同じように首をかしげた。
町に入ったアレフたち三人は、まず城門のそばで靴屋を見つけてローラ姫の靴を買った。そのあと、同じ表通りにあるこの洋服屋でローラ姫の洋服と旅用の赤いマントを買い、聖なるほこらがどこにあるかたずねたのだ。野ばらの刺繡（ししゅう）のある薄桃色の洋服は、ローラ姫の美しさをいっそうひき立てていた。
「聞いたことがありませんなあ」
主人は申しわけなさそうにいうと、
「そうだ。町の長老に聞いたらどうです。リムルダールのことならたいていのことは知ってるはずですからね」
と、地図を描いて長老の家を教えてくれた。
洋服屋を出たアレフたちは、地図を頼りに、いまでは石垣しか残っていない城跡（しろあと）へむかって、表通りを歩いた。そして、町の中程で交差している道を左に折れて、町の南端の湖に面した瀟洒（しょうしゃ）な長老の家を訪ねた。

案内された部屋の窓からは湖とそのむこうにそびえる雪をかぶったリムルダール山脈が見えた。
「うむ――」
一〇〇歳を越えたばかりの長老は、アレフがたずねてきたわけを聞くと、腕を組んで唸った。
「残念じゃが聞いたことがないのぉ」
「でもたしかにリムルダールにあるって聞いてきたんです！」
「うむ――」
長老はまた唸った。と、
「そうじゃ。それならいっそ昔の人に聞いてみたらどうじゃな？」
「昔の人!?」
「この町に、降霊術を行う霊媒のばあさんがおる」
「霊媒？」
「死んだ人の霊を呼ぶことができるんじゃ。二〇〇年ぐらい前までの人の霊ならな」
アレフたちは思わず顔を見合わせた。
長老は、町の表通りを横切って、町の北の城壁のそばにある洞窟へ案内してくれた。
湿った洞窟の階段をおりて、奥の木の扉をあけると、そこが降霊術の老婆の住まいになっていた。
まっ暗な洞窟の正面に立派な祭壇があり、その前の炉で火が赤々と燃えていた。
「聖なるほこらじゃと!?」

長老から話を聞いた老婆は、じっと鋭い目でアレフを見つめた。
「ならば、わしのご先祖の霊に聞いてみよう。わしの先祖はカリカドールで代々霊媒を生業としておったんじゃ」
「カリカドール⁉」
「この島の西の岬にあった村じゃ。竜王に支配されるまではな。かつて岬はリムルダール一の美しい景観を誇り、村人たちの自慢だったそうじゃ。その岬の突端に立って、勇者ロトが虹のしずくで七色の橋をかけ、あっという間に魔の島へわたったという伝説が残っておるんじゃ」
「虹のしずく⁉」
アレフは思わずガルチラと顔を見合わせた。『ロトのしるし』を見つけたら、聖なるほこらで、竜王の島にわたることができる『虹のしずく』を、おのずと手に入れることができる――と、ドムドーラでガライがいった言葉を思い出したからだ。
「そのためかどうかわからんが、二〇〇〇年前まではその岬から精霊ルビスの神殿があるイシュタルへわたる大きな橋がかかっておったんじゃそうだ」
といって右手を差し出した。
「五〇〇〇ゴールドじゃ」
「えっ⁉　ご、五〇〇〇⁉」
アレフはあまりの高さに驚いた。

「わしはその辺の三流の占い師なんかとは違うんじゃよ」
「でも、五〇〇〇は！」
「いやならいいんじゃよ」
「わ、わかったよ」
しぶしぶアレフが革袋から出すと、老婆はひったくるように取った。そして、おもむろに祭壇に手を合わせ、
「ヤーッ！」
声を張りあげて気合をいれると、全身に力をこめながら両手を大きくかざしてなにやら呪文を唱えた。
老婆は、さらにはげしく両手を振りかざし熱心に呪文を唱えつづけた。いつの間にか老婆の額に玉のような汗が光っていた。と、老婆の黒い目がピカッとまっ赤な光をはなつと、その眼球がまっ赤になった。
カタッ、カタッ、カタッ——扉のノブがひとりでに揺れ動いた。ローラ姫は脅えて、すがるようにアレフの腕を強くつかんだ。と、つぎの瞬間、ガタガタガタッ——部屋のなかの物がはげしく揺れ出した。
「きゃっ!?」
思わずローラ姫はアレフの背中にしがみついた。

祭壇が、燭台が、テーブルが、扉が、すさまじい音を立ててまるで地震のときのようにはげしく揺れた。
ピカーッ！　部屋のなかに閃光が走った。と、雷に打たれたように、老婆の体が硬直した。
「霊がのり移ったんじゃ！」
長老は、アレフの耳もとで囁いた。
硬直した老婆ははげしく震えながら両手をかざしてアレフを鋭い目でにらみつけると、
「おまえかーっ⁉　わしを呼んだのはーっ⁉」
いきなり叫んだ。声は完全に男の声に変わっていた。がらがらにかすれた声だ。
「はい！」
アレフは大声でたずねた。
「聖なるほこらがどこにあるか知ってますかっ⁉」
「聖なるほこらじゃとーっ⁉」
「はいっ！」
「それならかつて聞いたことがあるーっ！　たしかっ、リムルダールの最南端にある島だとなーっ！」
「最南端⁉」
「そうじゃーっ！　太陽と雨が合わさるほこらだそうじゃーっ！」

「太陽と雨――!? そ、そうだ！ あなたは竜王を見たことがありますかっ!?」
竜王のおそろしさはたくさん聞かされたが、実際に竜王の姿を見たことのある人はいま生きていないのだ。二〇〇年前に一度姿を現したきり、アレフガルドの人々の前には姿を現していないからだ。
「竜王ーじゃとーっ!?」
「はいっ！」
「ゴォォォォ！」
と、突然、老婆は天をあおいで叫んだ。
「海が走るーっ！」
「海が、走る？」
「そうじゃーっ！ 大地震で神殿へわたる橋が崩壊したあとじゃーっ！ カリカドールの村が大津波に襲われて消滅したあとのことじゃーっ！ わしら生き残った村の男どもが竜王討伐に駆り出されて軍船で沖に出たんじゃーっ！ じゃが、地響きのような音を立てて、海が走っておったーっ！ そのはげしい潮の流れの水平線で、神殿のあるあの島が大きく動いたんじゃーっ！ すると、生臭い血の匂いの風が、島から吹いてきたんじゃーっ！」
「血の匂いの風!?」
「ひとたびその風に当たれば、いくら洗い落とそうとしてもぬけそうもない、猛烈な血の匂いじ

やーっ！　島はどんよりした黒い雲と濃霧につつまれておったーっ！　たえず稲光(いなびかり)がしておったーっ！」
「そ、それでっ⁉」
「そのとき、竜王が現れたんじゃーっ！　巨大な竜王のそらおそろしい顔が空いっぱいに現れてなーっ！　ぐっはっははは！　と、背筋(せすじ)の凍(こお)るようなぶきみな笑い声をあげたんじゃーっ！　じゃがそのときじゃったーっ！　わしらの船が大波を被(かぶ)って沈んでしまったんじゃーっ！」
と、いきなり老婆は狂(くる)ったようにはげしく髪を振り乱しながら、
「うぉぉぉっ！」
と、絶叫すると、赤かった眼球がもとの黒にかわった。と、老婆はそのままばったりと床に倒れてしまった。霊は、海上で戦死した霊だったのだ。
洞窟(どうくつ)の部屋にふたたび静寂(せいじゃく)がもどった。
霊が消えたのだ。やがて、汗をびっしょりかいた老婆が、床から身を起こして、苦しそうにはげしく肩で息をした。魂(たましい)のぬけがらのような顔をしていた。
アレフたちはあ然として顔を見合わせた。

2　贈り物

帳場から顔を出した五〇半ばの小太りの女主人にアレフはたずねた。
「できれば三人一緒の部屋がいいんだけど」
老婆の洞窟を出たアレフたちは、表通りで長老に礼をいって別れると、長老が教えてくれた町に一軒しかないこの小さな古い宿へやってきたのだ。すでに日が暮れかけていた。
「すまんねえ。あいにく二人部屋ばかりなんだよ」
女主人が帳場から鍵を二個持って出てきた。
「アレフ、おまえ、姫と一緒の部屋に泊まれ」
ガルチラはそういって女主人から部屋の鍵を受け取った。
「えっ!? だ、だって!」
アレフは思わずローラ姫を見た。ローラ姫は黙って目をふせた。
「姫をひとりで部屋に置くことはできないだろ?」
「そりゃ、そうだけど。で、でも」
と、女主人は歯のぬけた口をあけ、卑猥な笑いを浮かべてガルチラにささやいた。
「兄さん。かわいいパフパフ娘がおるんじゃが、安くしとくよ」

だが、ガルチラは無視してさっさと階段を駆けのぼった。
「あっ、突きあたりだよ、部屋は」
あわてて女主人はガルチラに声をかけると、
「兄さんのとなりの部屋じゃ。ほんじゅごゆっくり。ひっひひ」
卑猥な笑いを浮かべながらアレフに鍵をわたして帳場に消えた。
「あ、あの——」
アレフはうろたえていた。ローラ姫と二人っきりで同じ部屋に泊まるとなると、妙に意識してしまうのだ。と、そのとき、はっとあることを思い出した。
「そ、そうだ。あの、悪いけど、先に部屋に行っててくれないか」
「え?」
「ちょっとね、用を思いだしたんだ」
そういい残すとアレフはローラ姫に鍵をわたして飛び出して行った。
リムルダールの町へ行ったら、ローラ姫に誕生日の贈り物をしようと、リムルダールにくる途中アレフは考えていたのだ。
アレフは小間物屋をさがして飛びこむと、あれこれ迷ったすえ、花模様の装飾がほどこしてある銀の腕輪を買い、ローラ姫の喜ぶ顔を想像しながら喜々として宿にもどった。
だが、ローラ姫は部屋にいなかった。部屋に入った気配もなかった。アレフはとなりのガルチ

ラの部屋のドアをあけた。ガルチラはベッドに座り壁にもたれながら横笛を磨いていた。

「あれ、ローラ姫は!?」

ガルチラは首を横に振った。

「おかしいなあ!? どこ行ったんだろ!? ちょっと買い物に行ってきただけなのに」

と、いってさっと顔色が変わった。ガルチラの顔色が変わったのも同時だった。もしや竜王の手下が――と、思ったのだ。

「姫を一人にしておいたのか!?」

と、いいながらガルチラはすばやく部屋を飛び出した。あわててアレフも追って階段をおりた。まず宿の女主人に聞いてみようと思ったのだ。だが、階段をおりて、

「あっ!?」

ちょうどローラ姫が帰ってきて、玄関を入ったところだった。ほっとして、アレフとガルチラは顔を見合わせた。

「だめじゃない、勝手に出て行っちゃ。心配するじゃないか。竜王の手下がどこでねらっているかわからないんだからね」

「すみません――」

と、ローラ姫はうつむいた。そのとき、アレフはローラ姫の美しい亜麻色の長い髪がばっさり切り落とされて短くなっているのに気づいた。

「ど、どうしたの、その髪!?」
「似合いませんか?」
ローラ姫は、短くなった自分の髪に触ってみた。
「い、いや、そんなことはないけど」
「またすぐのびますわ。それに、旅をするのに短い方が楽ですから」
と、ほほえんだ。
そのとき、奥の廊下から女主人が顔を出して、
「お風呂が沸いたよ。さ、お嬢さんからどうぞ。この奥の突きあたりだからね」
と、廊下の奥を指差した。
湯あがりのローラ姫は、アレフがいままで見たことがない別の美しさを漂わせていた。ほんのり桜色した、艶やかなきめの細かい肌。亜麻色の濡れた髪。長くて白いうなじ。アレフはどぎまぎしながら、タオルで髪を拭くローラ姫の横顔を盗み見した。
「ローラ姫――」
「はい?」
ローラ姫は、顔をあげてほほえんだ。
「あ、あの――こ、これ」
小間物屋で買って来た銀の腕輪をアレフは差し出した。

「遅れたけど、誕生日おめでとう」
「まあ！」
ローラ姫は、うれしそうに目を輝かせた。
「さっき、買って来たんだよ」
「ありがとうございます」
そういって、ローラ姫は左手首に腕輪をはめた。
「とてもきれいな花模様──」
「よかった。気にいってくれて。なにがいいかさんざん迷ったんだけどさ」
「あの──」
ローラ姫は、澄んだ瞳でアレフをまっすぐ見た。
「あたしもあるんです。贈り物」
「えっ⁉」
「十六歳の誕生日の」
ローラ姫も、贈り物を手わたした。
「おめでとうございます」
「こ、これは⁉」
硬貨ほどの大きさの、翡翠(ひすい)でできた美しい鳳凰(ほうおう)の彫物(ほりもの)だった。まったく予期していなかったの

で、アレフはなんとお礼をいっていいのかわからなかった。
「お守りにしてください。それを持っていると願いごとが叶うかなう、って昔からこの町でいい伝えられているんだそうです」
「ありがとう！」
そういって、はっとなった。
ま、まさか!?——アレフは思わず短くなったローラ姫の亜麻色あまいろの髪の毛を見た。
「ま、まさか、その髪の毛を売ってこのお守りを!?」
ローラ姫は、黙ってうなずいた。
「そ、そんなことしてまで！」
「気にしなくていいんです。あたし、着の身着のままさらわれたから——だから——」
と、悪戯いたずらっぽく笑った。お金がなかったのだ。
「ロ、ローラ姫——！」
アレフガルドでは、女の髪の毛は命のつぎに大事だといわれている。その大事な髪の毛をぼくのために——そう思うと、アレフの胸が熱くなった。
「ぼく、これ一生大事にするよ！」
鳳凰の彫物をぐっとにぎりしめて、熱い目でローラ姫を見つめた。
「あたしも——」

ローラ姫も澄んだ美しい瞳で見つめた。
そのときだった。いきなりガルチラがドアをあけて顔を出したのは。ローラ姫が風呂からあがったら食事に行く約束をしていたのだ。
「あっ!?」
アレフとローラ姫は、はじかれたように互いにそっぽをむいて、まっ赤になってうつむいた。

3　砂の城塁

「おかしいなぁ――」
ガルチラは、立ちどまってまた溜息をついた。朝からこれで六回目、いやもっとかもしれない。
どっちを見ても、荒涼とした砂山ばかりだ。なだらかな砂山の砂漠が海のようにつづいている。ときおり冷たい冬の風が砂塵を巻きあげながら吹きぬけて行く。西の砂山にはもうじき太陽が落ちようとしていた。上空では、あの大鷲が大きな翼を広げてゆっくり旋回している。
リムルダールの町を出て五日後、アレフたちはリムルダール島の最南端にある聖なるほこらにむかって、まっすぐ南下していたのだ。そして、この砂山の砂漠にはいってからすでに二日が過ぎていた。
「前きたときは、たしか平原だった――」

ガルチラはまた溜息をつき、南天にやっと顔を出したばかりの南極星を見た。アレフとローラ姫も不安そうに南極星を見た。

「方角は間違いない。たしかに南へむかっている――」

「気にすることないよ、ガルチラ。食料だってさ、いっぱい買いこんでるんだし、すこしぐらい迷ったって、どうってことないって。とにかくさ、もうちょっと歩こうぜ。ここじゃ野宿だって満足にできない」

三人は気を取りなおしてまた歩き出した。

「それにしても、気に入らねえ――」

ガルチラはまたぼやいた。

ガルチラにしては珍しいことだった。いままで一緒に旅をしていて一度もこんなことはなかったのだ。ガルチラがそんなことをいうと、さすがのアレフも不安になる。だが、顔に出すとよけいローラ姫を不安にさせる。

「大丈夫、〳〵！　そのうちこんな砂漠なんかぬけるさ！　どんどん行こうぜ！」

アレフはわざと元気よく笑った。

三人はさらに一時間ばかり歩きつづけた。東の空にはぶきみな下弦の月が出ている。大きな砂山をのぼりきったときだった。

「あっ⁉」

思わず三人は声をあげた。
前方の砂山に城塁のようなぶきみな建物が立っていて、そこからほのかなあかりがもれていたのだ。
「あかりだ!?」
思わずそのあかりにむかってアレフが駆けだそうとすると、
「待て！」
すばやくガルチラがアレフの手をつかんでとめた。
「こんな砂漠に人間がいるわけがない。そっと近づいて様子を見るんだ」
「わ、わかった」
三人はそっとそのあかりに近づいて行った。
城塁――なんとそれは砂でできていた。城門の奥からあかりがもれている。だが、ぶきみなほど静まりかえっていた。ときおり吹きぬけて行く冷たい風の音しか聞こえなかった。
三人は様子をうかがいながら慎重に城門をくぐり、なかに入った。なかは異様なほど湿っていた。もっとも、これぐらい湿気がなければ、あっけなく崩れ落ちてしまうだろう。
通路の両側には、大きな部屋のような空間がいくつもあった。通路といっても、普通の町の路地ぐらいの幅のある広い通路だ。そして、通路の角という角には大きな燭台があってロウソクが燃えていた。遠くから見たあかりは、この燭台のあかりだったのだ。だが、どこにも人間の姿が

もれていた。三人はそっとなかをのぞいて、

「あっ!?」

と、思わず声をあげた。

まんなかに食卓があり、その上にあかりのついた燭台と三人分の肉料理が用意してあった。あたたかそうなスープからは湯気が立っている。

「だれが住んでるんだろう!?」

アレフは思わずローラ姫と顔を見合わせた。

「気に入らねえぜ――」

鋭い目でガルチラがつぶやいた。

「えっ!?」

「気に入らねえぜ！」

と、いうがはやいか、

「三人分の食事まで用意しやがって！」

と、いきなり剣を抜いて、食卓をまっ二つにたたき斬った。

「だれだ!?　ふざけたまねしやがったやつはっ!?」

と、砂の床に落ちたスープや肉料理が、ブクブクブク——と、赤や黄色のぶきみな泡を噴いたかと思うと、いきおいよくひとつになって噴射しながら巨大な球体の怪獣に変身した。

「うわっ！」

アレフは、思わずローラ姫をかばって跳びのいた。

中心にまっ赤な目玉があり、そこから無数のにゅるにゅるした太い髪の毛が出ている。その髪の毛がなんとみんな蛇なのだ。メドーサボールという、竜王の魔力によって無数の蛇が合体変身した魔物だ。メドーサボールは容赦なく襲いかかった。

ガルチラは攻撃をかわして斬りかかった。だが、メドーサボールは身軽で敏速だった。ガルチラの攻撃をかわして襲いかかった。アレフは首飾りをつかんで呪法をかけた。と、拳から発した光線がメドーサボールの大きな目玉を直撃した。と、とたんにメドーサボールの目はカッと見開いたまま動かなくなり、蛇たちもぐったりした。

すかさずガルチラが斬りかかった。紫の血しぶきがいきおいよく飛んだ。つづいてアレフが剣を振りおろした。ガルチラとアレフはかわるがわる斬りかかった。

と、粉々に斬り刻まれて砂の床に散ったメドーサボールは、どろどろの液体になって砂に吸いこまれて消えた。と、そのときだった。いきなり背後から、

「ふっふふふふ」

と、ぶきみな笑い声がした。

驚いて見ると、いつの間にか魔界童子が立っていた。
「あっ!? 魔界童子!?」
「やはりおまえの仕業かっ!」
ガルチラは、鋭い目でにらみつけて、剣をかまえた。
「今日こそ、敵を討ってやるっ!」
「はっははは」
魔界童子は、ガルチラを無視して笑うと、鋭い目でアレフをにらんだ。
「ロトの血をひく者よ! いままでは黙って見逃してきたが、ここより先へは一歩も行かせないっ!」
「冗談じゃねえ!」
アレフが斬りかかろうとすると、
「待てっ!」
すかさずガルチラがとめた。
「こいつはおれが殺る! おまえは姫を連れて逃げろ!」
「でも! そんなことは――!」
「こいつはおれが殺らなきゃ気がすまねえ! おまえにはもっと大事な役目があるはずだ! 竜王を倒す大事な使命がな!」

「はっははは！　はっははは！」
突然、魔界童子はかん高い笑い声をあげた。そして、また鋭い目でアレフをにらみつけた。
「おまえごときにそんなことができるわけがない！　その前にここで死んでもらう！」
と、印を結ぶと、ピカッ！　赤い目が光った。と、指先からすさまじい閃光が発してあたり一面がまっ白い光につつまれた。
「うわあっ！」
一瞬目がくらんだ。
「死ぬのはおまえだっ！」
ガルチラは体勢をなおして斬りかかった。だが、魔界童子はすばやく宙に跳んでかわした。
そのときだった。ドドドドドドッ――いきなりはげしい地響きがして、天井や壁にひびが走り、城塁が崩れはじめたのだ。
「はっははは！　砂に埋もれて死ぬがいい！　はっははは！」
「うわっ！　逃げろっ、ガルチラ！」
アレフはローラ姫の手を引いてあわてて出口にむかって逃げた。
だが、ガルチラは目にもとまらぬ速さで魔界童子に斬りかかった。と、魔界童子はまたかわして宙に浮き、
「はっははははは！」

笑いながら、すーっと姿が消えかけときだった。
「逃がすかっ！　逃がしてたまるかっ！」
すばやくガルチラが魔界童子の足をつかんだのだ。
「うっ⁉」
さっと魔界童子の顔色がかわった。消えかけた姿がもとにもどった。
「てめえなんか地獄の底までひきずり落としてやるーっ！」
ガルチラはおそろしい目でにらみつけ、さらに足をつかんだ手に渾身の力をこめた。
と、ズズズズズズッ！　城塁は怒濤のように崩れ落ちた。
「あーっ！」
すさまじい悲鳴があがった。
だが、それは魔界童子のものかガルチラのものか、定かではなかった。
ドドドドッ——と、はげしい地響きとともに、城塁は奥からどんどん崩れてくる。アレフとローラ姫は崩れ落ちる砂のなかを必死に逃げた。やっと出口が見えた。アレフはすばやくローラ姫をだきかかえて、
「ターッ！」
勢いよく頭から跳んだ。そのときだった。
ズズズズズーン‼

すさまじい地響きとともに、砂の城塁が空高く砂塵をあげながら一瞬にして崩壊した。ほとんど同時だった。アレフとローラ姫が出口のそとに吹き飛ばされて砂地にたたきつけられたのは。崩れ落ちたなかの風圧に吹き飛ばされたのだ。

アレフとローラ姫は、無残に崩壊した砂の城塁をあ然として見ていた。と、

「ガルチラーッ！」

アレフは思わず絶叫した。

「ガルチラーッ！」

が、あたりはうそのように静まり返っていた。残っているのはアレフとローラ姫の二人だけだった。冷たい風が音を立てて吹きぬけて行った。

「ガルチラ――」

アレフの頰をとめどなく涙が流れ落ちた。ローラ姫もまた同じだった。二人はしばらくその場から動こうとしなかった。

「くそーっ！」

はげしい怒りがアレフの胸の奥からこみあげてきた。

「くそーっ！　魔界童子めーっ！」

アレフは泣きながら両手で砂をつかんだ。

「くそーっ！　竜王めっ！」

全身をはげしく震わせながら、骨が砕けるのではないかと思うほどの力で砂をにぎりしめた。

「アレフ――」

ローラ姫は、やさしくアレフの肩に手をかけた。今してやれることはそれしかなかった。ただ黙っていることしか――。また、風が吹きぬけて行った。

しばらくして、アレフはやっと立ちあがった。そして、ぐっと拳で涙を拭き、唇を噛んで南天を見あげた。南極星は、ひときわ輝いていた。

アレフは、じっと南極星を見ると、その方角にむかって歩きはじめた――。

それから一時間あまりがすぎた――。

崩壊した城塁の一帯を強い風が吹き荒れていた。

と、その一帯の砂山が見る見るうちに姿を変え、あっという間に地肌がむきだしの荒涼とした平原になった。そして、城塁の崩壊したその地点に、いつの間にか魔界童子が姿を現していた。

その唇の端から、青黒い血がすーっと一滴流れ落ちた。

「ちっ」

魔界童子は、舌打ちをすると、いまいましそうに自分の足もとを見た。

地面から一本の手が出ていた。血の気の失せたどす黒い土色をしている。その手が、魔界童子の足首をぐっとつかんでいた。ガルチラの手だ。

「しつこいやつだ」
魔界童子が足をあげると、あっけなくガルチラの手が離れた。
ガルチラの手は、指をひろげたままむなしく風に揺れた。と、魔界童子は、力任せにその手を蹴った。そのときだった。シュッ！　空を斬るすさまじい音がした。
「うわーっ！」
とたんに、魔界童子は悲鳴をあげて両手で顔を押さえた。
大鷲だった。急降下した大鷲の嘴が、目にもとまらぬ速さで魔界童子の目を襲い去ったのだ。
「うわわわわっ！」
魔界童子は、さらに悲鳴をあげた。
その一〇本の指のすきまから、青黒い血がどくどく指を伝ってしたたり落ちた。両目をざっくりとえぐりとられたのだ。
と、ガルチラの手がぴくりと動いた。と、魔界童子の足もとの地面が、もこもこもこっと盛りあがって、勢いよくガルチラの体が宙に跳んだ。
ピカッ！　月光にガルチラの剣の刃が光った。つぎの瞬間だった。
「うわーっ！」
魔界童子のすさまじい悲鳴が、荒涼とした平原に響きわたった。
青黒い血がいきおいよく飛び散り、魔界童子の額がまっ二つに斬り裂かれていた。

ガルチラは、魔界童子の前に着地した。だが、ふらふらっとよろけて、かろうじて地面に突き刺した剣にもたれた。傷だらけのその顔は、手と同様血の気の失せたどす黒い土色をしていた。

また、音を立てて風が吹きぬけた。

魔界童子の体が紙きれのように無数にちぎれて風に飛んで消えて行った。

「や、やった――」

ガルチラは、やっとかすれた声でつぶやくと、そのまま地面にばったりと倒れた。

また、風が吹きぬけた。

だが、ガルチラは、ぴくりとも動かなかった――。

「魔界童子よっ！」

大魔道ザルトータンはまっ赤な水晶球にむかって叫んだ。だが、反応がなかった。ザルトータンの顔が青ざめた。

「も、もしや――」

と、不吉な予感がしたのだ。いつもは一回で反応するのが、今夜にかぎって三回目でも反応がないのだ。ザルトータンは肩で大きく深呼吸すると、心を落ち着かせてもう一度試みた。印を結んだ指先から光が発して水晶球にあたった。

「魔界童子よーっ！」

必死に腹の底から声をしぼり出した。
だが、水晶球はまったく反応しなかった。

4　聖なるほこら

「おぶってあげるよ」
アレフは、また心配そうにローラ姫を見た。
「大丈夫です。あまり痛くありませんから」
ローラ姫は、顔をあげてほほえむと、また足をひきずりながら歩き出した。
ローラ姫と二人っきりになってから、一日もたたないうちに、ローラ姫が両足の豆をつぶしてしまったのだ。それ以来、ずっと今日まで深い森のなかをアレフが背負ってきたのだが、急にローラ姫が、
「歩きます」
と、いい出したのだ。
「もう、だいぶよくなってますから」
そういって、アレフがとめるのも聞かず歩き出して、かれこれ三〇分になろうとしている。
寒いうえにゆっくり歩いているから汗をかくほどではないのだが、ローラ姫の額(ひたい)に汗がにじん

でいる。呼吸もかすかに乱れている。
魔界童子に襲われてから、すでに五日がたっていた。深い森にいれば、直接真冬の冷たい風に吹かれることがない。それだけが救いだった。革袋には干し肉などの保存食が残っているが、水筒の水は底をついていた。
「やっぱりおぶるよ」
見るに耐えられず、アレフはローラ姫の前にしゃがんだ。
「大丈夫です」
「まだ無理だよ、歩くのは！」
「でも――」
「遠慮するなよ」
アレフは無理やりローラ姫を背負って歩き出した。そのほうがやっぱり速い。
「すみません――」
ローラ姫は、かなしそうにいった。
「足手まといになってばかりで――」
「いや、悪いのぼくの方さ」
ガルチラと三人のときは、ローラ姫の足に負担をかけないように、ローラ姫の歩調に合わせて旅をつづけていたのだ。だが、魔界童子に襲われてからというもの、アレフの頭からガルチラの

ことが離れなかったのだ。ふとしたときに、ガルチラのことを思い出してしまうのだ。そのたびに魔界童子や竜王に対する怒りがこみあげてきた。気がつくと、ローラ姫にはかまわず自分の速度でどんどん歩いていたのだ。

ローラ姫は必死についてきた。だが、ローラ姫が遅れ出して、あっとなったときはすでに遅かった。ローラ姫の両足の豆がつぶれてしまっていたのだ。

「ごめんなさい――」

悲しそうにローラ姫はうつむいた。

「迷惑かけたくなかったから――」

だから、遅れまいとして必死にアレフについてきたのだ。ローラ姫は、けっしてアレフを責めようとはしなかった。そのやさしい気持ちと律儀さが、いじらしかった。

アレフがちゃんと気をつかって、ローラ姫の歩調に合わせて歩いてさえいれば、こんなことにならなかったのだ。

ぼくの責任だ――ローラ姫の足に薬草を塗りながら、アレフは自分のいたらなさを悔やんだ。ぼくは、頑丈な肉体を持った男だ。歩く足だって速い。旅にもなれている。かよわいローラ姫とは全然違うのだ。もっとやさしくしなければ――そう思ったのだ。そして、ローラ姫を守るのは自分しかいないのだ、と自分にいい聞かせたのだった。

一時間ばかりして、どこか地形のいいところでひと休みしようと思っていたときだった。急に

目の前に谷がひらけた。谷底にはせせらぎが流れていた。
「み、水だ！」
アレフは、ローラ姫を背負ったまま、喜び勇んで谷におりた。
きれいな澄んだ水だった。ローラ姫は、すかさずその水をすくった。
「ちょっと待って！」
あわててアレフはとめて、せせらぎを調べた。
「あった！」
せせらぎのなかに、小さな白い花が咲いていた。
「まあ、きれいな花――」
「水白花（みずしろばな）っていうんだ」
「水白花？」
「水をのむときは、まずこの花が咲いているかどうかを調べるんだ。咲いていたらのめる。この花は、竜王の毒に汚染された水には生息（せいそく）しないからね」
「まあ、くわしいんですね」
ローラ姫は、頼もしそうにほほえんだ。
「いや、これは――」
アレフは、顔を曇らせた。

「ガルチラの受け売りなんだ。ぼくがはじめてガルチラと会ったとき、教えてくれたんだ――」
「そう。そうでしたの――」
ローラ姫もガルチラのことを思い出して目をふせた。
一息つくと、アレフはローラ姫の足に薬草を塗(ぬ)りかえてやり、またローラ姫を背負って歩き出した。
それから三日もすると、ローラ姫の足はだいぶ回復してきていた。一日のうち半分は、背負わなくても歩けるようになった。
そして、魔界童子に襲われてからちょうど八日目の朝、森をぬけた二人は、
「あっ!?」
と、思わず目の前の風景に目を見張った。
真冬だというのに、青々とした海が広がっていた。その青い海のむこうに、美しい緑の島がある。あの島に聖なるほこらがあるのだ。
ついにここまできたのだ――そう思うとアレフの胸の奥から熱いものがこみあげてきた。ラダトームを旅立ってから、ちょうど一年がたっていた。
波打ちぎわまで元気に駆(か)けおりると、
「おーいっ!」
アレフは思いきり島にむかって叫んだ。

海上からさわやかな潮風が吹いてくる。アレフとローラ姫は、深呼吸してその潮風を思いっきり吸いこんだ。海がこんなに青くておだやかだということを、アレフはいま初めて知った。アレフの知っている海といえば、灰色の荒れ狂う海や、潮の流れのはげしい海ばかりだからだ。
ちょうど干潮時で幸運だった。海水から砂嘴が出ていて、島までつながっていた。二人はさっそく砂嘴にむかった。そして、二時間かかって島にわたると、聖なるほこらをさがして、また歩きつづけたのだ。島には魔物の気配すらなかった。冷たい風もなかった。やわらかな温かい日差しだけが降りそそいでいた。
島にわたって二日目の昼すぎだった。島のほぼ中央にあるけわしい峠を越えて、
「あっ！」
ぱっと二人の顔が輝いた。
足もとに緑豊かな広大な盆地が広がっていた。そのほぼ中央に、森にかこまれた岩山があった。雲の切れ間から差しこんだやわらかな光が、まるでなにかを啓示するかのように、その岩山を照らしていた。
「もしかしたらあの岩山は⁉」
二人は顔を見合わせると、峠を駆けおりて岩山にむかった。
岩山の前に、きれいな泉が湧いていた。そのまわりには、美しい野の花が咲き乱れ、野性のりんごや野いちごなどがたわわに実をつけていた。まるで楽園そのものだ。

だが、二人はそれらには見むきもせず、泉の奥にある石段を駆けのぼった。石段をのぼると、道は複雑に入りくんでいた。岩の下をくぐり、小さな穴をはい、急な岩場をのぼると、洞穴(どうくつ)の入口があった。二人はその中に入って、

「あっ!」

思わずその美しさに目を見張った。

鍾乳洞(しょうにゅうどう)だった。何万年もの年輪を刻んだ美しい鍾乳石が、天井のわずかなすきまから差しこむやわらかな光を浴びて、きらきら光り輝いている。そして、ひんやりとした清々しい空気が気持ちを落ち着かせた。

まさに、聖なるほこらの名にふさわしいところだった。

5 虹のしずく

「ついにきたのですね!」

「ああ、ついにね!」

アレフはローラ姫と一緒に聖なるほこらを見わたしながら、『ロトのしるし』のことを考えていた。『聖なるほこらに行く道すがら、おまえはきっとロトのしるしを見つけるはずじゃ。おまえの心のなかにな』——とガライがアレフにいった。それは、どういう意味なんだろうか!? 心のな

か、というのは!?

「本当なら、ガルチラさんと三人でくるはずだったのですね――」

ローラ姫は、かなしそうな顔をした。

「でも――」

「でも?」

「ガルチラが旅していたのは、あの魔界童子を倒すことだったから――」

「そうなんですってね――」

あのまま、魔界童子と一緒に砂に埋もれて死んだなら、それはそれで、ガルチラにとってはいいことだったのかもしれない――ふと、アレフはそんなことを考えた。

「ローラ姫」

「はい?」

「ありがとう」

「え?」

「ぼくは――」

アレフはローラ姫の目をまっすぐ見つめた。ローラ姫も、同じように澄んだ瞳でまっすぐ見つめた。

「ぼくはローラ姫がいたからここまでこれたんだ」

ローラ姫は、アレフを見つめたまま首を横に振った。
「あなたは、自分の力でここまできたのです。あなたの勇気と、正義と、平和を愛する心で——」
「いや、本当なんだよ、ローラ姫」
アレフは、ローラ姫の手をにぎりしめて、じっとローラ姫の瞳を見つめた。
「ぼくは苦しくなったり、辛くなったりしたとき、いつもあなたのことを、あなたの笑顔を思い出したんだ——。あなたの笑顔を思い出すと、いつも元気が出たんだ——。よーし、やるぞ、ってね」
「あたしもです——」
「え?」
「あのまっ暗な闇のなかで——何度死のうと思ったかわかりません——。だって、どっちをむいても、闇、闇、闇、闇——闇ばっかり——。でもそんなとき、必ずあなたのことを思い出していたんです——。あなたは、竜王を倒すために頑張ってるんだ、って——。だから、こんなことに負けちゃいけない、って——。頑張って生きるんだ、って——。いつかきっと——きっと——」
ローラ姫は、キッと唇を噛んだ。その瞳に大きな涙が浮かんでいた。
「だから、ガライが現れてあなたが助けにくるって聞いたとき、とてもうれしかったんです。生きていてよかったたって——。その日から、どんなにあなたがくるのを待ちわびていたか——」
「ローラ——!」

いとおしくなって思わずアレフはローラ姫をだきしめた。
「アレフ――」
だきあったまま二人はじっと熱い目で見つめ合った。と、そっとローラ姫が瞳をとじた。その頬をすーっと大粒の涙が伝った。
「ローラ――」
アレフはその涙にそっと唇を当てた。
と、そのとき、突然ローラ姫の首飾りの薄緑の宝石がまばゆい光りをはなったのだ。
「あっ!?」
驚いてアレフとローラ姫は思わず離れた。
そのまばゆい光が一本の光線になって、アレフのロトのヨロイの左胸の『ロト』と刻まれている楔形文字にすーっと吸いこまれて消えたのだ。
と、その楔形文字が光り輝いて、やがてその文字の上に黄金色の美しい紋章が浮かびあがってきた。不死鳥が翼を広げて飛翔している紋章だ。ちょうど片手にすっぽりはいるほどの大きさだった。
「こ、これは!?」
勇者ロトの紋章だった。
「こ、これがロトのしるしか!?」

アレフはあ然としてロトのヨロイの胸に浮かびあがった紋章を見ていた。
そうか！　そういう意味だったのか！　心のなかに見つけるということは――！
ローラ姫のことだったのか！　ローラ姫の愛だったのか――！
「ローラ姫！」
「はい？」
自分の首飾りを見ていたローラ姫が顔をあげた。
「やっぱりあなたが真のローラ姫だったのだ！　ガライがいった通りにね！」
「！」
ローラ姫は、うなずいた。
「この首飾りが証明してくれたのですね」
「ああ！　あとは虹(にじ)のしずくだ！　虹のしずくを手に入れさえすれば、竜王のところへ行けるんだ！」
アレフとローラ姫は、さっそく聖なるほこらのなかをさがした。
天井から地面までのびた美しい鍾乳石(しょうにゅうせき)がたくさん、柱のように立っている。その美しい鍾乳石の柱をくぐりぬけて行くと、そこの奥に人間がやっと通れるくらいの細長い穴があいていた。そして、その奥に下におりる階段があったのだ。
アレフとローラ姫が階段をおりると、そこは広い空洞になっていて、中央に腰の高さほどの鍾

乳石が突き出ていた。ちょうど台座のようになっている。アレフは、その鍾乳石を見て、
「あっ!?」
と、驚いた。
その平らな部分に鍾乳石の石板が埋められていて、金色のアレフガルド文字が刻んであった。

『この地は聖なるほこら
邪悪の力及ばぬところ
勇者ロトのしるしを得し者よ
我が名の上にて
太陽と雨を合わせよ
精霊ルビス』

と、書いてあった。
「精霊ルビスの言葉だ!?」
アレフはローラ姫と顔を見合わせると、
「太陽と雨——!?　そうか！」
アレフは革袋から太陽の石と雨雲のつえを出すと、慎重に石板の『精霊ルビス』と彫ってある

文字の上に置いた。
と、石板がまっ白な光を発して太陽の石と雨雲のつえをつつんだかと思うと、突然まばゆい光をはなったのだ。目がくらむような七色の強い光りが空洞いっぱいに広がった。
やがて、その光がすーっと消えると、太陽の石と雨雲のつえが七色に光り輝くしずくの形をした美しい石に変わっていた。
「あーっ⁉」
虹のしずくの上の部分には金の鎖がついていた。両手にすっぽりはいるほどの美しい石だ。虹のしずくだ。
「こ、これが――⁉」
アレフはおもむろに金の鎖を持って、目の前に持ちあげてじっと見つめた。そして、手のひらにのせた。ずっしりと重かった。
「これが――虹のしずくか！　この虹のしずくがあれば、竜王の島にわたることができるのか！よーし！　やるぞっ！」
アレフの胸の奥から熱い闘志(とうし)がこみあげてきて、まるで血のように体の隅々まで広がった。
「ローラ姫！」
「はい」
「見ていてくれ！　必ずこの手で竜王を倒してみせる！　そして、このアレフガルドに平和を取

りもどしてみせる！」
ぎらぎらと燃えるその目に、一段と決意と闘志がみなぎっていた——。

第七章　死闘・竜王の島

虹（にじ）のしずくを手にいれたアレフは、ローラ姫に見送られて聖なるほこらを出発した。ローラ姫を聖なるほこらに残したのは、石版に刻まれた「この地は聖なるほこら、邪悪（じゃあく）の力及ばぬところ――」という精霊ルビスの言葉通り、この地が竜王の手の及ばない安全なところだったからだ。

リムルダール島にわたったアレフは、海ぞいをまっすぐ北上した。そして、聖なるほこらを出てから十八日目の朝、カリカドールの村があったという海辺をすぎると、かつて勇者ロトが魔の島へわたるために虹の橋をかけたといい伝えられている西の岬（みさき）が見えてきた。

あと数日で王（キング）の月から一年の最初の月である不死鳥（フェニックス）の月に変わり、アレフガルドは新しい年を迎えようとしていた。竜王がアレフガルドを支配してから、ちょうど二〇〇年目にあたる竜（ドラゴン）の年を――。

1　竜王の城

「うっ、血の匂いだ――！」
断崖絶壁の岬の突端にたどり着いたアレフは、あまりの生臭さに思わず吐きそうになって、あわてて鼻と口を両手で押さえた。海峡からは生臭い血の匂いの風が吹きつけてくるのだ。
新年とともに春を迎えるというのに、空にはどんよりした暗雲が低くたれこめ、海は真冬のように荒れ狂っていた。
リムルダールの霊媒師がいったように、かつてこの岬はなだらかな美しい岬だった。だが、いまその面影はまったくない。地層が浮き出た斬り立った崖が連なり、地割れの裂け目が大きく口をあけていた。一三四八年の天変地異で、はげしい隆起と陥没のために一瞬にして醜い奇怪な地形に変わってしまったのだ。
岬の突端も大きくえぐられたあとがあり、地割れを起こしながら橋とともに崩れ落ちたことが容易に想像がついた。いまアレフが立っているところは、かろうじて残った部分なのだ。
「気をつけてくださいね」
見送るとき、ローラ姫は心配そうにアレフの手をとって熱い瞳で見た。
「待っててくれ、ローラ姫！　かならず竜王を倒してみせる！」

アレフはローラ姫の顔を思い出しながら心のなかで固く誓うと、荒れ狂う海峡のかなたをキッとにらみつけた。
濃霧と暗雲で竜王の島が見えない。だが、この生臭い血の匂い風が吹いてくる海峡のむこうに、間違いなく竜王の島があるのだ。
革袋から虹のしずくを取り出すと、アレフは両手で大きく頭上にかざして、
「虹のしずくよ――！」
必死に祈りながら叫んだ。
「竜王の島にわたらせてくれ！　勇者ロトのように！」
と、虹のしずくが、きらきら輝くまばゆい七色の光をはなって、一瞬のうちに岬の突端をつつんだ。と、すーっと溶けるように虹のしずくがアレフの手から消えると、岬の先端をつつんでいた七色の光が吸いこまれるようにアレフの前の地面に消えた。
だが、つぎの瞬間、地面から一段とまばゆい七色の光がいきおいよく噴射し、一本の虹の帯になってきらきら輝きながら海峡のかなたにすさまじい速度でぐんぐんぐんのびて行ったのだ。そして、一瞬のうちに幅二尋ばかりの、絨毯のような美しい虹の橋がかかったのだ。
「やった！」
息をのんで見つめていたアレフの心が躍った。新たな闘志が胸の奥から湧き出て、全身を駆けめぐった。

「よし！」
アレフは美しい虹の橋に立った。
虹の橋は見かけによらず、まるで石のように固かった。アレフは力強く西の海上にむかって歩きはじめた。
だが、ほんの少し三〇歩も行かないうちに、一段と海の波が高くなった。ふしぎに思って振りむくと、
「あっ!?」
なんと、すぐうしろにあるはずの岬の突端が、はるかかなたに遠ざかっていたのだ。アレフは一瞬自分の目を疑った。
「どうなってんだ!?　さっき歩き出したばかりなのにっ!?」
だが、何度見ても岬の突端がはるか遠くにあるのだ。そのとき、アレフはリムルダールの霊媒師が、「勇者ロトは虹のしずくで七色の橋をかけ、あっという間に魔の島へわたった」という言葉を思い出した。「あっという間」というのはどういう意味だろうか？
「そ、それにしても――!?」
アレフには、まだ信じられなかった。
時間と空間を一気に飛び超えて、はるか遠くの海上まで来たのだろうか!?　もしそうなら、虹の橋に立ったときに時間と空間を飛び超えたのかもしれない。ということは、この虹の橋が時間

と空間を飛び超すふしぎな力を持っているということか⁉

そんなことを考えながら、アレフは歩き出すと、前方から、ゴォォォォ——と、おそろしい地響きのような音が聞こえてきた。

「な、なんだ、あの音は⁉」

思わず駆け出し、その音のするところまで行って、

「あっ⁉」

と、アレフは思わず息をのんだ。

海が走る——！　と、霊媒師が呼んだ先祖の霊が叫んだが、まさにその通りだった。地響きのようなすさまじい音を立てて、海が走っていた。

波頭と波頭がはげしくぶつかり合い、無数のしぶきを飛び散らし、さか巻く波と波が大きくうねりながらおそろしい渦巻きをつくり、すさまじい速度で南から北にむかって走っている。地獄のような、呪われた魔の海峡を、アレフはあ然として見ていた。

と、いつの間にか、このはげしい潮の流れのはるか海上に、ぶきみな島影が姿を現していた。

「竜王の島だ！」

アレフは緊張した。

竜王の島は、低くたれこめた暗雲と濃霧にすっぽりおおわれていて、その雲はたえず稲光を発していた。と、さらに強い風が島から吹いてきた。生臭い血の匂いがいっそう強烈になった。

おそらく、あのぶきみな島のどこかで、竜王はアレフガルド全土に目を光らせているのだ。そして、この海峡の速い潮の流れとおそろしい渦巻きは、あの島のまわりをすさまじい速度で走りつづけ、近づく者を拒んでいるのだ。

「くそっ！」

アレフは島にむかって駆け出した。

虹の橋は島の東海岸の崖の上につづいていた。アレフは虹の橋から崖に飛びおりた。と、とたんにすーっと虹の橋が消えてしまった。

西の岬を出てあっという間だった。やはり、虹の橋は時間と空間を飛び超える橋でもあったのだ。でなければ、海峡のかなたまでのびた虹の橋を、こんな短時間でわたることは不可能だからだ。

目の前に暗雲と濃霧におおわれたぶきみな山脈がそそりたっている。

「さあ、来い！　竜王！」

アレフは、気を引きしめながら、平らな足場のいいところをさがして、歩きはじめた。

島は、昼だというのに夜のように暗かった。天には、暗雲と稲光。地には、荒れ果てた岩肌と湿地。そして、冷たい濃霧と血の匂いのする風。それしかなかった。荒涼とした地獄のような風景しかなかった。

両側にけわしい山脈がそびえている岩場をアレフは南下した。年中濃霧におおわれた岩場には、

ぶきみな赤や黄の原色の苔がいたるところに群生し、生臭い血の匂いを発していた。
アレフは二日かかってこの岩場をぬけると、今度は沼地の森に入った。沼地の森も濃霧におおわれていた。だが、森が風をさえぎってくれるのでいくぶん助かった。
沼地は、ガルチラと二人で越えたあのアレフガルド東部の沼地と同じように、一歩踏み出すたびにずぼっずぼっと踝まで沈んだ。
森の木々がぶきみでおどろおどろした枝や根を張っていた。その木々を縫うように、ぶくぶくと泡を立てた血の色の底なし沼が、川のようにどこまでもつづいていた。
アレフはガルチラのことを思い出しながらこの沼地の森を進んだ。魔界童子が生きているかどうか定かではないが、生きていれば必ずまた現れるはずだ。そのときは、敵を討ってやる。そう心に誓いながら——。それに——、ガルチラを育ててくれた老人が魔界童子に殺されたのも、もとはといえば竜王がこのアレフガルドを支配したからなんだ。竜王さえいなければ、殺されることもなかったし、ガルチラが砂の城塁に埋もれて死ぬこともなかったのだ——。竜王への怒りがまた燃えてきた。
この森の沼地に入って最初の夜、アレフが横に張り出した巨大な木の根っこにもたれて寝ようとしたときだった。低い咆哮がして、アレフはすばやく剣をぬいて身がまえた。
暗がりでぶきみな眼が光ったかと思うと、いきなり飢えた野獣のように牙を剥き出しにした二匹の魔物が襲いかかってきた。アレフはすかさず宙に跳んで攻撃をかわした。ドムドーラで群れ

をなして襲ってきた獣人の魔物、キラーリカントだった。
「またおまえらかっ！」
すかさず二匹のキラーリカントが体勢を変えて襲いかかった。アレフは横に跳んでかわし、一匹の背中を斬った。まっ赤な血しぶきがいきおいよく飛び散った。
と、よろよろっと前に数歩よろけて、体勢を変えて襲いかかろうとしたキラーリカントの体がいきなり沈んだ。そこはぶくぶく泡立っている血の色の底なしの沼地だったのだ。キラーリカントはすさまじい悲鳴をあげ、はげしくもがきながら底なし沼地に沈んで消えた。
あ然としてアレフは見ていた。と、もう一匹が背後から襲いかかっていた。はっとなったアレフは振りむきざま、首飾りをにぎって呪法をかけた。
拳から発した鋭い光線がキラーリカントを直撃し、その光がキラーリカントの全身を駆けめぐり、鋭い爪を振りおろしたまま動かなかった。鋭い爪がアレフの顔面に突き刺さるほんの一瞬前だった。すかさずアレフは、
「トーッ！」
横に飛んで剣を払った。
キラーリカントの首が血しぶきをあげて宙に飛んだ――。
三日かかってアレフはこの沼地の森を越えると砂漠に出た。と、横なぐりの濃霧が晴れた。だが、両側にそそり立っているけわしい山脈が見えたのも束の間だった。またすぐ濃霧におおわれ

てしまったのだ。

アレフは黙々と荒涼とした砂漠を北上した。上空をたえず鋭い稲光が走っていた。

砂漠のいたるところに無数の髑髏や白骨が転がっていた。おそらく、天変地異のとき、大津波から逃れてきた人々がこの砂漠で魔物たちに襲われたのだろう。

北上するほど稲光がはげしくなった。そして二日目の夕、やっと砂漠をぬけたと思ったときだった。ピカーッ——と一段と激しい稲光がして、

「あっ!?」

と、思わず声をあげた。

ほんの一瞬だが、前方の崖の上に、濃霧につつまれたぶきみな異形の城が稲光に照らされて見えたのだ。竜王の居城だった。

竜王の城は、断崖絶壁の北の岬に、アレフガルド中を威圧するかのようにそそり立っていた。目のくらむような断崖絶壁の下は、はげしい波が打ち寄せる海だった。稲光がさらにはげしく上空を走った。

かつてこの城のあったところに、精霊ルビスを祀った荘厳華麗な大理石の神殿がそびえていたのだ。そして、いまでは天変地異で断崖絶壁に姿を変えてしまったが、海岸にはアレフガルドの人々で賑わった門前町と港があったのだ。

城に接近したアレフは、要塞のような石造りの城門をくぐりぬけ、岩陰から城内の様子を見た。

中央の崖にはおどろおどろした古い石の建物がそびえていた。宮殿だ。
アレフは深呼吸して剣をぬくと、息を殺して宮殿に近づき、鉄の扉をあけてなかに忍びこもうとした。そのときだった。いきなり頭上から魔物が襲いかかった。
「あっ⁉」
アレフはすばやく身をかわして、斬りかかった。
キメラとメイジキメラの飛行部隊だった。最初にキメラの編隊が襲い、すかさずメイジキメラの編隊が襲った。アレフは、キメラとメイジキメラを数匹ずつ斬り倒すと、すきを見て宮殿に飛びこんで、
「あっ⁉」
となった。
ホールの巨大な円柱の陰からつぎつぎに髑髏の魔物が姿を現して、アレフの前に立ちはだかったのだ。その数は一〇〇体、いやそれ以上いそうだ。アレフがラダトーム城で襲われたのと同じ魔物で、竜王の城の警備をしている混合戦闘部隊の死霊の騎士の一団だった。
薄暗い宮殿のなかは、巨大な円柱がずらりと両側に並んで、奥の闇へとつづいていた。そして、その円柱や壁や天井にまで、おどろおどろしたいまにも襲いかかってきそうな、ぶきみな竜の彫物がいくつもほどこされていた。
騎士たちは骨の音をきしませながらにじり寄ると、いっせいに襲いかかった。アレフは数体を

斬り裂きながらすばやく奥へとむかった。と、斬り裂かれた騎士たちがばらばらになって乾いた骨の音を立てながら崩れ落ちた。すかさず騎士たちの群れが追った。

アレフは奥へ向かいながら振りむきざま、首飾りをにぎって呪法をかけた。拳から発した鋭い光線は先頭の騎士たちを直撃し、騎士たちの全身に光が走ると、騎士たちはそれっきり動かなくなった。アレフは宙に跳んでそれぞれの首を思いっきり斬り落とすとまた奥へ向かった。同じように、先頭の騎士たちに呪法をかけては一体ずつ斬り倒しては奥へ奥へと向かった。

そして、最後の騎士を斬り倒したとき、一番奥の部屋の前まできていた。扉の中央には天を翔ぶ竜の紋章があった。額には玉のような汗が流れ、肩で大きく息をしていた。アレフは呼吸を整えると、竜の紋章の扉をそっとあけた。

そこはひときわおどろおどろした部屋だった。柱や壁や天井のほかに、燭台や飾り棚にまでぶきみな竜の彫物がほどこしてあり、その正面の一段高いところに、やはり竜の彫物がほどこされた立派な玉座があった。

2 地下迷路

「ここが竜王の部屋か——!?」

アレフは一段と緊張し、あたりの様子をうかがいながらそっと玉座にむかった。と、突然天井

の巨大なシャンデリアがアレフの頭上に落下してきた。
「うわあっ⁉」
かろうじて飛びのくと、すさまじい音を立ててシャンデリアが床に砕け散った。アレフは息を殺して、じっと気配をうかがった。だが、魔物の気配はなかった。
ほっとしてアレフは玉座に近づいた。玉座の背もたれにほどこされた竜の眼にはまっ赤な宝石が埋められていた。アレフがその背もたれに手をかけたときだった。いきなり玉座が横に移動したのだ。
「うわあっ⁉」
アレフは、思わず体勢を崩した。と、玉座のあったところにまっ暗な闇が口をあけていて、いきなりそこからぬっと手がのび、アレフの右足をわしづかみにして、いきおいよくなかにひっぱりこんだのだ。
「あーっ⁉」
思わずアレフは悲鳴をあげると、闇のなかで一回転させられて、階段下の床に背中から思いっきりたたきつけられた。
「うっ！」
すばやく起きあがりながら横に跳んで剣をかまえた。
とたんにアレフは顔を歪めた。右足首にはげしい痛みが走ったのだ。足をつかまえられて投げ

られたとき、足をひねられてしまったのだ。敵は、死霊の騎士一体だった。
「くそっ、しぶといやつだ！」
アレフはすばやく呪法をかけた。と、拳から発した光線が襲いかかった騎士を直撃し、騎士の動きがとまった。すかさずアレフは斬り倒すと、騎士の骸骨がばらばらに音を立てて崩れ落ちた。
たいまつをつけ、痛めた右足に薬草を塗ると、アレフは右足を引きずりながら奥へとむかった。
地下は複雑な迷路になっていた。迷路を奥へ奥へと進むと、また地下におりる階段があった。
アレフは、慎重にその階段をおりて、さらに迷路を奥へと進んだ。と、ブォォォォッ！　いきなり横からまっ赤な炎が襲ってきた。
「うわあっ！」
アレフはあわててかわして剣をかまえた。
壁の陰から巨大なドラゴンが姿を現した。悪魔の騎士がひきつれていたドラゴンよりひとまわり大きい、混合戦闘部隊のキースドラゴンだ。キースドラゴンは、炎を吐いた。ドラゴンの炎よりはるかに強力だった。アレフはかろうじてかわすとキースドラゴンの足に斬りかかった。だが、
「あっ!?」
あっけなくはねかえされたのだ。
「く、くそーっ！」
アレフは宙に跳んでまた足に剣を振りおろした。

と、いきおいよく血しぶきが飛び、キースドラゴンは苦しそうにのけぞった。だが、アレフはあ然として剣の刃を見た。ほんの少しだが刃がこぼれたのだ。
つぎの瞬間、アレフは怒り狂ったキースドラゴンの炎を浴びて全身にはげしい衝撃を受けた。気がついたら、壁まで吹っ飛んで背中を強く打っていた。
アレフはすかさず首飾りをつかんで呪法をかけた。だが、きかなかった。拳から発した鋭い光線がキースドラゴンを直撃したが、キースドラゴンは容赦なく炎を吐いて、アレフはまた壁まで吹っ飛んだのだ。
「く、くそっ!」
アレフは気力を振りしぼって大きく宙に跳び、血が噴き出ている足を目がけて剣を振りおろした。
「たーっ!」
また血しぶきが飛び、キースドラゴンはたまらず前のめりに倒れた。そのすきにアレフは右足の痛みをこらえながら必死に逃げた。着地したときにまたはげしい痛みが走ったのだ。と、また下におりる階段があった。アレフは転がるようにその階段をおりた。そしてさらに奥へと逃げて、やっとひと息ついた。そのときだった。殺気を感じてはっと見あげ、
「あーっ!?」
恐怖に顔が強張った。

足だった。巨大な足が目の前に迫って踏みつぶそうとしていた。
「うわっ!」
間一髪、すばやく横っ飛びに一回転してかわすと、ズシ~ン——すさまじい地響きを立てながら巨大な足が床にめりこんで、ビシビシビシッ——と、床に地割れが走った。
巨大な石の化物、大男のストーンマンだった。かつてメルキドで巨人ゴーレムと戦ったストーンマン部隊の唯一の生き残りで、いまでは混合戦闘部隊の一員として竜王の城を守っているのだ。
ストーンマンは巨大な拳を振りかざした。アレフはあわてて飛びのくと、巨大な拳が唸りをあげて空を斬った。ストーンマンは表情ひとつ変えずまた襲いかかってきた。まともに攻撃を食らったら、一発で万事休すだ。拳だけでもアレフの体より大きいのだ。
アレフはすばやく呪法をかけた。拳から発した鋭い光線がストーンマンの顔面を直撃し、ストーンマンの全身を光が走ると、ストーンマンが動きをとめた。
「たーっ!」
アレフは首飾りをにぎっていた手をストーンマンにむけ、さらに攻撃の呪法をかけた。指先からさらに鋭い光線が発して、ストーンマンを直撃した。無表情だったストーンマンもさすがに苦しそうにもがき、まるで狂ったように暴れた。
と、バシッ——ストーンマンの足が壁にめりこみ、壁が崩れて大きな穴があいた。運よく別の通路につながっていたのだ。

「それっ！」
アレフはすばやくその穴に飛びこむと、ストーンマンもすかさず追っていきおいよくその穴に首を突っこんだ。だが、体が大きすぎて首から下がひっかかったのだ。ストーンマンは、強引にその穴をぬけようとし、力まかせにもがいた。と、ガラガラガラッ――壁が崩れはじめた。ストーンマンはさらにもがいた。と、ズズ～ン――すさまじい地響きと土煙をあげて天井の岩盤が崩れ落ち、一瞬にしてストーンマンがその下に埋まってしまった。
アレフは右足をひきずりながらさらに奥へすすむと、また地下におりる階段があった。
アレフは溜息をついて階段をおり、さらに奥へと進んだ。
どこまで行きゃいいんだ――と、思ったときだった。魔物の気配を感じて、はっとなって思わず立ちどまった。いままで経験したことがない、ぞっと背筋が凍るようなぶきみな気配だ。
アレフはじっと様子をうかがった。だが、尖った氷の先のような鋭い気配がするだけで、どこにも姿はなかった。
「なにものだっ⁉」
アレフは思わず叫んだ。と、
「おまえかロトの血をひく者とはっ！」
と声がして、前方の暗闇のなかにゆっくりと魔物が姿を現した。
真紅の鋼鉄の防具で身を固めた魔物だ。刃に触っただけで血がしたたり落ちそうな大きな斧を

持っている。混合戦闘部隊を率いる六魔将のひとり死神の騎士だった。死神の騎士は鋭くにらみつけると、

「もはやこれ以上一歩も奥にやるわけにはいかん！　影殿と悪魔殿の無念を晴らしてやるわっ！」

と叫ぶと、斧を身がまえた。

アレフはすばやく首飾りをにぎりしめて、呪法をかけた。だが、きかなかった。死神の騎士がアレフの拳から発した光線をはじきかえすと、

「ふっふふふ。ひと振りのもとにその首をはねてやるわっ！」

と、じりっじりっとにじり寄った。

「うっ！」

アレフはあわてて剣を身がまえた。

死神の騎士は残忍な笑いを浮かべると、

「たーっ！」

斧を振りかざしていきおいよく宙に跳んだ。

が、同時にアレフも右足の痛みをこらえて思いっきり宙に跳んでいた。と、ガキン――と乾いた金属音が暗闇に響きわたって、アレフと死神の騎士が互いに背をむけながら同時に着地した。

ぼろぼろっ――アレフの剣の両刃がこぼれ落ちた。と、つぎの瞬間、ガチャ――と金属音が暗

と剣を振りおろしたが、ほんの一瞬アレフの剣が速かったのだ。ほとんど同時に死神の騎士とアレフが斧闇のなかに響いた。死神の騎士の斧が床に落ちたのだ。

「ううっ——！」

死神の騎士の口もとが大きく震えた。カブトの額にビシビシビシッ——と、ひびが走ったかと思うと、カブトがまっ二つに割れて床に転げ落ち、死霊の騎士と同じ髑髏が現れた。その眉間がざっくりと大きく裂けていた。

もともと死神の騎士は死霊の騎士だった。だが、死霊の騎士のなかでは飛びぬけて高い能力を持っていたのだ。それが竜王に認められ、真紅の防具を与えられて、それ以来自ら死神の騎士と名のるようになったのだ。

「こ、こんな、ば、ばかな——」

死神はまだ負けたことが信じられないのだ。無念そうにがっくりとひざをつくと、眉間から鋭いひびが走り、一瞬にして髑髏が粉々に砕け散った。と、防具もばらばらになって崩れ落ち、そのなかから粉々になった骸骨がこぼれ出た。

アレフはあ然として刃の欠けた剣を見た。もはや、まともに戦えそうにはなかった。無理もなかった。いくらラルス十六世秘宝の名剣とはいえ、斬り倒した魔物の数は数えきれないほどなのだ。

「くそっ！」

アレフは無念そうに唇を嚙むと、気を取りなおして、右足を引きずりながらさらに迷路の奥へとむかった。右足の痛みがさらにはげしくなった。と、また階段があった。
「どこまで行きゃ竜王のやつがいるんだ⁉」
階段をおりてさらに奥へすすむと、やがてあかりのもれている部屋に突きあたった。アレフは剣をにぎりなおしてなかをのぞくと、部屋の正面に祭壇があり、その前の台座の燭台でロウソクが燃えていた。
「な、なんだこの部屋は⁉」
アレフは部屋を見まわしながら、慎重に祭壇に近づいて、
「あっ⁉」
思わず目を見張った。
祭壇の横に長方形の透明な水晶があり、そのなかに立派な美しい剣が埋められていたのだ。その華麗な鍔を見てアレフはさらに驚いた。
「こ、これはっ⁉」
左胸にあるロトのしるしと同じ天を翔ぶ不死鳥の紋章の鍔だった。
「ロ、ロトのっ⁉」
そのときだった。背後から、
「ふっふふふふ」

と、ぶきみな男の笑い声がした。
思わず振りむくと、暗闇のなかにまっ赤な鋭い目がすーっと浮きあがった。
「な、なにものだ!?」
「いかにも、それはまさしくロトの剣――」
「な、なにっ!?」
と、黒マントの男が姿を現した。
「あっ!?」
アレフは一瞬あの魔界童子かと思った。だが、黒いマントをまとった老人だった。手には拳ほどの赤い水晶玉の飾りをつけたつえを持っている。大魔道ザルトータンだった。

3 大魔道

「わしは大魔道ザルトータンだ!」
「大魔道!? どうしてこんなところにロトの剣があるんだ!?」
「かつてここにあった精霊ルビスの神殿に奉納されておったのだ!」
「なんでそんなことを知っているんだ!?」
「わしはかつてその神殿に仕える最高位の神官だったからだっ!」

「な、なにっ⁉」
「一三四八年の天変地異のあと、わしは必死に竜王から神殿を守ろうとした！　だが、必死の抗戦もむなしく、わしも、わしの弟子であった一人息子も、殺されてしまった！　その後、魔物としての命を吹きこまれ、わしは大魔道として、息子は魔界童子として、蘇ったのだ！」
「な、なにっ⁉　ま、魔界童子がおまえの息子だとっ⁉」
「そして、わしは神殿にあったロトの剣を封印したのだ！　わしが死なぬかぎり解けぬ封印をなっ！」
「うぬぬっ！　なんてやつだ！　もと人間が竜王の手下になるなんて！」
「命が蘇ってわしは悟ったのだ。闇こそが永遠のやすらぎを与えてるのだ──となっ！　わしらにとって竜王殿下は絶対なのだ！　ロトの血をひく者よ！」
　ザルトータンはつえの先の水晶玉を突き出しておそろしい顔でにらみつけた。その眼は憎悪に燃えていた。
「さあ、死んでもらおーっ！」
　ザルトータンはすかさず呪法をかけた。
と、水晶玉がピカーッと赤い光を発してアレフを直撃した。
「うわあっ！」
　すさまじい衝撃が全身に走り、アレフは壁まで吹っ飛んではげしく全身を打った。

ザルトータンは両手でつえをにぎりしめると、水晶玉を自分の顔の前に立てて、別の呪法をかけた。水晶玉からさらに強力な鋭い光線を発して、アレフの全身を稲光のような光がはげしく走った。

「うわあああああっ！」

アレフは悲鳴をあげながら、まるでなにかに憑かれたようにはげしく震え、苦しそうにのたうちまわった。目に見えない磁力のようなもので、全身がはげしくしめつけられて呼吸もできないのだ。

「はっはははは！　さあ、苦しむがいい！」

と、そのときだった。魔道士やキラーリカントや死霊の騎士が雪崩こんできてアレフに襲いかかったのだ。

「やめいっ！」

ザルトータンは思わず呪法を解いて叫んだ。だが、魔物たちには聞こえなかった。

「ええいっ！　やめぬかっ！　こやつはわしが始末するっ！」

ザルトータンはあせってすかさず呪法をかけた。

と、さっきと同じ強力な鋭い光線がアレフと魔物たちを直撃し、魔物たちは悲鳴をあげながらつぎつぎに倒れた。ザルトータンはさらに力をこめた。

「さあ、とどめだっ！　魔界童子の敵だーっ！」

「ま、魔界童子の――⁉」
アレフはもうろうとした意識のなかで、苦しそうに声を出した。
「そうだっ！　やつはわしのかけがえのないただひとりの肉親！　この怨み晴らさでかっ！」
と、水晶玉から発した光線がまたアレフを直撃した。
「うわあああわっ！」
すさまじい衝撃とともに骨がきしんだ。
「じゃあ、ま、魔界童子は、し、死んだのだなっ⁉」
「とぼけるでないっ！」
一段と強力な光線がアレフを直撃した。
「うわああああああーっ！」
アレフは全身をはげしく痙攣させながら暴れると、やがてばったりと倒れてそのまま動かなくなった。
「魔界童子よ――！」
思わずザルトータンの顔がほころんだ。額からは玉のような汗が流れていた。
「ついに討ったぞ――！　ついにな――！」
だが、ザルトータンが呪法を解くと、なんと倒れているアレフの全身をふしぎな青い光がやさしくおおっていたのだ。

「うっ⁉　こ、この光は⁉」
ザルトータンは顔色を変え愕然となった。
「うっ――！」
気がついたアレフが、気力を振りしぼってやっと起きあがったのだ。
と、アレフをつつんでいた光がすーっとアレフの破けている革袋に消えた。アレフはあ然として革袋を見ると、その破れ目から粉々に砕け散った青い命の石が、きらきら輝きながらこぼれ落ちた。
「そ、そうか！」
アレフはやっと命の石が助けてくれたことを理解した。ふしぎな青い光は命の石が発した光だったのだ。
「お、おのれっ！」
ザルトータンがまた呪法をかけた。
だが、同時にアレフも首飾りをにぎりしめて印を結んでいた。水晶玉から発した赤い光線がアレフに直撃したと思った瞬間、アレフの指先から発した光がその光線を受けとめたのだ。
「うぬぬぬっ！」
ザルトータンはさらにつえを持つ手に力をこめた。
「く、くそーっ！」

アレフもさらに強く拳をにぎりしめ、ありったけの力を集中させた。
と、アレフの光線が赤い光線を徐々に押しかえして、ほぼ互角になった。押したり押されたりのはげしい戦いになった。
「うぬぬぬっ！」
ザルトータンはさらに力をこめた。すさまじい形相のその顔は汗でびっしょり濡れていた。さっきまでにかなりの力を消耗しているのだ。アレフの額にもまた玉のような汗が光っていた。アレフは鋭い目でザルトータンをにらみつけながら、
「うおおおおっ！」
全身を震わせながら叫び、さらに手に力をこめた。
と、アレフの光線が徐々に速度をあげながら押しかえすと、最後はすさまじいいきおいで水晶玉を直撃した。と、パカッ——水晶玉がまっ二つに割れたのだ。
「うぬぬぬっ！」
ザルトータンの顔が青ざめた。
そのとき、アレフは最後の力を振りしぼってザルトータンにむかって突進していた。と、
「たーっ！」
いきおいよく宙に跳んで、両刃の欠けた剣を思いっきり振りおろした。つえがまっ二つに斬れて宙に飛び、つぎの瞬間青黒い血がいきおいよくあたり一面に飛び散った。ザルトータンの眉間

からのどにかけてざっくり裂けていた。
「うおおおっ！」
部屋中にザルトータンの悲鳴がとどろいた。
と、かえす剣でアレフはザルトータンの心臓をひと突きにした。
「うっっっ――！」
ザルトータンは苦しそうにぶるぶると全身を痙攣させた。やがてそのまま崩れ落ちると、
「うああああああああーっ！」
すさまじい悲鳴をあげながら、全身が薄い紙切れのようないくつもの破片にゆっくりとちぎれてあたり一面に飛び散り、やがて悲鳴とともにいずこへともなく消えてしまった。
ぶきみなほどの静寂がもどった。肩ではげしく息をしながら、あ然として見ていたアレフは、額の汗をぬぐうと、ぺたりとその場に座りこんでしまった。ぐったりと疲れきって動けなかった。
しばらくアレフは茫然としながら休むと、気力を振りしぼってロトの剣の前に行った。
いつの間にかザルトータンの封印が解けていて、ロトの剣を埋めていた透明な水晶は粉々に割れていた。アレフはおもむろにロトの剣を取って、さやからぬいた。
鏡のような青々とした刃。いまにも油がしたたりそうなしっとりとしたその光沢。華麗なロトの紋章の鍔。美しい宝石が散りばめられた柄。ほどよい重さで、妙にしっくりと手に合う。
「ああ。この美しい剣が、勇者ロトの剣か！　邪悪な魔物たちと戦い、魔王を倒した、あの勇者

ロトの！」
アレフは思わずぐっと力をこめてにぎりしめた。と、ぶるぶるっ——と思わず剣を持つ手が震えた。一瞬、手が離れなくなったのかと思うほど、ぴったりと柄に吸いついている。と、
「うっ⁉ な、なんだこれはっ⁉」
剣からふしぎな力が伝わってきた。アレフの全身がはげしく震え、その力がまるで血液のように、あっという間に全身を駆けめぐった。ふしぎな力が全身にみなぎって、いまにも爆発しそうになった。さっきまでの疲れがうそのように吹っ飛んでいた。ふしぎな力と同時に、胸の奥から新たな熱い闘志がこみあげていた。その目はぎらぎら燃えていた。
と、また駆けつけてきた魔道士や死霊の騎士たちが、アレフに襲いかかろうとした。だが、アレフがすばやくロトの剣をかまえ、鋭い目でにらみつけると、とたんに魔物たちの顔に脅えが走った。
アレフの全身にすさまじい気迫と殺気がみなぎっていたのだ。本能的に自分たちの死を嗅ぎとった魔物たちは、数歩退くとあわてて逃げ去った。
アレフはロトの剣をにぎりなおすと、右足を引きずりながら部屋を出て、さらに迷路の奥へとむかった。と、また下におりる長い階段があった。その階段をおりて、
「あっ⁉」
思わず目を見張った。

巨大な地底に、ぶきみな大理石の宮殿がそびえ立っていたのだ。ラダトーム城の宮殿と同じくらいの大きさだ。

宮殿の門までは大きな大理石の橋がかかっている。その下をまっ赤な熔岩が、ボコッ、ボコッ、ボコッ——と、おそろしい大きな泡を立てている。熔岩が宮殿のまわりをかこんで、堀の役目をしているのだ。そして、この地底にはさらに一段とむっとするような生臭い血の匂いが充満していた。竜王の宮殿だった——。

4 光の玉

地底にそびえ立つ竜王の宮殿は、異様なほど静まりかえっていた。ときどき、ボコッ、ボコッ、ボコッ——と、熔岩のぶきみな泡の音がするだけだ。

息を殺して熔岩にかかった大理石の大橋をわたったアレフは、そっと宮殿に忍びこむと、様子をうかがいながら慎重に奥へ奥へと進んだ。

宮殿のなかも大理石でできていた。地上にある宮殿と同じように、巨大な円柱や壁や天井に、いまにも襲ってきそうなおそろしい竜の彫物がほどこしてあった。

さらに奥へ進んで角を曲がったときだった。いきなり、ブォォォッ——と、強烈な炎が襲ってきた。

「うっ！」
アレフがかろうじて跳びのくと、円柱の陰から飛び出した二〇匹あまりのドラゴンがつぎつぎに炎を吐いた。悪魔の騎士の配下のドラゴン部隊だ。
アレフは首飾りをつかんで呪法をかけながら、ロトの剣を身がまえた。すさまじい炎がアレフを襲った。だが、アレフは敢然として炎を受けとめた。ロトのヨロイがロトの剣を得たためにさらに強力になり、この程度の炎ではびくともしなかった。と、呪法の光がロトの剣に反応して、ドラゴンたちの炎を吸いこんだ。ドラゴン部隊は一瞬ひるんだ。と、
「うおりあああーっ！　どけーっ！」
アレフはすさまじい形相で斬りかかると、ロトの剣から鋭い光線が発してドラゴンたちを直撃した。光線がドラゴンたちの全身をはげしく走ると、ドラゴンたちはつぎつぎに倒れ、残ったドラゴンの部隊はとたんに脅えてあわてて逃げた。
ドラゴンたちよりさらに巨大なドラゴンが一匹だけ残った。竜王の直属の部下で、アレフガルド侵略以来ずっとこの宮殿を守ってきたダースドラゴンだ。
ダースドラゴンはすかさず炎を吐いた。ドラゴンやキースドラゴンよりはるかに強烈な炎だった。アレフはその炎を浴びながら、キッとすさまじい目でにらみつけると、
「うりゃあああーっ！」
すかさず宙に高々と跳び、

「とおりゃああっ！」
思いっきり剣を振りおろすと、ロトの剣がまばゆい光をはなった。
と、つぎの瞬間、ダースドラゴンの丸太のような巨大な首が、すさまじい大量の鮮血を噴き出して大きく宙にはじけ飛び、ダースドラゴンは地響きを立てて床に倒れると、その横に血まみれの首がいきおいよく落下した。ダースドラゴンはカッと眼を見開いたまま即死していた。
アレフはあらためてロトの剣のすごさを知った。と、そのときだった。
「ゼィゼィ――ゼィゼィ――」
という、かすれ声とも唸り声ともつかないぶきみな音が、かすかに聞こえてきた。
「！」
アレフは思わず緊張(きんちょう)した。
ぶきみな音が、奥から聞こえる。アレフは剣の柄をにぎりかえると、そっとぶきみな音のする奥へと、右足を引きずりながらむかった。ぶきみな音が、さらに大きくなった。
と、アレフは熔岩(ようがん)にかかった大理石の小さな橋に出た。熔岩の堀は、宮殿のなかまでひきこまれているのだ。ぶきみな音は、その橋の奥から聞こえてくる。アレフはその橋をわたると、奥にもうひとつ熔岩にかかった大理石の小さな橋があった。アレフはその橋もわたり、さらに奥に進んで、
「あっ⁉」

思わず息をのんで剣を身がまえた。
そこは豪華な竜王の間だった。その正面の一段高いところで、玉座に座ったおそろしい顔の魔物が、
「ゼィゼィ――ゼィゼィ――」
と、息をするたびにのどを鳴らしながら、じっとアレフをにらんでいた。口もとにはかすかな笑みを浮かべ、両手でつえをもてあそんでいた。アレフと同じぐらいの大きさの魔物だ。だが、眼だけは異様に鋭くて冷たい。竜王だった。
アレフはあ然として竜王を見ていた。一瞬自分の目を疑ったのだ。竜王がこんなに小さいとは想像もしていなかったからだ。
「ゼィゼィ――ゼィゼィ――」
竜王がのどを鳴らすたびに、血の匂いがさらに強くなる。血の匂いは、竜王の吐く息だったのだ。
「おまえが竜王かっ！」
アレフはキッとにらみつけた。
「ロトの血をひく者か!?」
竜王は、のどを鳴らしながら、おどろおどろした声を発した。
「そうだ！　勇者ロトの血をひく者だ！　おまえを倒しにきた！　おまえが闇にとざした光の玉

を奪いかえしになっ！」
「はっはははは！」
竜王は、のどを鳴らしながら声高に笑った。
「おまえごときに、このわしが倒せるというのか!? はっははは！ もとはといえば、光の玉はわしの母上のものだったのだ！」
「な、なにーっ!?」
「わしはそれを奪いかえしただけだっ！」

神々の一族である竜神の末裔として生まれた竜王は、人間を保護する神として天上界に君臨するはずだった。
だが、竜王が誕生したとき母である竜の女王はすでにこの世にはなく、竜王はいずことも知れぬ暗い洞窟で、魔界の大魔神の配下の魔物により、悪の権化として育てられたのだ。
ある日、若き竜王を呼んで大魔神はこう告げた。
「竜王よ、もはやこの世界においてもそなたの益するところはない。そなたの母上、竜の女王から地上界を奪いとった精霊ルビスの国に向かうがいい。いまこそ、その地を征服し、竜の女王の仇を討つがいい。そして、光の玉を奪いかえすのだ。さすれば、おまえは本来の力を取りもどし、地上界のみならず、天上界をも支配できる絶対的な力を持つであろう」

こうして二〇〇年前、竜王は配下の魔物を率いてアレフガルドを侵略したのだ――。

「はやい話が――！」

竜王はおそろしい眼でアレフをにらみつけた。

「この地上界は本来わしの母上である竜の女王の世界であったのだ！　だが、あの憎き精霊ルビスがこの地上界を我がものとし、母上は失意のうちにこの世を去ったのだっ！」

竜王はつえをにぎりしめ怒りに震えた。その眼は精霊ルビスへのはげしい憎悪に満ちていた。

「あまつさえやつは、おのが領土を広げるために、この地上界にアレフガルドという国まで創造し、母上が命とひきかえにこの世に残した、たったひとつの光の玉までロトに命じて盗ませたのだっ！」

「うそだっ！」

アレフは思わず叫んだ。

「竜王は魔界のやつらにだまされているんだ！　アレフガルドの神話によれば、悪や魔物がはびこっているこの地上界を平和にするために精霊ルビスがやってきたんだ！　光の玉だってロトが盗んだんじゃない！　神から授かったんだ！」

「黙れいっ！」

低いがおそろしい声だった。

「人間どもが勝手に作った神話なぞ、聞く耳を持たぬわっ！」
「うっ！」
「それにしても、海峡をわたりこの城までくるとは見あげたやつ！　のぉ、ロトの血をひく者よ、ものは相談だが――」
と、じっとアレフを見た。
「どうだ、味方になる気はないか!?」
「味方ーっ!?」
わしは今年の竜の月の竜の日に、新たなる戦いをはじめる！　世界制覇の戦いをなっ！　いいやっ、地上界だけでなく天上界をも制覇するためになっ！」
「な、なにっ!?」
「わしの味方になったら、アレフガルドをおまえにやってもいい」
「ばかなことをいうなっ！」
「そうか。それは残念だな」
「だれがそんな手にのるかっ！」
「命は惜しくはないのか？」
「うるさいっ！　アレフガルドから平和を奪い、多くの命を奪ったにっくき竜王め！　覚悟しろ――っ！」

だっとアレフは竜王にむかっていきおいよく走った。足の痛みなど忘れていた。と、
「ターッ！」
大きく宙に跳んで、
「そりゃーっ！」
思いっきり竜王に剣を振りおろした。
ザクッ――玉座がまっ二つに割れた。だが、竜王の姿が消えていた。
「あっ!?」
「はっははは！」
と、ぶきみな笑い声がした。
「うっ！」
思わず振りむくと、いつの間にかうしろに竜王が立っていた。
「く、くそーっ！」
アレフはすかさず斬りかかった。
「はっははは！」
竜王は身軽にかわすと、おそろしい眼でアレフをにらみつけて印を結んだ。と、その指先からすさまじい光線が発してアレフを直撃した。
「うわあっ！」

アレフはいきおいよく壁まで吹っ飛び、背中を強く打ってそのままずるずるっと床に崩れ落ちた。全身にはげしい衝撃をうけて思うように動けなかった。と、宙に跳んだ竜王が、つえをかざして攻撃してきた。

「うっ！」

アレフはかろうじて横に転がりながらかわした。肩をつえがかすめた。と、アレフは気力を振りしぼって立ちあがると、すばやく身をひるがえして剣を振りおろした。着地した竜王がちょうど振りむいたところだった。

「たーっ！」

たしかな手応えがあった。

「うっ――！」

竜王は額を押さえながらガクッとひざをついた。

アレフはすかさず剣を振りかざすと、竜王の首を目がけて、

「死ねーっ！」

思いっきり振りおろした。また、たしかな手応えがあった。

「うっ！」

竜王は全身を震わせながら、そのまま床に崩れ落ちた。

「やった！」

思わずアレフは叫んだ。
だが、ダースドラゴンの首を一刀のもとにはねたロトの剣なのに、竜王の首をはねるどころか血すら出ていなかった。と、突然、
「ふっふふふふ」
竜王はぶきみな笑いを浮かべた。
「あっ⁉」
「はっははは！」
竜王は肩を揺らして声高に笑った。
「はっははは！」
なおも笑った。
と、竜王は見る見るうちにどんどん巨大化した。巨大化しながら、笑い声がさらにぶきみな声に変わった。鋭い二本の角が生えた。目がさらに鋭くなった。口が大きく裂(さ)けた。手の爪が鋭くのびた。背中に翼(つばさ)が生え、鋭い背びれが生えた。
「あーっ⁉」
アレフは思わず息をのんであとずさった。
なんと、一瞬(いっしゅん)のうちにアレフよりも二〇倍もある、おそろしい巨大なドラゴンに変身したのだ。

5　死闘

「がぉぉぉ！」
竜王は全身に響いてくるようなぶきみな声で吠えると、ブォォォッ――といきなり炎を吐き、炎の玉が目にもとまらぬ速さで飛んできた。
「うわっ！」
アレフは宙に跳んでかろうじてかわした。だが、着地して、
「うっ！」
右足にはげしい痛みが走った。
と、竜王はすかさず炎を吐いた。
炎の玉はアレフの体をかすめて後方の玉座に命中し、玉座はいきおいよく燃えながら粉々に砕け散った。
「――！」
アレフは炎の玉の威力にあ然となった。
「ゼィゼィ――ゼィゼィ――」
薄笑いを浮かべながら、さらに竜王は炎の玉を吐いた。

アレフは足の痛みにたえながら必死にかわした。だが、かわすのに必死で、攻撃できなかった。一定の距離からなかに踏みこめないのだ。と、いきなり、バシッ——顔面にすさまじい衝撃を受け、

「うわっ！」

勢いよく吹っ飛んだ。顔の骨が歪んだかと思ったほどだ。アレフが炎の玉に気をとられているすきに、竜王の巨大な尻尾が顔面を殴りつけたのだ。

アレフは大理石の壁にたたきつけられて床に転がり落ちた。たたきつけられたとき、ギシッと全身の骨がきしむ音がした。頬は大きく腫れあがり、口からは血が流れていた。

「く、くそっ！」

アレフは必死に起きあがろうとした。が、頭がふらふらして体が思うように動かなかった。尻尾でなぐられた時に軽い脳振盪を起こしたのだ。

と、竜王の吐いた炎の玉が、今度はアレフの胸に命中した。すさまじい衝撃だった。

「うわっ！」

アレフは転がりながら吹っ飛んだ。

炎の玉は、熱いだけでなく、鉄の棒で殴られたような衝撃があった。

アレフは必死に力を振りしぼってやっと立ちあがった。と、バシッ——またいきおいよく巨大な尻尾が飛んできて、両足に命中した。たまらずアレフは反対側の壁まで吹っ飛んだ。

「く、くそっ！」
必死に立ちあがろうとした。が、ガクッとひざが折れてまた倒れてしまった。足の神経が麻痺して、痺れて動けないのだ。竜王は、残忍な笑みを浮かべながら、炎の玉を吐きつづけた。
「うわっ！」
アレフはごろごろ転がった。転がりながら必死に炎の玉をかわした。が、あっという間に部屋の隅に追い詰められた。
「ゼィゼィ――ゼィゼィ――」
竜王の眼がさらに鋭くなった。と、一段とすさまじい炎の玉を吐いた。
だが、アレフはかろうじてかわすと、必死に踏ん張ってなんとか竜王の懐に飛びこみ、足に斬りかかった。だが、あっけなくはねかえされた。今度はありったけの力で宙に跳び、剣を振りおろした。剣は竜王の肩口にあたった。だが、これも軽くはねかえされた。アレフは愕然とした。
「くそっ！　ロトの剣でもだめかっ！　どうなってんだこいつの体はっ!?」
「ゼィゼィ――ゼィゼィ――」
竜王は肩を揺すりながら笑った。
「くそっ！」
アレフはまた斬りかかろうとして、
「うわあっ！」

いきなり顔面にはげしい衝撃を受けて吹っ飛んだ。竜王がすばやく前の鋭い足で力まかせに思いっきり叩いたのだ。
アレフは一瞬気を失いかけた。顔面にざっくりと竜王の鋭い爪あとが残った。
「くそっ！」
アレフは必死に起きあがろうとして、
「あっ⁉」
と、まっ青になった。
頭のすぐうしろの方で、まっ赤な熔岩がボコッボコッとぶきみな泡を立てていた。殴られて竜王の間から吹っ飛んできたのだ。
手をのばせばなんとか届きそうなところに、いつの間に革袋から転がり出たのか、誕生祝いにローラ姫からもらった鳳凰の彫物のお守りが床に落ちていた。
「うっ――！」
アレフは拾おうとして必死に手をのばした。だが、体が思うように動かなかった。
と、残忍な笑みを浮かべてアレフを見おろしていた竜王が、ビシッ――と、無残にもそのお守りを踏みつぶしたのだ。
「あっ！」
と、思ったつぎの瞬間、アレフは炎の玉を頭に浴びた。

「うっ！」
頭が割れるようなすさまじい衝撃だった。すーっと気が遠くなった。意識が薄れたのだ。
だが、竜王は容赦なくアレフに炎の玉を浴びせた。そのたびにアレフの体は凄まじい衝撃を受けて、まるで海老のようにはねた。
アレフの目の前がかすんで、まっ白な世界になった。と、父ガウルの顔が、母ジェシカの顔が、ラルス十六世の顔が、ガルチラの顔が、一〇〇〇年魔女の顔が、旅の途中で会った人たちの顔が——なつかしい人たちの顔が走馬灯のように浮かんでは消えた。と、
「アレフ！　アレフ！」
という叫び声が聞こえてきた。ローラ姫の声だった。
「頑張って、アレフ！　最後まであきらめないで！　アレフ！　アレフ！」
ローラ姫の美しい顔が浮かんだ。
「そうだ！　負けてなんかいられるかっ！　負けてなんか！」
アレフは、ローラ姫に応えるように、薄れて行く意識のなかで叫んだ。
と、ローラ姫の顔がふしぎなまばゆい光につつまれて光り輝いた。そのときすーっと意識がもどってきた。うっすらと目をひらいてぎょっとなった。目の前に、おそろしい竜王の顔があった。
竜王は、気を失いかけたアレフの首をつかんで、最後のとどめを刺そうとしていたのだ。鋭い爪がアレフの肌に食いこんで、血がだらだら流れていた。おそらく、爪が食いこんだ痛みで、ア

レフの意識がもどったのだろう。
「ゼィゼィ――ゼィゼィ――これまでだ――これで、遊びはしまいだ――！」
竜王はすさまじい眼でにらみつけ、のどを鳴らしながらおどろおどろした声でいった。
「これでなっ――！」
だが、竜王が眼を光らせて指に力を入れたのと同時だった、アレフが必死に力を振りしぼって、
「く、くそーっ！　負けてたまるかーっ！」
渾身(こんしん)の力をこめて竜王の心臓目がけ剣を突き刺したのだ。と、剣は鍔(つば)の先まで心臓に突き刺さり、すさまじい鮮血が飛んだ。ぬこうとしても剣はぬけなかった。
「がぉぉぉっ！」
不意をつかれた竜王は思わずのけぞって、アレフを床に叩(たた)きつけると、はげしくもだえながら暴れた。そして、ふたたびアレフに襲(おそ)いかかってきた。
「われに力を――！　最後の力を――！」
やっと立ちあがったアレフは首飾りをにぎって印を結んだ。
アレフの全身が小刻みに震えたかと思うと、指先からすさまじい光が発して、竜王の心臓に突き刺さっているロトの剣の鍔(つば)の紋章(もんしょう)にあたった。と、竜王の全身に稲光(いなびかり)のような鋭い光が走った。
「がぉぉぉぉ！」

竜王は、はげしく全身を痙攣させた。

アレフはさらに力をこめた。全神経を、残っているありったけの力をこめた。

指先から出る光はさらに威力を増し、鍔の紋章がはげしく反応し、さらに竜王の全身を鋭い光が走った。

と、やがて指先から光が消えた。アレフは体力も気力も集中力もすべての力を使い切ったのだ。

「うっ――」

アレフはふらふらっとよろけたかと思うと崩れるようにその場に座りこんだ。

そして、竜王もまたおそろしい顔で天を仰いで、仁王立ちのまま動かなくなった。と、大木が倒れるように硬直したままゆっくりと倒れた。倒れながら竜王はアレフを振りむいて鋭くにらみつけた。そのとき、アレフには一瞬竜王の動きがとまったように見えた。竜王の眼はおそろしさよりも、驚きと無念さに満ちていた。いいようのない哀しい眼だった。と、

「ゼ――ゼィ――」

なにかいおうとしてかすかにのどを鳴らした。だが、それまでだった。竜王の体が急に大きくかたむくと、ロトの剣が心臓に突き刺さったまま、まっ赤などろどろの熔岩に落ちて、ぶくぶくと沈んで消えた――。

アレフは茫然として見ていた。そして、いくらか体力が回復してくると、

「やった――！　ついに竜王を倒した――！　ついに――！」

苦しそうに声を出してつぶやいた。
「そ、そうだ！　光の玉だ！」
アレフは力を振りしぼってやっと立ちあがると、右足をひきずりながらふらふらと竜王の間にむかった。立っているのさえ、やっとの状態だった。顔は醜く腫れあがり血まみれだった。全身に痛みが走った。
玉座のうしろの棚に、立派な装飾をした宝物箱があった。
「あ、あれだ！」
頑丈な錠がかかっていた。アレフは首飾りをにぎって印を結ぶと、指先にありったけの力をこめた。アレフの全身がはげしく震え出した。と、指先から光が発して、光が錠を直撃すると、カチャと音を立てて錠がはずれた。
アレフは扉をあけて宝物箱のなかを見た。朱の絹の布につつまれたまるいものがひとつあった。
「あった！」
目を輝かせてそっと取り出した。両手にすっぽりはいるほどの大きさだ。そっと絹の布を取ると、美しい光の玉が現れた。
「これが光の玉か――！　これが――！」
アレフは、じっと光の玉を見つめた。胸の奥から熱いものがこみあげてきた。
そのときだった。突然、ドドドドドドドドッ――はげしい地響きがして、床が大きく揺れた。

「うわあっ!?」
倒れそうになって、アレフはおもわず宝物箱のある棚につかまった。
地震だった。地震はさらにはげしくなった。大理石の壁や柱に、ビシビシビシッ——と、すさまじいひびが走ったかと思うと、ガラガラガラッ——いきなり壁や柱が崩(くず)れ落ちてきた。
「あっ!?」
アレフはあわてて光りの玉を革袋に入れて逃げた。
と、ズズズズーン——竜王の間が無残に崩壊(ほうかい)した。

6 夜明け

アレフは必死に逃げた。
右足の痛みとか体の痛みを気にしている余裕などなかった。
熔岩(ようがん)も踊るようにはげしく波打っていた。波頭と波頭がぶつかり合い、熔岩のしぶきが飛び散っている。宮殿(きゅうでん)前の大きな大理石の階段をやっとわたったときだった。ズズズズズーン——すさまじい音がした。
あっと振りむくと、高くそびえていた宮殿がはげしく揺れながら、ちょうど大きく傾きかけたところだった。さらに、巨大な地底の天井の岩盤(がんばん)もつぎつぎに熔岩や崩れはじめた宮殿の上に落

ちてきた。
アレフは上の階にあがって必死に逃げた。はげしい地響きがし、つぎつぎに壁や天井が土煙をあげて崩れ落ちる。アレフは、それらの落下物をかわしながら、必死に逃げた。さらに上の階、上の階、上の階へと必死に逃げた。
そして、やっと地下迷路をぬけ、地上の宮殿からそとに飛び出すと、真夜中だというのに、空をおおった雲はぶきみなほどまっ赤だった。だが、城門をぬけて、
「あーっ!?」
愕然とした。
ゴォォォォ——と、音を立てて、荒れ狂う海がすぐ目の前に迫っていたのだ。岬の上まで海があがってきていたのだ。目のくらむような断崖絶壁の下に打ち寄せていた波が、目の高さまであがってきたのだ。
アレフは必死で陸地にむかって逃げた。と、そのときだった。後方ですさまじい音がとどろいた。
はっとなって見ると、岬にそびえていた城が大きな音をだして崩れ落ちていた。と、つぎの瞬間、その岬はおそろしい怒濤にのみこまれて姿を消した。
アレフはまた必死で逃げた。地面が大きく波打ってゆれる。うしろからはげしく怒濤が襲ってくる。

「そうか！」
このときになってはじめてアレフは気づいた。
「海があがってきたんじゃないんだ！　島が沈んでいるんだ！　島が！」
アレフは、方向を変え、山にむかって逃げた。岩だらけのけわしい山だ。
時間にしてどれぐらい逃げたかわからない。三時間か四時間か!?　いやもっとたっているのかもしれない。それでもうしろから、怒濤が容赦なく襲ってくる。
アレフは、必死に山頂にむかって逃げた。だが、怒濤はすぐうしろまできている。
「くそーっ！」
アレフは必死に逃げた。
目の前に山頂が見えてきた。だが、山頂に行っても結局は、怒濤にのまれてしまうに違いない。
だが、竜王を倒して自分の使命を果たしたのだから、このまま死んでも悔いはない。——ふと、そんなことを考えたときだった。
「あっ！」
アレフはつまずいて転んだ。うしろから荒れ狂う波が襲った。足はもう棒のようになっている。もう動けない。
「ローラ姫っ！」
アレフは思わずローラ姫の名を叫んだ。いま一度ローラ姫に会いたいと思ったのだ。と、

「うわああああっ！」

ドドドドドドッ――一瞬にしてすさまじい怒濤にのみこまれ、全身にすさまじい衝撃が走り、骨がきしんだ。アレフは反射的に光の玉の入っている革袋をだきかかえていた。そのとき、アレフは怒濤にもまれながら、薄れ行く意識のなかで、ほんの一瞬ふしぎな光景を見た。

手にしていた光の玉が、ピカーッとすさまじい光を発すると、目の前に立ちはだかっていたそらおそろしい巨大な魔物がその光を浴びて、苦しそうに暴れた。どうやらそこはどこかの宮殿の一室らしかった。と、アレフの後方から仲間とおぼしきひとりの戦士が、いきおいよく魔物に斬りかかった。戦士はだれだかわからないが、見覚えのあるなつかしい顔をしていた。と、アレフはさらに光の玉を持つ手に力をこめると、さらに強烈な光が魔物を直撃した。魔物はすさまじいいきおいで爆発すると、まっ黒な血があたり一面をおおい、まっ暗な闇になった。と、そのむこうの奥にまっ白に光り輝く神殿が見えた。だが、よく見るとそれは神殿ではなかった。一羽の巨大な鳥だった。まっ白な翼を広げた美しい鳥だった。

戦っていた相手は大魔王ゾーマであり、白い美しい鳥は伝説の鳥だった。そして、アレフは勇者ロトだったのだ。アレフが光の玉の入っている革袋をだきかかえたとき、アレフの体に流れている勇者ロトの血の記憶が、ほんの一瞬の夢として蘇ったのだ。だが、アレフには理解できるはずもなかった――。

まっ白な美しい鳥はアレフにむかって飛んでくると、一面まばゆい光につつまれ、気がつくと

アレフはその鳥の背にのっていた。白い鳥は翼をはばたかせながら急上昇し、アレフは軽いめまいを覚えていた。と、ふしぎなことに、はっと意識がもどった。

と、ドドドドドドッ——と、すさまじい怒濤が目の下を走りぬけて行った。一瞬なにが起きたのか、アレフにはわからなかった。

「あっ!? お、おまえは!?」

アレフは驚いて見あげた。

大鷲だった。ガルチラの大鷲がアレフの背中を両足でしっかりとつかみ、上空にむかって急上昇していたのだ。アレフが怒濤にのみこまれたとき、間一髪助けてくれたのだ。大鷲はさらに急上昇した。

すぐ下に山頂が見えた。が、その山頂もあっという間に怒濤にのみこまれて、やがて大きな渦のなかに姿を消してしまった。そして、眼下のけわしい山脈も見る見るうちに渦のなかにのみこまれて消えて行った。

しばらくするとその渦も消え、見わたすかぎりの黒々とした夜の海になった。竜王の島は完全に海底に沈んでしまったのだ。アレフガルドを支配してから二〇〇年、世界制覇への新たなる戦いを開始しようとした竜王の野望は、島とともに夢と消えてしまったのだ。

と、アレフの体が急に落下した。大鷲がアレフを離したのだ。

「うわーっ!?」

下は、広大な海だ。一瞬、目がくらんだ。と、大鷲はすばやく上空で一回転すると、落下するアレフの下に飛んできて、アレフを受けとめて背中にのせたのだった。
「お、驚いたぜ！」
アレフはほっとした。
そのときだった。新しい時代を告げるかのように、東の空からゆっくりと太陽がのぼってきた。と、見る見るうちに一面の海原が太陽の光にキラキラ反射し、青い海へと姿を変えた。
いつの間にか、澄んだ青空が広がっていた。アレフは目を輝かせて空を見た。
どこまでも青く澄んだ空だった。こんな美しい空を見たのは、もちろん生まれて初めてだった。
目の下に見える海も、空と同じように、どこまでも青く澄んでいた。聖なるほこらにわたるとき見た海と同じような、美しい穏やかな海だった。
アレフは、深呼吸した。生臭い血の匂いはどこにもなかった。
「やったんだ！」
思わずアレフは叫んだ。
「ついに竜王を倒したんだ！」
やっとアレフの胸に実感としてこみあげてきた。晴れやかな気持ちだった。
「ついに光の玉を取りかえしたんだ！」
アレフは革袋の上からそっと光の玉に触ってみた。と、急に、怒濤にのみこまれたとき見たふ

しぎな光景を思い出した。魔物と戦っていたとき持っていたのは、この光の玉ではなかったのか、と思ったのだ。そして、ふと竜王が倒れるときの、あの哀しい眼を思い出した。
人間を保護する神として生まれてきた竜王が、魔物に育てられ、魔物の王として二〇〇年もの長い間、このアレフガルドを支配してきたのだ。光の玉は、竜王の母の竜の女王が命とひきかえにこの世に残したものだ、と竜王がアレフにいった。それはどういうことなのかアレフにはわからない。だが、運命とはなんてふしぎで皮肉なものだろう――アレフはそう思った。そして、
「光あるかぎり、闇もまたある――」
精霊ルビスが勇者ロトにいったという、ロトの洞窟に刻まれていた言葉を思い出してアレフはつぶやいた。
「それにしても――」
竜王が哀しい眼で振りむいたあのとき、竜王はなにかをいおうとしてのどを鳴らした。一体、なにをいおうとしたのだろう。なにがいいたかったのだろう。なにが――ふと、気になった。
アレフをのせた大鷲は、まっすぐ南へむかって飛んだ。

竜王の島を襲った地震はアレフガルド全土をも揺るがせた。
新年を迎えたばかりの真夜中の三時間にも及ぶはげしい地震に、アレフガルドの人々は二〇〇年前の天変地異を思い起こし、不安と恐怖に脅えながら朝を迎えたのだ。

ローラ姫の残った聖なるほこらもはげしく揺れた。その地震以来、ローラ姫は不安に脅えながら、竜王の島のある北の空をじっと祈るように見つめていた。

だが、二日目の朝。大鷲にのって飛んできたアレフの姿を見つけて、ローラ姫はぱっと顔を輝かせた。そして、すべてを悟ったのだ。

「アレフ！」

ローラ姫は思わず両手を振った。

「ローラ姫！」

アレフも手を振って応えた。

大鷲は急降下すると、聖なるほこらの入口でアレフをおろし、大きな翼をはばたきながら大空へもどって行った。

「ローラ姫！」

アレフとローラ姫は一瞬見つめ合った。

「やったのですね⁉　ついに竜王を倒したのですね⁉」

「ああ！」

アレフは大きくうなずいた。

ローラ姫の瞳に大きな涙が浮いていた。と、思わずアレフの胸に飛びこんだ。

「やっと、アレフガルドに平和がもどったんだ！　やっとね！」

そういってアレフはローラ姫を強くだきしめた。

アレフの胸に顔をうずめたローラ姫は、涙を流しながらうなずいた。そのとき、美しい笛の音が聞こえてきた。なつかしい笛の音だった。アレフは思わず顔を輝かせて叫んだ。

「ガルチラ!?」

いつの間にかすぐそばの岩に座って横笛を吹いていたガルチラが、白い歯を見せてほほえむと岩から飛びおりた。

「ガルチラ！」

たまらずアレフはだきついた。

「生きていたのかっ！　て、てっきりぼくは——！」

アレフの目頭が熱くなった。それ以上言葉にならなかった。

「あんなところで死んでたまるか。あいつが助けてくれたのさ」

ガルチラはそういって、上空をゆっくり舞っている大鷲を見た。

「敵(かたき)もちゃんと討った」

そういってガルチラは、砂に埋(う)もれたあとのことを話した。

「あいつが、倒れたおれを森のせせらぎまで運んで、薬草をさがしてきてくれたのさ。まだ、完全じゃないが、なんとかここまではこれた」

「そうか！　そうだったのか！」

「さてと！」
ガルチラは、大きく背伸びすると、深呼吸した。
「まっすぐ帰るんだろ？　ラダトームへ」
「そのつもりだけど。ガルチラは？　よかったら一緒にラダトームへ行こうよ！」
「いや、行かなきゃならないとこがある」
「えっ？」
「じいさんの墓さ。おまえとはじめて会ったあの砂漠のそばにあるんだ」
「じゃあ、途中まで一緒だ！　そのあとぜひラダトームにきてよ！」
「気がむいたらな」
そういってガルチラは笑った。
「よし、さっそく出発しよう！」
と、歩こうとして、
「うっ！」
と、アレフは顔を歪めた。右足にはげしい痛みが走ったのだ。ガルチラは心配そうに見た。
「大丈夫さ」
笑いながらアレフは右足をひきずって歩き出した。痛くても自分の足で歩きたかったのだ。竜王の魔力から開放されたこのアレフガルドの大地を、しっかりと自分の足で踏みしめながら——。

上空には、大鷲が美しい翼をひろげて優雅に舞っていた。
青く澄んだ空は、どこまでも高かった——。

終章

地震のあと、アレフガルドに春が駆け足でやってきた。

風はやわらぎ、水はぬるみ、木の芽が吹き出し、花のつぼみがひらいたのだ。

竜王に支配されてからは、春とは名のみだった。だが、やっと二〇〇年ぶりに本来の春がアレフガルドに訪れたのだ。

人々には笑顔がもどり、町は活気づいてきた。そして、ラダトーム城には旅人たちによって各地の様子があいついで報告された。

北の荒れた灰色の海は、おだやかな青い海に変わったという。荒涼とした砂漠には、草が芽を出したという。竜王の毒に汚染された川にはきれいな水がよみがえり、涸れていた川には水がもどったという。そして、砂漠や平原や森から魔物が姿を消したという。

アレフとローラ姫がラダトーム城に凱旋したのは、春たけなわの女神の月の中旬だった。竜王を倒しにラダトームを旅立ってから、すでに四五〇日がたっていた。

美しく晴れわたった空に、花火の音がとどろいた。

ラダトーム城の巨大な円塔の見張り番の兵が、西のなだらかな丘陵にアレフとローラ姫の姿を見つけると、いきおいよく花火を打ちあげたのだ。
その花火の音を聞いて、ラダトームの町のほとんどの人たちがラダトーム城の城門に駆けつけ、ラルス十六世や近衛隊、大勢の兵士たちとともに、若き勇者と美しい姫を歓呼の声で迎えたのだ。
父のガウル、母のジェシカ、幼ともだち、老祈禱師メルセル、ロウソク屋や、肉屋や、道具屋や、食堂の主人やおかみさんたち――町の人たちのなつかしい顔がたくさんあった。
「勇者よ！」
ラルス十六世は目をうるませながら、万感をこめてアレフを見つめた。
「約束通り竜王を倒してきました。これが、光の玉です」
アレフはラルス十六世に絹の布のつつみを丁重に差し出した。
「これが光の玉か！　これが！」
ラルス十六世は布をとってじっと美しい光の玉を見つめると、光の玉を近衛隊長にわたし、と、アレフの手を両手で強くにぎりしめた。その目から大きな涙がこぼれていた。
「よくやった、よくやったぞ、アレフ！」
「王さま。ローラ姫です。十六年前に別れたままの」
ラルス十六世はアレフの一歩うしろに控えていたローラ姫をじっと見た。と、大粒の涙をぼろぼろ流しながらしきりに大きくうなづくと、

「よ、よく生きておった!」
と、ひしとだき寄せた。ローラ姫の目からもとめどもなく涙が流れていた。
「話はガライから聞いておった」
涙をぬぐうとラルス十六世はアレフを見た。
「ガライ?」
「三か月ほど前の夜のことじゃや。わしがなかなか寝つけなくて起きておったら、ガライの像が現れていったんじゃよ。ローラ姫は生きておられます。勇者ロトの血をひく者が竜王を倒し、姫を連れて凱旋するでしょう、とな」
そういうと、ラルス十六世はまたローラ姫をだきしめた。
アレフはガウルとジェシカのところに駆け寄った。二人ともじっと涙をこらえていた。
「ただいま。とうさん、かあさん」
「よく無事で帰ってきてくれたな」
と、ガウルは両手でぎゅっと強くアレフの手をにぎりしめ、
「こんなに大きく、たくましくなって!」
ジェシカは、まぶしそうに見あげた。と、ジェシカの目から、こらえていた涙がせきを切ったように流れた。あとは言葉にならなかった。アレフはたまらずジェシカをだきしめた。アレフの目にも涙が浮いていた。

「ところで、勇者よ」
ラルス十六世はアレフを見ていった。
「そちこそ、平和になったこのアレフガルドを治めるにふさわしい。わしにかわってこの国を治めてくれまいか」
「えっ!?」
「どうじゃ？」
「申しわけありません。お言葉はありがたいのですが、ぼくはドムドーラに行ってこの手で町を再建したいんです」
「ドムドーラを!?」
「はい。ドムドーラを昔のような美しい町にしたら、また旅に出るつもりです」
「なに!?　旅に!?」
「はい。ぼくに治める国があるなら、ぼく自身の手でさがしたいのです。ローラ姫」
アレフはじっとローラ姫を見た。
「ついてきてくれるね」
「はい――」
ローラ姫は、熱い瞳(ひとみ)でうなずいた。
その日、ラダトームの町は凱旋のお祝いで沸(わ)き、賑やかなお祝いの行事が、夜がふけるまで

つづいた。
そして、ラルス十六世と町の代表が、この日を「凱旋平和記念日（がいせんへいわきねんび）」と定め、毎年祝うことに決めたのだ。
平和――この大切さをいつまでも忘れないために。若き勇者アレフの「勇気」と「正義」と「平和を愛する心」を、永久にたたえるために――。
その後、ラダトームを旅だったアレフはローラ姫と一緒に故郷ドムドーラの町を再建すると、新天地をもとめてはるか遠い大陸へわたったという。そして、その地に美しい理想の国を築いたという――。

あとがき

二月九日、手塚治虫先生が亡くなった。ちょうど第六章を書き始めたところだった。ショックだった。お通夜に行くために、喪服を出したが、一年前までぴったりだったのが入らなくなっていた。これもショックだった。わたしはあわてて洋服屋へ飛んだ。
改めて手塚先生のご冥福をお祈りいたします。
それにしても、無謀というか、いい加減というか、シナリオライターの性癖というか、今にして思えばぞっとする。「ドラクエの小説を書きませんか」と言われて、「いいですよ」と簡単に引き受けてしまったことを、何度後悔したことか。とにかく、この二カ月地獄だった。悪戦苦闘の連続だった。まさに竜王に立ち向かって行く主人公の心境だった。最後は意地と根性しかなかった。実は、なにを隠そう、わたしは全くゲームが××なのだ!（読者のみなさん、好き勝手な文字を当てて思いっきり罵倒してくれて結構です）
素晴らしいイラストを描いてくれたいのまたむつみさん、アイデアを提供してくれたドラクエ博士の横倉廣さん、根気よく付き合ってくれたエニックスプロダクツの保坂嘉弘さん、ありがとうございました。

一九八九年三月　　　　高屋敷英夫

小説　ドラゴンクエスト

一九八九年 四 月一五日 第 一 刷発行
一九八九年一二月一〇日 第 四 刷発行

著　者　高屋敷英夫
設定協力　横倉　廣
編集人　千田幸信
編　集　保坂嘉弘

ENIX

発行者　福嶋康博
発行所　株式会社エニックス
東京都新宿区西新宿7-5-25　西新宿木村屋ビル5F　〒160
印刷所　大日本印刷
乱丁・落丁本はお取り替え致します。